

審査意見への対応を記載した書類（6月）

（目次） 静岡大学 グローバル共創科学部 グローバル共創科学科

【設置の趣旨・目的等】

1. 本学部の目的等に掲げる「グローバル」「共創」「総合知」をどのようなものとして定義するかについての説明がなく、これらの用語が目的となるのか手段になるのかといった位置づけも明確ではない。また、何を問題として捉えているのか、何を目的としているかの根幹的な部分が明確でないため、設置の趣旨・目的等以外の養成する人材像や3つのポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びアドミッション・ポリシーをいう。以下同じ。）の内容や妥当性、それぞれの整合性も不明確となっていることから、改めて説明するとともに、必要に応じて、養成する人材像や3つのポリシーなど関係する記載も適切に改めること。その際、学生や社会に対しても分かりやすく伝わるように留意すること。

（是正事項）・・1

2. ディプロマ・ポリシーに「(4) ものごとを適切に分析することができる」ことが掲げられているが、「ものごと」とは何を指しているのか、「適切に分析できる」とはどのような分析能力を修得することを想定しているのかが判然とせず、ディプロマ・ポリシーとして適切であるとは判断できない。このため、養成する人材像を踏まえた上で適切なディプロマ・ポリシーが設定されていることについて具体的に説明するとともに、必要に応じて本記載を適切に改めること。また、必要に応じて、カリキュラム・ポリシーや対応する授業科目との整合性等も合わせて適切に改めること。

（是正事項）・・24

【名称等】

3. 審査意見1・4の対応を踏まえ、本学部等の名称がディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及び教育課程を踏まえて適切なものであることを改めて説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。また、学生募集に当たっては、学生や社会に対しても分かりやすく説明するよう努めること。

（是正事項）・・26

【教育課程等】

4. 審査意見1のとおり、本学部の設置の趣旨、人材養成像及び3つのポリシーの妥当性に疑義があるため、教育課程の妥当性を判断することができない。このため、以下の点及び関連する他の審査意見への対応を踏まえて、3つのコースとの関係や3つのコースごとに学生が修得すべき専門的な知識・能力も明確にしつつ、本学部における教

育課程が、適切に編成されていることを説明すること。

(1) しっかりとした専門性を修得しつつ、総合性を持った共創型の人材を育成できる教育課程及び仕組みとなっているか不明確であるため、各コースの詳細（コースごとの人数の目安や転コースの可否、選抜方法等）にも触れながら、カリキュラムマップや履修モデル等を活用して具体的に説明すること。

(2) シラバスの内容について、例えば、生命圏循環共生学研究ⅠとⅡでは科目内容の違いが不明確であるなど、学生にわかりやすく示す観点から適切であるとは判断ができないものが散見されるため、具体的に説明すること。

(3) 上記(1)(2)の対応に応じて、科目区分等の名称についても本学部の特色をより明確にする観点から適切に改めること。

(是正事項)・・ 36

5. 本学部の入学者選抜では、例えば、共通テストを課さない学校推薦型選抜や社会人、留学生については数学や理科の学力を確認することとなっていないが、生命圏循環共生学研究Ⅰなどの数学や理科の一定の学力が必要と見受けられる科目は必修となっているものの、円滑な履修を支援する体制について記載がなく、適切な教育課程や支援体制となっているか不明確である。適切な教育課程が編成されていることを改めて説明するとともに、必要に応じて、入学者選抜の方法も含めて関係する記載について適切に改めること。

(是正事項)・・ 96

6. 設置の趣旨等を記載した書類の17ページの図では到達目標としてITパスポートの記載があるが、同資料の取得可能な民間資格には記載がないため、適切に改めること。

(改善事項)・・ 108

【入学者選抜】

7. 設置の趣旨等を記載した書類の17ページの図では到達目標としてITパスポートの記載があるが、同資料の取得可能な民間資格には記載がないため、適切に改めること。

(是正事項)・・ 109

【書類不備】

設置認可申請書類に誤記や不備があるため再度確認を行い、修正した。

(その他)・・ 110

(是正事項) グローバル共創科学部 グローバル共創科学科

1. 本学部の目的等に掲げる「グローバル」「共創」「総合知」をどのようなものとして定義するかについての説明がなく、これらの用語が目的となるのか手段になるのかといった位置づけも明確ではない。また、何を問題として捉えているのか、何を目的としているかの根幹的な部分が明確でないため、設置の趣旨・目的等以外の養成する人材像や3つのポリシー（ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及びアドミッション・ポリシーをいう。以下同じ。）の内容や妥当性、それぞれの整合性も不明確となっていることから、改めて説明するとともに、必要に応じて、養成する人材像や3つのポリシーなど関係する記載も適切に改めること。その際、学生や社会に対しても分かりやすく伝わるように留意すること。

(対応)

A. 「育てる人間像」及び「用語の定義」

現代の社会課題は、環境やエネルギーをめぐる地球規模の課題から、人口減少・少子高齢化をめぐる日本の課題に至るまで、問題が多様化・複雑化しており、一つの専門分野の専門知のみによっては解決できず、多様な専門知を活用し、問題解決することが求められている。そこで「グローバル共創科学部」は、地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、社会的課題が複雑多様化する現代社会の状況を踏まえ、多様な人々と協働した取り組みの下、人文・社会科学から自然科学に至る広汎な知をつなぐことで、複眼的な視点から社会的課題を捉え、「総合知」を創造・活用し、未来社会を活力と魅力溢れるものとして構想できる「共創型人材」を育成することを目的とする。

本学部が人材養成において重視するのは、次の三点である。

- (1) 「共創」という手法を用いること。
- (2) 「グローバル」な視点を踏まえていること。
- (3) 課題解決に寄与する「総合知」を生み出すこと。

以下、「共創」「グローバル」「総合知」の定義を説明する。

(1) 共創

本申請書において「共創」は、多様な立場の人々が共に社会課題を解決し、より良い未来社会を実現することである。従来型の学部では、工学、理学、農学、法学、経済学、文学など特定の専門分野を掘り下げ専門知を獲得することで、課題解決を目指してきた。しかし現在、一つの視点、一つの専門的見地から問題を考えるだけでは問題解決には至らないケースが増え、多様な視点、多様な専門分野から物事を考え、多様な知を結びつけ問題解決することが求められている。そこで本学部では、「共創」という手法を用いることができる人材、

すなわち多様な人々の協働の下、人文・社会科学から自然科学に至る広汎な知をつなぎ、複眼的観点から社会課題を捉え未来社会を構想できる人材を育成することを目的とする。本学部では、こうした人材を「共創型人材」と呼んでいる。

本学部では、共創型人材が解決に寄与すべき社会的課題を、「現代に生きる人々が、より創造的かつ友好的に暮らすための課題」、「新たな価値を創生し、持続可能な循環型社会を実現するための課題」、「人間はどう在るべきかを問い続け、真の豊かさを主体的に実現するための課題」という3つの未来課題群として分類している。申請書類に記載したように、本学部は、全学学士課程横断型教育プログラムである地域創造学環の成果を活かし、地域創造学環を発展的に再編成した組織である。地域創造学環では、「地域共生分野」「地域環境・地域防災分野」「アート&マネジメント」「スポーツプロモーション」といった教育プログラムを通じて、他者との共生、サステナブルな社会、真の豊かさというテーマに取り組んできた。本学部は、これらのテーマを上記の「未来課題群」として継承した上で、課題解決に必要とされるグローバルな要素や理系の専門知を加味したものである。地域創造学環における「地域共生分野」と「アート&マネジメント」については、共に地域共生を目指し地域に根ざす分野であったため、ここにグローバルな要素を加え補強し「国際地域共生学コース」とし「現代に生きる人々が、より創造的かつ友好的に暮らすための課題」の未来課題へ対応するコースとする。サステナブルな社会を目指す「地域環境・地域防災分野」については、既にグローバルの要素を含んでいたが理系的な要素が不足していたため、課題解決に不可欠な理系的な技術の要素やイノベーションにつながる技術の要素を加味して「生命圏循環共生学コース」として「新たな価値を創生し、持続可能な循環型社会を実現するための課題」の未来課題へ対応するコースとする。「スポーツプロモーション」については、地域社会における真の人間の豊かさを追究していたが、未来社会を考える上で人間一人ひとりのウェルビーイングをグローバルな視点で考えることも不可欠であり、従来欠けていたグローバルの視点を加え、更に理系的要素も補強した上で、最先端技術と人間（の真の豊かさ）の融合を目指し、心理、倫理、情報などの分野を加えて「総合人間科学コース」とし「人間はどう在るべきかを問い続け、真の豊かさを主体的に実現するための課題」の未来課題へ対応するコースとする。以上のとおり、地域創造学環を発展的に継承するものとして3つのコースを設定する。

各コースの概要は以下のとおりである。

(a) 国際地域共生学コースでは、「現代に生きる人々が、より創造的かつ友好的に暮らすための課題」に取り組む。格差・貧困、差別・排除、紛争・対立など、価値観や文化が異なる人々の共生を阻む様々な課題が世界で発生している。本コースでは、人々の多様性への理解及び地域社会と国際社会の関係性への理解に基づいて、国際化する地域社会に適した人権、法、社会保障の構築（「社会的排除とソーシャルインクルージョン」、「比較文化から見る法」、「国際・地域の安全と法」、「国際福祉社会論」など）、包摂的な生活環境や災害（「住

居計画」、「防災まちづくり」など)への対応などに代表されるような地域社会の課題を地球規模の視点から読み解き、多様な人々と協働し、文化・産業・生活など地域独自の魅力・価値を活かして課題の解決を構想・発信できる人材を育成する。

(b) 生命圏循環共生学コースでは、「新たな価値を創生し、持続可能な循環型社会を実現するための課題」に取り組む。本コースでは、気候変動や生物多様性の危機、環境汚染などの問題に対応し(「環境再生科学」、「環境工学」など)、資源やエネルギーの再生(「資源循環化学」、「材料科学」、「バイオテクノロジー」、「環境微生物学」など)、自然と経済とが両立できるグリーンエコノミーの実現(「環境共生社会論」、「環境と経済」、「農村・森林の環境と法」など)、激甚化する自然災害の被害低減など課題(「自然災害の現象」など)において、技術と制度の両面からサステナブルな社会の構築に貢献できる人材を育成する。

(c) 総合人間科学コースでは、「人間はどう在るべきかを問い続け、真の豊かさを主体的に実現するための課題」に取り組む。ここで言う「豊かさ」とは、健康(ウェルネス)だけにとどまらない、全て満たされた状態であるウェルビーイングである。人のウェルビーイングは、身体、心、周囲の環境など、さまざまなものに影響を受けていることから、本コースでは、スポーツ科学(「スポーツの理論と実践 I, II」など)、哲学(「ウェルビーイングの哲学」など)、心理学(「コミュニティ心理学」など)、身体科学(「身体機能のメカニズムと計測」など)、法学(「人間科学の課題と法」など)、倫理学(「生命・医療倫理学」など)等の多様な学問を通じて人間のウェルビーイングを探究する。また、やがて到来する Society5.0 では、AI・ロボットとの共生が不可欠であることから、本コースでは、AI・ロボットと人間との違いは何か、こうした社会において人間の生活や幸福はどのような影響を受けるのかについても考察(「生命・医療倫理学」など)し、変化し続ける社会において人間の幸福を主体的に問い続け、実現することのできる人材を育成する。

(2) グローバル

本申請書において「グローバル」は、

- ① 地球規模の視点から社会的課題に取り組むこと
- ② 国際社会で主体的に活躍できること

の二つを意味する。本学部が対象とする社会的課題は、環境問題であれ、エネルギー問題であれ、日本や静岡などいずれの場所で問題となっているにせよ、地球規模の問題として発生しており、いずれの場で問題解決に取り組むにせよ、地球規模の視点から社会課題に取り組むことが求められている。そのため本学部で育成する人材は、①の意味でグローバルな人材である必要がある。さらに、課題解決にあたっては、国際的な場での共創を通じて問題解決を要することも多いため、外国語(特に英語)教育をはじめ、②の意味でグローバルな人材の育成も目的としている。

(3) 総合知

本申請書において「総合知」とは、共創のプロセスにおいて、人文・社会科学、自然科学等の俯瞰的、複眼的視点から総合的に検討する中で、課題解決のために生み出される知である。ここで言う「総合知」とは、令和3年度版「科学技術・イノベーション白書」において、「人文・社会科学の『知』と自然科学の『知』の融合」(27頁)として定義されている総合知と同一のものである。あるいは、令和4年度の教育未来創造会議「我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について(第一次提言)」においても「人文・社会科学の厚みのある『知』の蓄積を図るとともに、自然科学の『知』との融合などにより、あらゆる分野の知見を総合的に活用し社会課題への的確な対応を図る『総合知』の創出・活用を目指し、STEAM教育を強化し、文理横断教育を推進する」(16頁)として、同様の趣旨において取り上げられている。

以上を踏まえ、設置の趣旨等を記載した書類設置の「1. 趣旨及び必要性(1) 設置の趣旨」を修正する。

B. 目的と手段の関係について

これまで定義してきた「グローバル」「共創」「総合知」を、「目的」「手段」の観点から説明する。

本学部における人材養成の目的は、共創という手法を身につけた人材を養成すること、グローバルな視点を身につけた人材を養成すること、その過程で総合知を生み出せる人材を養成することである。

C. 人材像とポリシーの関係・ポリシー間の一貫性

これまで述べてきたように、本学部で育てる「共創型人材」は、「共創という手法を使いこなし、更にグローバルな視点を踏まえ、課題解決に寄与する『総合知』を生み出すことのできる人材」である。こうした人材には、エビデンスに基づき社会的課題を客観的に分析した上で、グローバルな視点から共創という手法を使いこなし、課題解決に寄与する総合知を生み出す創造性が求められる。そのため本学部では、6つのディプロマ・ポリシーを設定している。以下では、各ディプロマ・ポリシーを説明した上で、カリキュラム・ポリシーとの関係について述べる。そして最後に、アドミッション・ポリシーとの関係を説明する。

1. 人文・社会科学から自然科学に至る広汎な基礎的知識を身につけている

社会的課題は多様な側面を持ち、それゆえ人文・社会科学から自然科学に至る多様な専門家が共創において連携する必要がある。こうした連携が実現するためには、専門家が互いのアプローチを理解する必要がある。そのため本学部が養成する共創型人材には、人文・社会科学から自然科学に至る広汎な基礎的知識が求められる。これらの知識は教養教育とも密

接に関わるため、本学部では「教養科目等を学ぶことにより、幅広い教養、国際感覚、多様性を理解する能力を養う」(CP1)というカリキュラム・ポリシーを設定している。さらに、共創を通じて社会的課題解決に貢献する人材を育成する上では、共創の基礎的な知識と、より高度な学際的知識が必要とされる。そこで、「共創科学系科目を学ぶことにより、共創に関する基礎的な知識を身につける」(CP4)、「人文・社会科学系科目及び自然科学系科目を学ぶことにより、複眼的な視点から対象を捉える力を身につける」(CP5)という三つのカリキュラム・ポリシー(科目群)を設定している。

CP4及びCP5は、申請書では「共創科学コア科目を学ぶことにより、人文・社会科学や自然科学の垣根を超えて複眼的に対象を捉える力を身につける」(旧CP5)という形でまとめられていた。しかし、「共創科学コア科目」という名称では、その多数の授業科目を見ても、この科目群において何を学ぶのか明確に伝わらないことがあるため、今回、共創の基礎を学ぶ科目、人文・社会科学系の科目、自然科学系の科目と区分し、対応するカリキュラム・ポリシーも分割した。

2. 専門的知識を社会のために活用することができる

共創という手法を使いこなし、多様な人々とともに課題解決に寄与する総合知を生み出すことに積極的に寄与するためには、多様な専門家が語ることを理解するだけでなく、自らの専門性を持ち、それを社会的課題解決のために活用できる必要がある。こうした能力は、専門的な教育を通じて育成されるため、本学部では、「専門科目を学ぶことにより、各コースの専門的な知識・能力を修得する」(CP6)というカリキュラム・ポリシーと、それに対応する科目群を設定している。

なお、申請書類では、「資格科目等を学ぶことにより、コーチングアシスタント、自然再生士補、環境再生医などの資格を取得する」(旧CP8)というカリキュラム・ポリシーを設定していた。これらの資格は本DPと関係するが、資格によって科目群との結びつきが異なる上に、全員が資格を取得するわけではないため、学生が誤解を招かないようカリキュラム・ポリシーとしては削除することとした。資格の取得については、審査意見4でも述べるように、学びのアドバイザーが「学修の進め方に関する事項」の中で履修指導する。

3. 人間理解に基づき、価値観や文化が異なる多様な人々と協働できるコミュニケーション力と実践力を身につけている

共創では、専門性だけでなく、価値観や文化的背景が異なる人たちと共通の目標に向かって共に取り組む協働が本質的に求められる。こうしたプロセスを具体的に進める力を身につけるためには、「教養科目等を学ぶことにより、幅広い教養、国際感覚、多様性を理解する能力を養う」(CP1)、「共創科学系科目を学ぶことにより、共創に関する基礎的な知識を身につける」(CP4)、「人文・社会科学系科目及び自然科学系科目を学ぶことにより、複眼的な視点から対象を捉える力を身につける」(CP5)というカリキュラム・ポリシーを通じて育

まれる人間理解や価値や文化の可能性の理解に加え、自らとは異なる価値観・文化的背景をもつ他者と協働する体験が必要になる。さらに、今日では、共創は言語の異なる者同士の間でなされることもあるため、国際語としての英語を実際の場面で使えるレベルで身につけておくことも重要である。そこで本学部では、「グローバル系科目を学ぶことにより、多様な課題を結びつけ、多様な人と協働できる力を身につける」(CP2) というカリキュラム・ポリシーを立て、この科目群に体験型授業とコミュニケーション中心の英語教育を含めることにした。これにより、国際的な舞台でも主体的に活躍できるグローバル人材を育成する(「グローバル」の意味②)。

申請書類では、「国際的なコミュニケーション力を身につけている」(旧 DP3) というディプロマ・ポリシーを立て、この能力を「外国語科目等を学ぶことにより、グローバルな視点から対象を捉えるツールとして外国語を活用できる能力を身につける」(旧 CP2) というカリキュラム・ポリシーと結びつけていた。しかしこれでは、英語力だけでグローバル人材になれるような誤解を生じさせるため、今回、科目群、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーの改訂を行なった。また、改訂する中で、申請書類において立てていた二つのディプロマ・ポリシー「多様性を理解し、尊重することができる」(旧 DP6)、「多様な背景をもつ人たちの協働を生み出すことができる」(旧 DP7) を整理することとした。

4. 地球規模の課題と地域社会の課題を結びつけて検討することができる

本学部で育成するグローバル人材は、国際的な舞台で主体的に活躍できるだけでなく、地球規模の課題と地域社会の課題を別々のものとして捉えず、両者の間にある複雑かつ多様な関係を踏まえて社会的課題に取り組むことができる人材である(グローバルの意味①)。こうした視点を身につけるためには、未来課題群の複雑性・多様性並びに人文・社会科学及び自然科学における最先端の研究成果を学ぶとともに、体験型授業を通じて地球規模の課題と地域社会のつながりを実感することが必要となる。そこで本ディプロマ・ポリシーに対応するカリキュラム・ポリシーは、「グローバル系科目を学ぶことにより、多様な課題を結びつけ、多様な人と協働できる力を身につける」(CP2)、「共創科学系科目を学ぶことにより、共創に関する基礎的な知識を身につける」(CP4)、「人文・社会科学系科目及び自然科学系科目を学ぶことにより、複眼的な視点から対象を捉える力を身につける」(CP5)になる。

申請書類では、先に述べた「グローバル」の二つの意味が明確に使い分けられておらず、ディプロマ・ポリシーでは、「国際舞台で主体的に活躍できる」という側面のみ強調されていた。そこで今回の改訂では、二つ目の意味でのグローバルを示す本ディプロマ・ポリシーを新たに導入する。

5. エビデンスに基づき客観的に社会的課題を分析することができる

社会的課題に取り組む上では、その課題や背景にある要因を、恣意的にではなく、客観的に分析する必要がある。こうした客観的分析は、インタビューなどの質的調査や、アンケート

トなどの量的調査を通じて、エビデンスを示すことと密接に関係している。また、今日、エビデンスを示す上で、統計学、人工知能、プログラミングなど、データサイエンスに基づくビッグデータ解析も必要不可欠になっている。そこで本学部では、「データサイエンス系科目を学ぶことにより、課題を分析し、解決するために必須となるデータ解析の基礎的な素養を身につける」(CP3) というカリキュラム・ポリシーを立て、調査法やデータサイエンス系科目を履修することとしている。

申請書類においてこのディプロマ・ポリシーに対応するのは、「ものごとを適切に分析できる」(旧 DP4) である。しかし是正意見2にあるように、この DP では「ものごと」とは何であるのか、「適切に分析する」とはどのようなことであるのか読み取ることができないため、今回の改訂を通じてより明確化した。

6. 社会的課題の解決策を発想するための創造性を身につけている

社会的課題の解決に寄与する総合知を生み出すためには、これまでの知識をまとめあげ、そこから新たなものを発想する力が求められる。こうした力は、フィールドワークでの体験や、専門教育において自ら課題を設定し卒業論文を執筆する中で培われる。そこで本学部では、学生がこうした創造性を身につけられるように、「グローバル系科目を学ぶことにより、多様な課題を結びつけ、多様な人と協働できる力を身につける」(CP2)、「専門科目を学ぶことにより、各コースの専門的な知識・能力を修得する」(CP6) という二つのカリキュラム・ポリシーを設定し、これらに対応した科目(グローバル系科目、専門科目)を設置している。

また、「卒業研究を通じて、新たな課題を主体的に見出し、知識や思考力、技術を活用して探究し解決する能力を涵養すると共に、協調性や倫理観、コミュニケーション能力、表現力を身につける」(CP7) というカリキュラム・ポリシーは、DP1～DP6 に関連するものである。

なお、本学部では、こうした創造性の基礎となる「デザイン教育」に関連する科目も、共創科学系科目や人文・社会科学系科目に入れている。ここでの「デザイン」は、「さまざまなアイデアを絞り込み、形にしていく」という意味で用いている。他方、申請書類では、「未来社会」と「デザイン」が共に使われる場合もあるが、この場合の「デザイン」は「構想」を意味している。申請書では、デザインという言葉がこれら二つの意味で用いられているため、「構想」の意味でのデザインに関しては「構想」へ置き換える。

最後に、アドミッション・ポリシーとカリキュラム・ポリシーとの関係を示す。本学部のアドミッション・ポリシーは、「求める学生像」「大学入学までに身につけておくべき教科・科目等」に基づき以下の三点にまとめられ、

- A. 外国語（特に英語）や数理・データサイエンスを学ぶ上で必要な基礎的知識として、英語や数学を履修していること
- B. 文系と理系を含めた様々な分野を学習し、幅広い基礎的知識を修得していること
- C. 地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、様々な社会的課題の解決に取り組み、よりよい未来社会の実現に貢献することに意欲をもっていること

このうちAは、CP2（グローバル系科目）及びCP3（データサイエンス系科目）に、Bは、CP1（教養科目）、CP4（共創科学系科目）、CP5（人文・社会科学系科目、自然科学系科目）に、Cは、CP6（専門科目）及び7（卒業研究）につながっている。

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<p>（2ページ）</p> <p><u>現代の社会課題は、環境やエネルギーをめぐる地球規模の課題から、人口減少・少子高齢化をめぐる日本の課題に至るまで、問題が多様化・複雑化しており、一つの専門分野の専門知のみによっては解決できず、多様な専門知を活用し、問題解決することが求められている。そこで「グローバル共創科学部」は、地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、社会的課題が複雑多様化する現代社会の状況を踏まえ、多様な人々と協働した取り組みの下、人文・社会科学から自然科学に至る広汎な知をつなぐことで、複眼的な視点から社会的課題を捉え、「総合知」を創造・活用し、未来社会を活力と魅力溢れるものとして構想できる「共創型人材」を育成することを目的とする。</u></p> <p><u>本学部が人材養成において重視するのは、次の三点である。</u></p> <p><u>（1）「共創」という手法を用いること。</u></p> <p><u>（2）「グローバル」な視点を踏まえていること。</u></p>	<p>（2ページ）</p> <p>「グローバル共創科学部」は、地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、社会的課題が複雑多様化する現代社会の状況を踏まえ、多様な人々と協働した取り組みのもと、人文・社会科学から自然科学に至る広汎な知を繋ぐことで、複眼的な視点から社会的課題を捉え、「総合知」を創造・活用し、未来社会を活力と魅力溢れるものとして構想・デザインできる「共創型人材」を育成することを目的とする。今日は、<u>グローバル課題とローカル課題とが相互に連動する時代であり、グローバルな課題に取り組むのであれ、ローカルな課題に取り組むのであれ、双方が連動する中で双方の視点をもって自らが設定した課題解決に取り組むことは、課題解決を実質的な形で進める上で必要であり、ローカルという足場をもつ地方国立大学であるからこそ果たすべき独自の役割である。</u></p> <p>静岡大学は、静岡県内の2つの政令指定都市である静岡市と浜松市に各々キャンパスをもち、人文社会科学部、教育学部、</p>

(3) 課題解決に寄与する「総合知」を生み出すこと。

「共創」とは、多様な立場の人々が共に社会課題を解決し、より良い未来社会を実現することである。従来型の学部では、工学、理学、農学、法学、経済学、文学など特定の専門分野を掘り下げ専門知を獲得することで、課題解決を目指してきた。しかし現在、一つの視点、一つの専門的見地から問題を考えるだけでは問題解決には至らないケースが増え、多様な視点、多様な専門分野から物事を考え、多様な知を結びつけ問題解決することが求められている。そこで本学部では、「共創」という手法を用いることができる人材、すなわち多様な人々の協働の下、人文・社会科学から自然科学に至る広汎な知をつなぎ、複眼的観点から社会課題を捉え未来社会を構想できる人材を育成することを目的とする。本学部では、こうした人材を「共創型人材」と呼んでいる。

「グローバル」とは、①地球規模の視点から社会的課題に取り組むこと、②国際社会で主体的に活躍できること、の二つを意味する。本学部が対象とする社会的課題は、環境問題であれ、エネルギー問題であれ、日本や静岡などいずれの場所で問題となっているにせよ、地球規模の問題として発生しており、いずれの場で問題解決に取り組むにせよ、地球規模の視点から社会課題に取り組むことが求められている。そのため本学部で育成する人材は、①の意味でグローバルな人材である必要がある。さらに、課題解決にあたっては、国際的な場での共創を通じて問題解決を要することも多いた

情報学部、理学部、工学部、農学部の6学部を擁し、1万人以上の学生が学ぶ、県内最大規模の総合大学であるが、新学部では人文・社会科学から自然科学に至る幅広い学部をもつ総合大学としての特性を最大限に活かし、学内専門家の知的資源を有効に活用し「総合知」を創造・活用する人材育成のために歩みを進めることで、地域社会と国際社会とが未来世代を含む一人ひとりのウェルビーイング(well-being)の実現へ向かうよう尽力する。

本学部がその中でも特に取り組むべき課題は、①「現代に生きる人々が、創造的かつ友好的に暮らすために」、②「新たな価値を創生し、持続的な循環型社会を実現するために」、③「人間がどうあるべきかを問い続け、真の豊かさを主体的に実現するために」という3つである。これらのテーマを通して未来社会・地球環境・人間環境の豊かさが持続可能な形で実現されるよう問題解決に向けて、人を繋ぎ、「総合知」を深く連携させ、未来社会を構想できる人材の育成を目指す。そして、そのために主な3つの柱として、①「国際地域創造学コース」、②「生命圏循環共生学コース」、③「総合人間科学コース」を置くが(これは先の3つの課題に各々対応するものである)、コースは学科ではなく、相互の横断的学びの足場、自ら取り組むべき共創的課題解決の足場としての役割を果たすものであり、従来の特設教育の場とは異なる新しい学びの場となる。 【資料1】

め、外国語（特に英語）教育をはじめ、②の意味でグローバルな人材の育成も目的としている。

「総合知」とは、共創のプロセスにおいて、人文・社会科学、自然科学等の俯瞰的、複眼的視点から総合的に検討する中で、課題解決のために生み出される知である。ここで言う「総合知」とは、令和3年度版「科学技術・イノベーション白書」において、「人文・社会科学の『知』と自然科学の『知』の融合」(27頁)として定義されている総合知と同一のものである。あるいは、令和4年度の教育未来創造会議「我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について（第一次提言）」においても「人文・社会科学の厚みのある『知』の蓄積を図るとともに、自然科学の『知』との融合などにより、あらゆる分野の知見を総合的に活用し社会課題への的確な対応を図る『総合知』の創出・活用を目指し、STEAM教育を強化し、文理横断教育を推進する」(16頁)として、同様の趣旨において取り上げられているものである。

なお、「グローバル」「共創」「総合知」を、「目的」「手段」の観点から説明すると、本学部における人材養成の目的は、共創という手法を身につけた人材を養成すること、グローバルな視点を身につけた人材を養成すること、その過程で総合知を生み出せる人材を養成することである。

静岡大学は、静岡県内の2つの政令指定都市である静岡市と浜松市に各々キャンパスをもち、人文社会科学部、教育学部、情報学部、理学部、工学部、農学部の6学部を擁し、1万人以上の学生が学ぶ、県

内最大規模の総合大学であるが、新学部では人文・社会科学から自然科学に至る幅広い学部をもつ総合大学としての特性を最大限に活かし、学内専門家の知的資源を有効に活用し「総合知」を創造・活用する人材育成のために歩みを進めることで、地域社会と国際社会とが未来世代を含む一人ひとりのウェルビーイングの実現へ向かうよう尽力する。本学部では、共創型人材が解決に寄与すべき社会的課題を、「現代に生きる人々が、より創造的かつ友好的に暮らすための課題」、「新たな価値を創生し、持続可能な循環型社会を実現するための課題」、「人間はどう在るべきかを問い続け、真の豊かさを主体的に実現するための課題」という3つの未来課題群として分類している。これらのテーマを通して未来社会・地球環境・人間環境の豊かさが持続可能な形で実現されるよう問題解決に向けて、人を繋ぎ、「総合知」を深く連携させ、未来社会を構想できる人材の育成を目指す。そして、そのために主な3つの柱として、①「国際地域共生学コース」、②「生命圏循環共生学コース」、③「総合人間科学コース」を置くが（これは先の3つの課題に各々対応するものである）、コースは学科ではなく、相互の横断的学びの足場、自ら取り組むべき共創的課題解決の足場としての役割を果たすものであり、従来の専門教育の場とは異なる新しい学びの場となる。 【資料1】

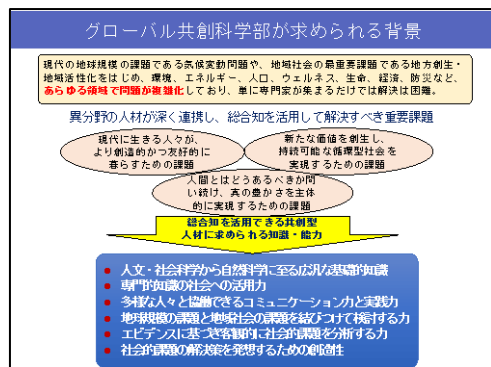
(4 ページ)

今日、地球規模の課題である気候変動問題や、地域社会の最重要課題である地方創生・地域活性化をはじめ、環境、エネルギー、人口、ウェルネス、生命、経済、防災など数多くの社会的課題の解決には、科学的・技術的・経済的・倫理的など様々なアプローチが必要であることは論を俟たない。そのためには、既存学部である工学部では技術開発、農学部では食料生産、などといった専門知に基づく学部教育の充実も重要であるが、同時に、今日、一人の人間が多様な専門知を一人で有することは困難であり、異分野の人材が深く連携し、多様な人々との協働の下、多様な専門知を深く連携させ、「総合知」を活用する取り組みのプロセスを通じて問題解決する人材、すなわち「共創型人材」も求められる。そこで新学部では、目指すべき社会を構想した上で、それらの様々な技術や知識を人々の暮らしや社会に還元（アウトカム）することのできる、いわば専門知を繋ぐことで問題解決にあたることのできる人材育成を目指す。

(8 ページ)

今日、グローバル課題である気候変動問題や、ローカルな最重要課題である地方創生・地域活性化をはじめ、環境、エネルギー、人口、ウェルネス、生命、経済、防災など数多くの社会的課題の解決には、科学的・技術的・経済的・倫理的など様々なアプローチが必要であることは論を俵たない。そのためには、既存学部である工学部では技術開発を、農学部では食料生産を、などといった専門知に基づく学部教育の充実も重要であるが、同時に、今日、一人の人間が多様な専門知を一人で有することは困難であり、異分野の人材が深く連携し、多様な人々との協働のもと、多様な専門知を深く連携させ、「総合知」を活用する取り組みのプロセスを通じて問題解決する人材、すなわち「共創型人材」も求められる。そこで新学部では、目指すべき社会をデザイン・構想した上で、それらの様々な技術や知識を人々の暮らしや社会に還元（アウトカム）することのできる、いわば専門知を繋ぐことで問題解決にあたることのできる人材育成を目指す。

(5 ページ)



(4 ページ)



<p>(7 ページ)</p> <p>(3) 養成する人材と学位授与方針 (ディプロマ・ポリシー)</p> <p>【養成する人材】</p> <p>グローバル共創科学部は、地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、社会的課題が多様化・複雑化する現代社会の状況を踏まえ、多様な人々と協働し、人文・社会科学から自然科学に至る幅広い知を繋げることを通じて、複眼的な視点から社会的課題を的確に捉え「総合知」を創造・活用し、未来社会を活力と魅力溢れるものとして構想できる共創型人材を育成することを目的とする。このために、本学部の教育では、幅広い教養、語学とデータサイエンスのスキル、多様性と包摂の理解、地球環境の知識、人間の多面的理解を重視し、様々な知見を融合させて社会の諸課題に対応する「総合知」を活用できる能力を育む。</p> <p>(略)</p> <p>【ディプロマ・ポリシー (学位授与の方針)】</p> <p>グローバル共創科学部では、地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、社会的課題が多様化・複雑化する現代社会の状況を踏まえ、より良い未来社会を創造するために、人文・社会科学から自然科学に至る幅広い知を繋げ、複眼的観点からものごとを捉える「総合知」を活用し、課題解決に貢献できる人材を育成することを教育目標としており、次に掲げる資質・能力を身につけていることを学士 (学術) の学位授与の条件とする。</p>	<p>(6 ページ)</p> <p>(3) 養成する人材と学位授与方針 (ディプロマ・ポリシー)</p> <p>【養成する人材】</p> <p>グローバル共創科学部は、地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、社会的課題が多様化・複雑化する現代社会の状況を踏まえ、多様な人々と協働し、人文・社会科学から自然科学に至る幅広い知を繋げることを通じて、複眼的な視点から社会的課題を的確に捉え「総合知」を創造・活用し、未来社会を活力と魅力溢れるものとしてデザイン・構想できる共創型人材を育成することを目的とする。このために、本学部の教育では、幅広い教養、語学と数理・データサイエンスのスキル、多様性と包摂の理解、地球環境の知識、人間の多面的理解を重視し、様々な知見を融合させて社会の諸課題に対応する「総合知」を活用できる能力を育む。</p> <p>(略)</p> <p>【ディプロマ・ポリシー (学位授与の方針)】</p> <p>グローバル共創科学部では、地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、社会的課題が多様化・複雑化する現代社会の状況を踏まえ、より良い未来社会を創造するために、人文・社会科学から自然科学に至る幅広い知を繋げ、複眼的観点からものごとを捉える「総合知」を活用し、課題解決に貢献できる人材を育成することを教育目標としており、次に掲げる資質・能力を身につけていることを学士 (学術) の学位授与の条件とする。</p>
---	---

<p>(1)人文・社会科学から自然科学に至る広汎な基礎的知識を身につけている。</p> <p>(2)専門的知識を社会のために活用することができる。</p> <p><u>(3) 人間理解に基づき、価値観や文化が異なる多様な人々と協働できるコミュニケーション力と実践力を身につけている。</u></p> <p><u>(4)地球規模の課題と地域社会の課題を結びつけて検討することができる。</u></p> <p><u>(5)エビデンスに基づき客観的に社会的課題を分析することができる。</u></p> <p>(6)社会的課題の解決策を発想するための創造性を身につけている。</p>	<p>(1)人文・社会科学から自然科学に至る広汎な基礎的知識を身につけている。</p> <p>(2)専門的知識を社会のために活用することができる。</p> <p><u>(3)国際的なコミュニケーション力を身につけている。</u></p> <p><u>(4)ものごとを適切に分析することができる。</u></p> <p>(5)社会的課題の解決策を発想するための創造性を身につけている。</p> <p><u>(6)多様性を理解し、尊重することができる。</u></p> <p><u>(7)多様な背景をもつ人たちの協働を生み出すことができる。</u></p>
<p>(8 ページ)</p> <p><u>(4) 人材像とポリシーの関係・ポリシー間の一貫性</u></p> <p>これまで述べてきたように、本学部で育てる「<u>共創型人材</u>」は、「<u>共創という手法を使いこなし、更にグローバルな視点を踏まえ、課題解決に寄与する『総合知』を生み出すことのできる人材</u>」である。こうした人材には、<u>エビデンスに基づき社会的課題を客観的に分析した上で、グローバルな視点から共創という手法を使いこなし、課題解決に寄与する総合知を生み出す創造性が求められる。</u>そのため本学部では、<u>6つのディプロマ・ポリシーを設定している。</u>以下では、<u>各ディプロマ・ポリシーを説明した上で、後述するカリキュラム・ポリシーとの関係について述べる。</u>そして最後に、<u>後述するアドミッション・ポリシーとの関係を説明する。</u></p>	

<p>1. <u>人文・社会科学から自然科学に至る広汎な基礎的知識を身につけている</u> <u>社会的課題は多様な側面を持ち、それゆえ人文・社会科学から自然科学に至る多様な専門家が共創において連携する必要がある。</u>こうした連携が実現するためには、<u>専門家が互いのアプローチを理解する必要がある。</u>そのため本学部が養成する共創型人材には、<u>人文・社会科学から自然科学に至る広汎な基礎的知識が求められる。</u>これらの知識は教養教育とも密接に関わるため、<u>本学部では「教養科目等を学ぶことにより、幅広い教養、国際感覚、多様性を理解する能力を養う」(CP1) というカリキュラム・ポリシーを設定している。</u>さらに、<u>共創を通じて社会的課題解決に貢献する人材を育成する上では、共創の基礎的な知識と、より高度な学際的知識が必要とされる。</u>そこで、「<u>共創科学系科目を学ぶことにより、共創に関する基礎的な知識を身につける</u>」(CP4)、「<u>人文・社会科学系科目及び自然科学系科目を学ぶことにより、複眼的な視点から対象を捉える力を身につける</u>」(CP5) という二つのカリキュラム・ポリシー (科目群) を設定している。</p> <p>2. <u>専門的知識を社会のために活用することができる</u> <u>共創という手法を使いこなし、多様な人々とともに課題解決に寄与する総合知を生み出すことに積極的に寄与するためには、多様な専門家が語ることを理解するだけでなく、自らの専門性を持ち、それを社会的課題解決のために活用できる必要がある。</u>こうした能力は、<u>専門的な教育を通じて育成されるため、本学部では、「コース専門</u></p>	
---	--

科目を学ぶことにより、各コースの専門的な知識・能力を修得する」(CP6) というカリキュラム・ポリシーと、それに対応する科目群を設定している。

3. 人間理解に基づき、価値観や文化が異なる多様な人々と協働できるコミュニケーション力と実践力を身につけている

共創では、専門性だけではなく、価値観や文化的背景が異なる人たちと共通の目標に向かって共に取り組む協働が本質的に求められる。こうしたプロセスを具体的に進める力を身につけるためには、「教養科目等を学ぶことにより、幅広い教養、国際感覚、多様性を理解する能力を養う」

(CP1)、「共創科学系科目を学ぶことにより、共創に関する基礎的な知識を身につける」(CP4)、「人文・社会科学系科目及び自然科学系科目を学ぶことにより、複眼的な視点から対象を捉える力を身につける」

(CP5) というカリキュラム・ポリシーを通じて育まれる人間理解や価値や文化の多様性の理解に加え、自らとは異なる価値観・文化的背景をもつ他者と協働する体験が必要になる。さらに、今日では、共創は言語の異なる者同士の間でなされることもあるため、国際語としての英語を実際の場面で使えるレベルで身につけておくことも重要である。そこで本学部では、「グローバル系科目を学ぶことにより、多様な課題を結びつけ、多様な人と協働できる力を身につける」(CP2) というカリキュラム・ポリシーを立て、この科目群に体験型授業とコミュニケーション中心の英語教育を含めることにした。これにより、国際的な舞台

でも主体的に活躍できるグローバル人材を育成する。

4. 地球規模の課題と地域社会の課題を結びつけて検討することができる

本学部で育成するグローバル人材は、国際的な舞台で主体的に活躍できるだけでなく、地球規模の課題と地域社会の課題を別々のものとして捉えず、両者の間にある複雑かつ多様な関係を踏まえて社会的課題に取り組むことができる人材である。こうした視点を身につけるためには、未来課題群の複雑性・多様性並びに人文・社会科学及び自然科学における最先端の研究成果を学ぶとともに、体験型授業を通じて地球規模の課題と地域社会のつながりを実感することが必要となる。そこで本ディプロマ・ポリシーに対応するカリキュラム・ポリシーは、「グローバル系科目を学ぶことにより、多様な課題を結びつけ、多様な人と協働できる力を身につける」(CP2)、「共創科学系科目を学ぶことにより、共創に関する基礎的な知識を身につける」(CP4)、「人文・社会科学系科目及び自然科学系科目を学ぶことにより、複眼的な視点から対象を捉える力を身につける」(CP5)になる。

5. エビデンスに基づき客観的に社会的課題を分析することができる

社会的課題に取り組む上では、その課題や背景にある要因を、恣意的にではなく、客観的に分析する必要がある。こうした客観的分析は、インタビューなどの質的調査や、アンケートなどの量的調査を通じて、エビデンスを示すことと密接に関係している。また、今日、エビデンスを示す上で、

統計学、人工知能、プログラミングなど、データサイエンスに基づくビッグデータ解析も必要不可欠になっている。そこで本学部では、「データサイエンス科目等を学ぶことにより、課題を分析し、解決するために必須となるデータ解析の基礎的な素養を身につける」(CP3)というカリキュラム・ポリシーを立て、調査法やデータサイエンス科目を履修することとしている。

6. 社会的課題の解決策を発想するための創造性を身につけている

社会的課題の解決に寄与する総合知を生み出すためには、これまでの知識をまとめあげ、そこから新たなものを発想する力が求められる。こうした力は、フィールドワークでの体験や、専門教育において自ら課題を設定し卒業論文を執筆する中で培われる。そこで本学部では、学生がこうした創造性を身につけられるように、「グローバル系科目を学ぶことにより、多様な課題を結びつけ、多様な人と協働できる力を身につける」(CP2)、「コース専門科目を学ぶことにより、各コースの専門的な知識・能力を修得する」(CP6)という二つカリキュラム・ポリシーを設定し、これらに対応した科目(グローバル系科目、コース専門科目)を設置している。

また、「卒業研究を通じて、新たな課題を主体的に見出し、知識や思考力、技術を活用して探究し解決する能力を涵養すると共に、協調性や倫理観、コミュニケーション能力、表現力を身につける」(CP7)というカリキュラム・ポリシーは、DP1～DP6に関連するものである。

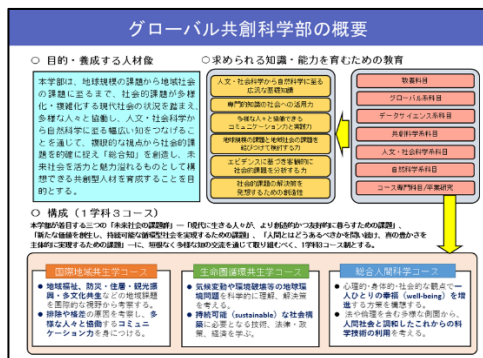
最後に、アドミッション・ポリシーとカリキュラム・ポリシーとの関係を示す。本学部のアドミッション・ポリシーは、「求める学生像」「大学入学までに身につけておくべき教科・科目等」に基づき以下の三点にまとめられる。

- A. 外国語（特に英語）や数理・データサイエンスを学ぶ上で必要な基礎的知識として、英語や数学を履修していること
- B. 文系と理系を含めた様々な分野を学習し、幅広い基礎的知識を修得していること
- C. 地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、様々な社会的課題の解決に取り組み、よりよい未来社会の実現に貢献することに意欲をもっていること

このうちAは、CP2（グローバル系科目）及びCP3（データサイエンス系科目）に、Bは、CP1（教養科目）、CP4（共創科学系科目）、CP5（人文・社会科学系科目、自然科学系科目）に、Cは、CP6（コース専門科目）及び7（卒業研究）につながっている。

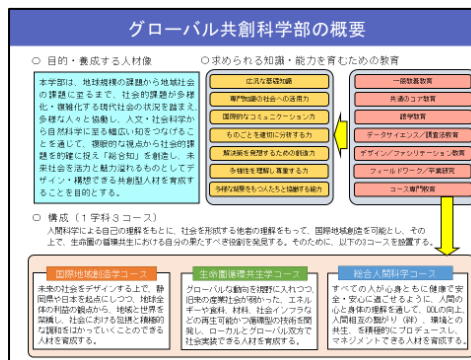
(12 ページ)

2. 学部・学科等の特色



(7 ページ)

2. 学部・学科等の特色



<p>(1) 学部・学科の特色</p> <p>I) 学部の目的</p> <p>本学部は、「総合知」をコアに据えた教育を行い、「共創型人材」の育成を目指す。ここでいう「共創型人材」については<u>既に述べたとおり</u>、問題の発生の考察や多様な問題解決に際して、人文・社会科学、自然科学、人間科学などの複眼的視点から取り組むことのできる人材、<u>地域社会から国際社会に至るまでの多様な担い手との共創に基づいて対策を構想できる人材</u>、多様な専門性を備えた人材を繋いで共創的課題解決の場づくりができる人材のことを想定している。</p>	<p>(1) 学部・学科の特色</p> <p>I) 学部の目的</p> <p>本学部は、「総合知」をコアに据えた教育を行い、「共創型人材」の育成を目指す。ここでいう「共創型人材」とは、問題の発生の考察や多様な問題解決に際して、人文・社会科学、自然科学、人間科学などの複眼的視点から取り組むことのできる人材、<u>ローカルからグローバルに至るまでの多様な担い手との共創に基づいて対策を構想できる人材</u>、多様な専門性を備えた人材を繋いで共創的課題解決の場づくりができる人材のことを想定している。</p>
<p>(13 ページ)</p> <p>【アートやデザインを用いた創造的な思考や解決力】</p> <p>複雑化する社会の要請に応える新しい時代のカリキュラムとして、自然言語や人間言語のみならず、感性的なコミュニケーション手段としての「アート」や「デザイン」に触れられる科目群を充実させ、未来社会を魅力溢れるものとして柔軟に構想・表現する能力と資質をもったクリエイティブ・マインズを育成する。</p> <p>なお、本学部では、<u>こうした創造性の基礎となる「デザイン」に関連する科目も、共創科学系科目や人文・社会科学系科目に入れている。ここでの「デザイン」は、「さまざまなアイデアを絞り込み、形にしていく」という意味で用いている。</u></p>	<p>(8 ページ)</p> <p>【アートやデザインを用いた創造的な思考や解決力】</p> <p>複雑化する社会の要請に応える新しい時代のカリキュラムとして、自然言語や人間言語のみならず、感性的なコミュニケーション手段としての「アート」や「デザイン」に触れられる科目群を充実させ、未来社会を魅力溢れるものとして柔軟に構想・表現する能力と資質をもったクリエイティブ・マインズを育成する。</p>

<p>(20 ページ)</p> <p>4. 教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>(1) 教育課程編成・実施の方針 (カリキュラム・ポリシー)</p> <p>グローバル共創科学部では、複雑多様な課題が山積する時代の中、従来型の専門分野の枠組に<u>捉われず</u>、人文・社会科学や自然科学の双方を横断した総合知をもって、複眼的・俯瞰的な視点でものごとを捉え思考し、社会的課題の解決に取り組むことのできる人材、未来ニーズを踏まえて新たな価値や仕組み・機能を創出できる人材、そして地球規模の視点にたつて、未来社会を担うことのできる意欲のある人材を育成することを掲げており、そのために 1-(3) で示したディプロマ・ポリシーを設定している。ディプロマ・ポリシーで示した6つの能力を養成するために、グローバル共創科学部では下記のカリキュラム・ポリシー及び科目区分を設定し、教育課程を編成する。</p> <p>【カリキュラム・ポリシー (教育課程編成・実施の方針)】</p> <p>1. 教育課程の編成の方針</p> <p>(1) 教養科目を学ぶことにより、幅広い教養、国際感覚、多様性を理解する能力を養う。</p> <p>(2) <u>グローバル系科目を学ぶことにより、多様な課題を結びつけ、多様な人々と協働できる力を身につける。</u></p> <p>(3) <u>データサイエンス系科目</u>を学ぶことにより、課題を分析し、解決するために必須となるデータ解析の基礎的な素養を身につける。</p>	<p>(15 ページ)</p> <p>4. 教育課程の編成の考え方及び特色</p> <p>(1) 教育課程編成・実施の方針 (カリキュラム・ポリシー)</p> <p>グローバル共創科学部では、複雑多様な課題が山積する時代の中、従来型の専門分野の枠組に<u>とらわれず</u>、人文・社会科学や自然科学の双方を横断した総合知をもって、複眼的・俯瞰的な視点でものごとを捉え思考し、社会的課題の解決に取り組むことのできる人材、未来ニーズを踏まえて新たな価値や仕組み・機能を創出できる人材、そして地球規模の視点にたつて、未来社会を担うことのできる意欲のある人材を育成することを掲げており、そのために 1-(3) で示したディプロマ・ポリシーを設定している。ディプロマ・ポリシーで示した<u>7つ</u>の能力を養成するために、グローバル共創科学部では下記のカリキュラム・ポリシー及び科目区分を設定し、教育課程を編成する。</p> <p>【カリキュラム・ポリシー (教育課程編成・実施の方針)】</p> <p>1. 教育課程の編成の方針</p> <p>(1) 教養科目<u>等</u>を学ぶことにより、幅広い教養、国際感覚、多様性を理解する能力を養う。</p> <p>(2) <u>外国語科目等を学ぶことにより、グローバルな視点から対象を捉えるツールとして外国語を活用できる能力を身につける。</u></p> <p>(3) <u>数理・データサイエンス科目等</u>を学ぶことにより、課題を分析し、解決するために必須となるデータ解析の基礎的な素</p>
--	---

<p>(4) <u>共創科学系科目を学ぶことにより、共創に関する基礎的な知識を身につける。</u></p> <p>(5) <u>人文・社会科学系科目及び自然科学系科目を学ぶことにより、複眼的な視点から対象を捉える力を身につける。</u></p> <p>(6) <u>コース専門科目を学ぶことにより、各コースの専門的な知識・能力を修得する。</u></p> <p>(7) <u>卒業研究を通じて、新たな課題を主体的に見出し、知識や思考力、技術を活用して探求し解決する能力を涵養すると共に、協調性や倫理観、コミュニケーション能力、表現力を身につける。</u></p>	<p>養を身につける。</p> <p>(4) <u>地域・グローバル演習科目等を学ぶことにより、時代と社会が求める人材像を現場において体感し、社会的適応力を育成することで職業意識を涵養する。</u></p> <p>(5) <u>共創科学コア科目を学ぶことにより、人文・社会科学 や自然科学の垣根を超えて複眼的に対象を捉える力を身につける。</u></p> <p>(6) <u>専門科目を学ぶことにより、各コースの専門的な知識・能力を修得する。</u></p> <p>(7) <u>卒業研究を通じて、新たな課題を主体的に見出し、知識や思考力、技術を活用して探求し解決する能力を涵養すると共に、協調性や倫理観、コミュニケーション能力、表現力を身につける。</u></p> <p>(8) <u>資格科目等を学ぶことにより、コーチングアシスタント、自然再生士補、環境再生医などの資格を取得する。</u></p>														
<p>(30 ページ)</p> <p><u>下記の表において、科目区分とそれに関連するディプロマ・ポリシーを示す。なお、前述した I～VI の科目群から必要選択単位数を超えて履修する科目（前述・VII）については、履修する科目によってディプロマ・ポリシーとの関連が変わってくるので、この表には記載しない。</u></p>	<p>(19 ページ)</p> <p>【グローバル共創科学部における科目区分とそれに関連するディプロマ・ポリシー】</p> <table border="1" data-bbox="810 1368 1353 1809"> <thead> <tr> <th>科目区分</th> <th>関連するディプロマ・ポリシー</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>教養科目</td> <td>DP1、DP3、DP6</td> </tr> <tr> <td>外国語科目</td> <td>DP3、DP7</td> </tr> <tr> <td>数理・データサイエンス科目</td> <td>DP4</td> </tr> <tr> <td>地域・グローバル演習科目</td> <td>DP4、DP6、DP7</td> </tr> <tr> <td>共創科学コア科目</td> <td>DP1、DP2、DP5、DP7</td> </tr> <tr> <td>専門科目</td> <td>DP2、DP5</td> </tr> </tbody> </table> <p><u>上記の表において、ディプロマ・ポリシーと関連する科目区分における代表的授業科目との対応関係を表に示す。自由科目について</u></p>	科目区分	関連するディプロマ・ポリシー	教養科目	DP1、DP3、DP6	外国語科目	DP3、DP7	数理・データサイエンス科目	DP4	地域・グローバル演習科目	DP4、DP6、DP7	共創科学コア科目	DP1、DP2、DP5、DP7	専門科目	DP2、DP5
科目区分	関連するディプロマ・ポリシー														
教養科目	DP1、DP3、DP6														
外国語科目	DP3、DP7														
数理・データサイエンス科目	DP4														
地域・グローバル演習科目	DP4、DP6、DP7														
共創科学コア科目	DP1、DP2、DP5、DP7														
専門科目	DP2、DP5														

【グローバル共創科学部における科目区分とそれに関連するディプロマ・ポリシー】

科目区分	関連するディプロマ・ポリシー
教養科目	DP1、DP3
グローバル系科目	DP3、DP4、DP6
データサイエンス系科目	DP5
共創科学系科目	DP1、DP3、DP4
人文・社会科学系科目及び自然科学系科目	DP1、DP3、DP4
コース専門科目	DP2、DP6
卒業研究	DP1～6

(削除)

ては、履修する科目によってディプロマ・ポリシーとの関連が変わってくるので、ここには記載しないが、主に DP1～DP4 に関連する講義の履修を期待する。卒業研究は、すべてのディプロマ・ポリシーと関連するため表には記載しない。これらの学年進行における履修イメージを図として示す。

【学年進行に伴う科目履修イメージ】

	単位数	1年次		2年次		3年次		4年次	
		必修	選択	前期	後期	前期	後期	前期	後期
教養科目	13	7							
学部共通	外国語科目	8	2						
	基礎科目	6	1						
	数理・データサイエンス科目	2	5						
	地域・グローバル演習科目	22	18						
融合科目	6								
卒業研究	8								
専門科目	8	18							
コース専門科目	8								
自由科目	8								

(是正事項) グローバル共創科学部 グローバル共創科学科

2. ディプロマ・ポリシーに「(4) ものごとを適切に分析することができる」ことが掲げられているが、「ものごと」とは何を指しているのか、「適切に分析できる」とはどのような分析能力を修得することを想定しているのかが判然とせず、ディプロマ・ポリシーとして適切であるとは判断できない。このため、養成する人材像を踏まえた上で適切なディプロマ・ポリシーが設定されていることについて具体的に説明するとともに、必要に応じて本記載を適切に改めること。また、必要に応じて、カリキュラム・ポリシーや対応する授業科目との整合性等も合わせて適切に改めること。

(対応)

本学部は、地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、社会的課題が複雑多様化する現代社会の状況を踏まえ、多様な人々と協働した取り組みの下、人文・社会科学から自然科学に至る広汎な知をつなぐことで、複眼的な視点から社会的課題を捉え、「総合知」を創造・活用し、未来社会を活力と魅力溢れるものとして構想できる「共創型人材」の育成を目的としている。そのため、ディプロマ・ポリシー4において分析の対象となっている「ものごと」とは、本学部が育成する人材が取り組む「社会的課題」を意味する。また、「適切に分析する」とは、「恣意的にではなく、客観的に」ということを意味している。課題を解決する上では、まずはその課題や背景にある要因を客観的に分析する必要がある。今日こうした客観性はエビデンスを示すことにより担保されるため、本学部では、エビデンスを示す質的・量的調査法を扱った科目や、統計学、人工知能、プログラミングなど、データサイエンスに関連する科目も設置している。

今回の是正意見を受け、ディプロマ・ポリシー4を設定した意図をより明確にするために、このディプロマ・ポリシーを「エビデンスに基づき客観的に社会的課題を分析することができる」へ改訂する。また、申請書類では、こうした分析力を育成するための科目を、「数理・データサイエンス科目」及び「地域・グローバル演習科目」という別の科目群に分けて配置していたため、「データサイエンス系科目」へ統合する。(別添資料3参照)

(新旧対照表) 設置の趣旨を記載した書類

新	旧
(8ページ) 【ディプロマ・ポリシー (学位授与の方針)】 グローバル共創科学部では、地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、社会的課題が多様化・複雑化する現代社会の状況を踏まえ、より良い未来社会を創造するために、人文・社会科学から自然科学に至る	(6ページ) 【ディプロマ・ポリシー (学位授与の方針)】 グローバル共創科学部では、地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、社会的課題が多様化・複雑化する現代社会の状況を踏まえ、より良い未来社会を創造するために、人文・社会科学から自然科学に至る

<p>幅広い知を繋げ、複眼的観点からものごとを捉える「総合知」を活用し、課題解決に貢献できる人材を育成することを教育目標としており、次に掲げる資質・能力を身につけていることを学士（学術）の学位授与の条件とする。</p> <p>（略）</p> <p><u>(5)エビデンスに基づき客観的に社会的課題を分析することができる。</u></p>	<p>幅広い知を繋げ、複眼的観点からものごとを捉える「総合知」を活用し、課題解決に貢献できる人材を育成することを教育目標としており、次に掲げる資質・能力を身につけていることを学士（学術）の学位授与の条件とする。</p> <p>（略）</p> <p><u>(4)ものごとを適切に分析することができる。</u></p>
--	---

(是正事項) グローバル共創科学部 グローバル共創科学科

3. 審査意見1・4の対応を踏まえ、本学部等の名称がディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー及び教育課程を踏まえて適切なものであることを改めて説明するとともに、必要に応じて適切に改めること。また、学生募集に当たっては、学生や社会に対しても分かりやすく説明するよう努めること。

(対応)

学部・学科名称にある「グローバル」、「共創」、「科学」について言葉の定義を明確にするとともに、審査意見1の指摘を踏まえ3ポリシー、教育課程、コース名、科目区分等を見直し、改めて「グローバル共創科学部グローバル共創学科」の名称が適切であることを説明する。

(是正事項1 (対応) より)

本設置申請では、

「グローバル」であるとは、①地球規模の視点から社会的課題に取り組むこと、②国際社会で主体的に活躍できることの二つの意味を持つ。

「共創」とは、多様な立場の人々が共に社会課題を解決し、より良い未来社会を実現することである。

学部名称に「グローバル」、「共創」、「科学」が含まれる意図と狙いの明確化

今日、地域社会の課題と地球規模の課題が連動しており、地域の課題に取り組む場合にも地球規模の視点で問題意識を持つことは欠かせない。また、現代の社会的課題は、従来型の学部での教育から獲得される単一領域の専門知では解決できない複雑な課題である。そのため、いずれの課題に取り組むのであれ、地球規模の視点から問題意識を持ち、現代の複雑な課題を解決し、未来社会を構想するための方法として、多様な知を結びつける「共創」の手法が必要である。学部名称にある「グローバル」と「共創」は、課題への取組に必要な視点と手法をセットで示したものである。

また、本学部と同じように「共創」という手法を重視する学部として九州大学共創学部がある。ただし、本学部の名称は「共創科学部」とした。「グローバル共創学部」とすると、文理融合のうち、理系の要素が含まれていることが伝わりにくい可能性があり、特に高校生向けに理系要素を含む文理融合の学部であることを理解してもらうため、学部名に「科学」という名称を加えた。なお、学部名称に「グローバル〇〇学部」を用い、地球規模の視野で地域社会の課題に対応する人材育成も目的に含めている他大学の例として、長野県立大学グローバルマネジメント学部（「グローバルビジネスコース」、「企（起）業家コース」、「公共経営コース」を設置）がある。本学部と同様に文理融合を意味する「共創科学」を用いている大学の部局名称としては、弘前大学大学院地域共創科学研究科、及び東京都立大学地域共創科学研究センターがある。

学部の英訳名称：Faculty of Global Interdisciplinary Science and Innovation

本学部の英訳名称を Faculty of Global Interdisciplinary Science and Innovation とする理由を以下に説明する。

「グローバル」を名称に付した大学の部局のほとんど全てにおいて、「グローバル」の英語表記である ‘Global’ をそのまま使用している。例えば、長野県立大学グローバルマネジメント学部 (Faculty of Global Management Studies)、同志社大学グローバル・コミュニケーション学部 (Faculty of Global Communications) などである。

一方、「共創」もしくは「共創科学」を名称に付した大学の部局の英訳は、大学によって多種多様であり、定訳は存在しない。例を挙げると、九州大学共創学部 (Faculty of Interdisciplinary Science and Innovation)、愛媛大学共創学部 (Faculty of Collaborative Regional Innovation)、東京都立大学地域共創科学研究センター (Research Center for Co-creating System of Regional Planning and Management)、弘前大学大学院地域共創科学研究科 (Graduate School of Sustainable Community Studies) などである。

このうち、本学部が重視する文理の学問的融合の意味合いをもっともよく表しているのは、九州大学共創学部で用いられている ‘Interdisciplinary Science and Innovation’ である。愛媛大学共創学部で用いられている ‘Collaborative’ や東京都立大学地域共創科学研究センターで用いられている ‘Co-creating’ は、より広い「連携協働」や協働による「創造」を指す印象があり、文理の学問的融合という本学部の意図を表す単語としては、意味が広すぎる。また、弘前大学大学院地域共創科学研究科で用いられている ‘Sustainable Community Studies’ は直訳するなら「持続可能なコミュニティ研究」となり、本学部が問題として捉えていることの全体像を表しているとは言えない。

本学部の英訳名称として、「グローバル」にはその英語表記である ‘Global’ を充て、「共創科学」には文理融合の学(問)であることを意味する ‘Interdisciplinary Science and Innovation’ を用いる。 ‘Global’ は、 ‘Interdisciplinary Science and Innovation’ 全体を修飾する。

なお、本学部の名称を英訳するにあたっては、英語・英文学を専門とする本学部の専任教員予定者で英語母語話者である複数の教員が、適切な英訳であると確認している。

上記を踏まえ、以下の修正を行った。

修正1: 「グローバル」の定義の明確化を反映し、DPを修正し、CPとの関連を見直した

申請書類のDP3「国際的なコミュニケーション力を身につけている」は説明が不足しており、国際的なコミュニケーション力=語学力という誤解が生じてしまったため、これを見直し、(新DP3)「人間理解に基づき、価値観や文化が異なる多様な人々と協働できるコ

コミュニケーション力と実践力を身につけている」と（新 DP4）「地球規模の課題と地域社会の課題を結びつけて検討することができる」の 2 つの DP へと変更した。また、寄与する CP を整理した。（添付資料 1：カリキュラムマップ参照）

（新 DP3）「人間理解に基づき、価値観や文化が異なる多様な人々と協働できるコミュニケーション力と実践力を身につけている」

共創では、価値観や文化的背景が異なる人たちと共通の目標に向かって共に取り組む協働が本質的に求められる。こうしたプロセスを具体的に進める力を身につけるためには、自らとは異なる価値観・文化的背景を持つ他者と協働する体験が必要になる。

ただし、そのように考えた場合でも、現代では国際社会で主体的に活躍できる素地として一定レベルの語学力（英語）は不可欠である。そのため、とりわけ日本人が不得意とする、聞く・話すスキルを重点的に授業科目の配当などを見直した）。

（修正 2 の 2）、3）参照）

（新 DP4）「地球規模の課題と地域社会の課題を結びつけて検討することができる」を加えた。

本学部で育成するグローバル人材は、国際的な舞台で主体的に活躍できるだけではなく、地球規模の課題と地域社会の課題を別々のものとして捉えず、両者の間にある複雑かつ多様な関係を踏まえて社会的課題に取り組むことができる人材である。

本学部が対象とする社会的課題は、いずれも国際的な構造の中で発生しており、課題を読み解き解決策を模索する際には国際的な要因を重視する必要がある。また、地球温暖化の進展と局所的な災害の激化や地域社会の産業構造の変化、特定地域の高齢化と国境を越えたケア労働者の移動増加などに端的に表れているように、地球規模の課題と地域社会の課題は結びついている。

なお、申請書類の DP6「多様性を理解し、尊重することができる。」、DP7「多様な背景をもつ人たちの協働を生み出すことができる。」は新 DP3 と内容が重複するので削除した。DP6 の「多様性を理解し、尊重する」ことは「価値観や文化が異なる多様な人々と協働できる」ための必要条件として新 DP3 に含まれており、DP7 の「多様な背景をもつ人たちの協働を生み出す」ことは新 DP3 にある「価値観や文化が異なる多様な人々と協働できる」とほぼ同じことを述べたものである。

修正 2 : 教育課程の修正と科目名・区分の変更（審査意見 4 への対応参照）

- 1) 「外国語科目」と「地域・グローバル演習科目」の一部（海外研修、国内地域での実習・体験を伴うコラボラティブ・ワークスなどの授業科目）を統合して「グローバル系科目」と変更し、卒業要件の設定を見直した。

申請書類では、「国際的なコミュニケーション能力を身につける」（旧 DP3）ために「外国語科目」が充てられていたが、それでは本学部が「グローバル」の言葉によって意味する、より幅広い能力を反映したことにはなっていなかった。

新 DP3 「人間理解に基づき、価値観や文化が異なる多様な人々と協働できるコミュニケーション力と実践力を身につけ」、新 DP4 「地球規模の課題と地域社会の課題を結びつけて検討することができる」を保障する教育課程とするため、「外国語科目」と「地域・グローバル演習科目」の一部（海外研修、国内地域での実習・体験を伴うコラボラティブ・ワークスなどの授業科目）を統合して「グローバル系科目」と変更した。海外研修やコラボラティブ・ワークス（国内の地域でのフィールドワーク）を履修することにより、体験を通して、多様な課題を結びつけ、多様な人と協働できる力を身につける（CP2）。

また、英語の授業科目と海外や国内で多様な人々との協働作業を体験する科目を同じ科目区分に置くことで、国際社会で主体的に活躍できるとは具体的にどのようなことを意味するのか実感しやすくなるよう工夫した。

- 2) 「グローバル系科目」の中の英語科目（旧「外国語科目」）の配当年次を変更した。

本学部のカリキュラムでは、1 年次から 2 年次まで履修する教養科目の英語系科目と並行して、外国語科目として特に Speaking や Reading の能力を養う英語コミュニケーション系の科目（必修科目）を 1 年次から 2 年次まで設定していた（Oral Communication I/II、Reading and Discussion I/II）。3 年次にコース分属するまでにこれらの科目の履修が修了することで、身につけたスキルを 3 年次以降に専門科目を学ぶ際の文献や海外の事例の検索・分析、外国人研究者とのコミュニケーションに役立てる設計となっていた。一方、3 年次以降は、英語を講義で学べるのは選択科目のみとなっている（English Writing、English Presentation、English Global Studies）。そのため、外国語を学ぶ意欲が低い学生にとっては、3 年次以降に外国語を学ぶモチベーションの維持が難しくなっていた。

そこで、1、2 年次に集中していた外国語科目の必修科目を 1 年次後期から開始し、3 年次前期まで継続するように設定する。これにより、外国語が不得手な学生が、まずは教養科目の英語の講義を受け、コミュニケーション系の英語科目を履修するための基盤を築く猶予を設ける。入学後すぐに履修する 1 年次前期の教養科目でも、コミュニケーション系の科目（英語コミュニケーション）を必修としているため、3 年次前期までの毎学期に必

修科目の英語コミュニケーション科目を継続して履修することができる。

また、必修の英語科目を3年次まで残すことで、英語学修の継続性を担保する。このようなカリキュラムの変更により、英語の能力を伸ばすことで、コミュニケーションスキルを身につけられるように導く。

これらについては、別添のカリキュラムマップ（添付資料1）及び履修モデル（添付資料2）にて詳細を示すこととし、学生に対してもカリキュラムマップ（添付資料1）及び履修モデル（添付資料2）を提示し、学びのアドバイザーによる履修指導に活用することとする。

	科目名	改定前	改定後
必修科目	Oral Communication I	1年次前期	1年次後期
	Oral Communication II	1年次後期	2年次前期
	Reading and Discussion I	2年次前期	2年次後期
	Reading and Discussion II	2年次後期	3年次前期
選択科目	English Writing	3年次前期	3年次後期
	English Presentation	3年次前期	3年次後期
	English Global Studies	3年次後期	3年次後期

3) 「共創科学コア科目」を「共創科学系科目」、「人文・社会科学系科目」及び「自然科学系科目」に分割し、「自然科学系科目」を大幅に増加させた。

当初案では、人文・社会科学や自然科学の垣根を超えて複眼的に対象を捉える力を身につける目的から「共創科学コア科目」を編成し、科目内の各授業科目については、特に学問領域による区分を設けず、概論的内容の必修科目（22単位）と各論的内容の選択科目（18単位）のみを区分していた。

「人文・社会科学から自然科学に至る多様な知を結びつけ活用」できるようになるためには、まず人文・社会科学と自然科学を幅広くバランスよく履修できることが重要である。この点を教育課程に分かりやすく具体化する意図から、「共創科学コア科目」のなかでも、特に共創に関する基礎的な知識を身につける科目を「共創科学系科目」（必修10単位）として1年生前期に配当し、残りの科目を「人文・社会科学系科目」（必修6単位・選択8単位）と「自然科学系科目」（必修4単位・選択8単位）に区分して1年後期から2年後期に配当した。

修正3:「国際地域創造学コース」の名称を「国際地域共生学コース」と改めた。

審査意見1への対応により、本学部が取り組む課題のうち、特に「現代に生きる人々が、より創造的かつ友好的に暮らすための課題」に取り組むコースである「国際地域創造学コース」の名称を、他者との共生をより重視する「国際地域共生学コース」と改めた。新DP3における「価値観や文化が異なる多様な人々と協働」、及び新DP4の「地球規模の課題と地域社会の課題を結びつけて検討」することをより分かりやすく反映する言葉は、「共生」である。また、「国際地域」は、今日の課題の特徴として、地域社会の課題と地球規模の課題が連動しており、地域社会の課題に取り組む場合にも地球規模の視点から問題意識を持つことは欠かせないという本学部の基本的な社会課題認識を反映し、「国際」と「地域」が相互に切り離せない存在であることを意味している。

学科・専攻・コースなどの名称に「国際地域」という言葉を同様の意味で使用している例として、東洋大学国際学部国際地域学科国際地域専攻、及び国際地域学科地域総合専攻がある。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<p>(4 ページ)</p>	<p>(3 ページ)</p>
<p>(18 ページ)</p> <p>3. 学部、学科等の名称及び学位の名称 (1) 新組織の名称とその理由 【学部名】 グローバル共創科学部 (英文: Faculty of Global Interdisciplinary Science and Innovation)</p>	<p>(14 ページ)</p> <p>3. 学部、学科等の名称及び学位の名称 (1) 新組織の名称とその理由 【学部名】 グローバル共創科学部 (英文: Faculty of Global Interdisciplinary Science and Innovation)</p>

<p>【学科名】 グローバル共創科学科 (英文 : Department of Global Interdisciplinary Science and Innovation)</p> <p>学部名にある「共創」とは、<u>既に「多様な立場の人々が共に社会課題を解決し、より良い未来社会を実現すること」と定義したとおりであり、更に言う、人々が人文社会科学や自然科学といった従来の学問的枠組を越えて多種多様な知と交わり、多様なバックグラウンドを持つ人々と対話し、様々なステークホルダーと連携することで、新たな価値や新たな社会の仕組み・機能を共に創造していくことであり、これは本学部の目指す教育の根幹をなす言葉である。「グローバル」には、①地球規模の視点から社会的課題に取り組み、②国際社会で主体的に活躍できる人材を育成するという意味が込められている。</u></p> <p><u>今日、地域社会の課題と地球規模の課題が連動しており、地域の課題に取り組む場合にも地球規模の視点で問題意識を持つことは欠かせない。また、現代の社会的課題は、従来型の学部での教育から獲得される単一領域の専門知では解決できない複雑な課題である。そのため、いずれの課題に取り組むのであれ、地球規模の視点から問題意識を持ち、現代の複雑な課題を解決し、未来社会を構想するための方法として、多様な知を結びつける「共創」の手法が必要である。学部名称にある「グローバル」と「共創」は、課題への取組に必要な視点と手法をセットで示したものである。</u></p> <p><u>本学部と同じように「共創」という手法を重視する学部として九州大学共創学部がある。ただし、本学部の名称は「共創科学部」とした。「グローバル共創学部」とすると、</u></p>	<p>【学科名】 グローバル共創科学科 (英文 : Department of Global Interdisciplinary Science and Innovation)</p> <p>学部名にある「共創」とは、人々が人文社会科学や自然科学といった従来の学問的枠組を越えて多種多様な知と交わり、多様なバックグラウンドをもつ人々と対話し、様々なステークホルダーと連携することで、新たな価値や新たな社会の仕組み・機能を共に創造していくことであり、これは本学部の目指す教育の根幹をなす言葉である。「グローバル」には、<u>国際的に活躍できる共創型人材を育成するという意味に加え、自然環境を含めた地球規模の視点を有する人材を育成するという意味が込められている。また、共創学部ではなく共創科学部としたのは、共創を一つの新しい科学(science)として確立することを目指すためである。英語名称は Faculty of Global Interdisciplinary Science and Innovation とした。これは本学部では、課題の解決策を共に創造する学際横断型の教育・研究を実施することに由来する。類似する英語での学部名称として、九州大学共創学部の School of Interdisciplinary Science and Innovation がある。</u></p>
--	--

<p>文理融合のうち、理系の要素が含まれていることが伝わりにくい可能性があり、特に高校生向けに理系要素を含む文理融合の学部であることを理解してもらうため、学部名に「科学」という名称を加えた。なお、学部名称に「グローバル〇〇学部」を用い、地球規模の視野で地域社会の課題に対応する人材育成も目的に含めている他大学の例として、長野県立大学グローバルマネジメント学部（「グローバルビジネスコース」、「（起）業家コース」、「公共経営コース」を設置）がある。本学部と同様に文理融合を意味する「共創科学」を用いている大学の部局名称としては、弘前大学大学院地域共創科学研究科、及び東京都立大学地域共創科学研究センターがある。</p> <p>英訳名称は Faculty of Global Interdisciplinary Science and Innovation とした。「グローバル」を名称に付した大学の部局のほとんど全てにおいて、「グローバル」の英語表記である ‘Global’ をそのまま使用している。例えば、長野県立大学グローバルマネジメント学部 (Faculty of Global Management Studies)、同志社大学グローバル・コミュニケーション学部 (Faculty of Global Communications) などである。一方、「共創」もしくは「共創科学」を名称に付した大学の部局の英訳は、大学によって多種多様であり、定訳は存在しない。例を挙げると、九州大学共創学部 (Faculty of Interdisciplinary Science and Innovation)、愛媛大学共創学部 (Faculty of Collaborative Regional Innovation)、東京都立大学地域共創科学研究センター (Research Center for Co-creating System of Regional Planning</p>	
--	--

<p>and Management)、弘前大学大学院地域共創科学研究科 (Graduate School of Sustainable Community Studies) などである。</p> <p>このうち、本学部が重視する文理の学問的融合の意味合いをもっともよく表しているのは、九州大学共創学部で用いられている ‘Interdisciplinary Science and Innovation’ である。愛媛大学共創学部で用いられている ‘Collaborative’ や東京都立大学地域共創科学研究センターで用いられている ‘Co-creating’ は、より広い「連携協働」や協働による「創造」を指す印象があり、文理の学問的融合という本学部の意図を表す単語としては、意味が広すぎる。また、弘前大学大学院地域共創科学研究科で用いられている ‘Sustainable Community Studies’ は直訳するなら「持続可能なコミュニティ研究」となり、本学部が問題として捉えていることの全体像を表しているとは言えない。</p> <p>本学部の英訳名称として、「グローバル」にはその英語表記である ‘Global’ を充て、「共創科学」には文理融合の学（問）であることを意味する ‘Interdisciplinary Science and Innovation’ を用いる。 ‘Global’ は、 ‘Interdisciplinary Science and Innovation’ 全体を修飾する。</p>	
<p>(20 ページ)</p> <p>(2) 学位の名称とその理由</p> <p>【学位の名称】学士 (学術)</p> <p>(英文: Bachelor of Arts and Sciences)</p> <p>本学部の<u>全て</u>の学生は、「国際地域共生学」、「生命圏循環共生学」、「総合人間科学」の3つの領域を横断的に学修する。また、共創科学のためのリテラシーとして、語学、</p>	<p>(14 ページ)</p> <p>(2) 学位の名称とその理由</p> <p>【学位の名称】学士 (学術)</p> <p>(英文: Bachelor of Arts and Sciences)</p> <p>本学部の<u>すべて</u>の学生は、「国際地域創造学」、「生命圏循環共生学」、「総合人間科学」の3つの領域を横断的に学修する。また、共創科学のためのリテラシーとして、語学、</p>

<p>データサイエンス等のスキルを磨く。これらの学修を通じて、最終的に、俯瞰的、複眼的視点からものごとを捉える「総合知」を獲得することを目指している。このように、広く学際的分野の学問を学修するため、学位に付記する専攻分野の名称を「学術」とし、授与する学位の名称を「学士(学術)」とする。</p>	<p>データサイエンス等のスキルを磨く。これらの学修を通じて、最終的に、俯瞰的、複眼的視点からものごとを捉える「総合知」を獲得することを目指している。このように、広く学際的分野の学問を学修するため、学位に付記する専攻分野の名称を「学術」とし、授与する学位の名称を「学士(学術)」とする。</p>
---	---

(是正事項) グローバル共創科学部 グローバル共創科学科

4. 審査意見1のとおり、本学部の設置の趣旨、人材養成像及び3つのポリシーの妥当性に疑義があるため、教育課程の妥当性を判断することができない。このため、以下の点及び関連する他の審査意見への対応を踏まえて、3つのコースとの関係や3つのコースごとに学生が修得すべき専門的な知識・能力も明確にしつつ、本学部における教育課程が、適切に編成されていることを説明すること。

(1) しっかりとした専門性を修得しつつ、総合性を持った共創型の人材を育成できる教育課程及び仕組みとなっているか不明確であるため、各コースの詳細(コースごとの人数の目安や転コースの可否、選抜方法等)にも触れながら、カリキュラムマップや履修モデル等を活用して具体的に説明すること。

(2) シラバスの内容について、例えば、生命圏循環共生学研究ⅠとⅡでは科目内容の違いが不明確であるなど、学生にわかりやすく示す観点から適切であるとは判断ができないものが散見されるため、具体的に説明すること。

(3) 上記(1)(2)の対応に応じて、科目区分等の名称についても本学部の特色をより明確にする観点から適切に改めること。

(対応)

(1) 専門性と総合性を持った共創型人材を育成するための教育課程及び仕組み

是正意見1への対応で述べたように、本学部では、共創という手法を使いこなし、さらにグローバルな視点を踏まえ、課題解決に寄与する「総合知」を生み出すことのできる人材の育成を目的としている。

共創型人材が求められる社会的課題は多岐にわたるが、そのうち本学部が着目するのは、「現代に生きる人々が、より創造的かつ友好的に暮らすための課題」、「新たな価値を創生し、持続可能な循環型社会を実現するための課題」、「人間はどう在るべきかを問い続け、真の豊かさを主体的に実現するための課題」という3つの未来課題群である。これらのテーマは、本学部の前身である地域創造学環も重視してきたものである。そのため本学部で育成する共創型人材には、グローバルな視点を持ちつつ共創という手法を使いこなすための知識・能力、エビデンスに基づき客観的に社会的課題を分析する力に加えて、3つの未来課題群の解決に寄与するための専門性も求められる。

以下、こうした人材を育てるための仕組みである履修指導体制について説明した上で、教育課程の説明を行う。

1) 履修指導体制

1. 学びのアドバイザー制度

本学部では、共創という手法を使いこなし、さらにグローバルな視点を踏まえ、課題解決に寄与する「総合知」を生み出すことのできる人材を育成するために、初年次から4年間の学修全般をきめ細やかに支援・指導する「学びのアドバイザー」制度を設定する。学生一人ひとりに専任教員が学びのアドバイザーとなり、以下の項目を中心に、履修計画から学生生活全般に至る内容について、年4回個別面談を行う。なお、学びのアドバイザーによる履修指導の状況は、本学部の「教務委員会」で共有する。また、学びのアドバイザー制度が適切に機能しているかどうかは、設置の趣旨等を記載した書類 11—(3)に記載した「教育質保証委員会」において、組織的な点検・評価・改善等を行う。

- ①履修登録に関する事項
- ②履修モデル構築に関する事項
- ③学修の進め方に関する事項
- ④コース分属に関する事項
- ⑤研究室配属に関する事項
- ⑥進路・就職等に関する事項
- ⑦学籍異動（休学、退学等）に関する事項
- ⑧成績不振学生への助言や指導
- ⑨大学生活についての相談等

特に、文理融合型の複雑な学修過程の中で主体的な学修ができるよう1年次には①～③の事項を、2年次では、課題解決のために共創し「総合知」を生み出すべく④に関する事項を、更に3年次は⑤⑥について重点的に支援・指導を行う。なお、資格の取得に関しては、③の一部として、4年間を通じてアドバイスをを行う。

2. コース分属

コース分属は、以下のルールにより実施する。

- ① コース所属学生数は30～50名と幅を持たせ、学生の希望を最大限尊重する。
- ② 分属にあたり、学生は「コース志望理由書」を提出し、この志望理由書を学びのアドバイザーが以下3項目で評価し、分属するコースを決定する。
 - 1) コース選択の具体的な理由（課題設定、その課題を設定した理由）が論理的に説明されているかどうか
 - 2) 選択コースにおける履修計画が、1)の内容に相応しい内容になっているかどうか
 - 3) 選択コース履修後（卒業後）、どのような進路を考えているか、その説明が具体的かつ論理的に説明されているかどうか

なお、各コースの分属学生数にアンバランスが生じないように、1年次から学びのアドバイザーによる指導を綿密に行う。

- ③ コース希望者数が大幅に超えた結果、本来の希望とは異なるコースに所属することになった場合には、学生が希望していたコースの専任教員が、卒業研究における副指導教員になる等のアフターケアを行う。
- ④ コース分属後の転コースを認める。ただし、「希望していたコースとは異なる」という理由だけでコースを変更することは認めない。コースで学ぶ中で、転コースした方がより適切な指導を受けられる場合などが想定される。転コースについては、学びのアドバイザーが当該学生と十分相談の上で決定する。

設置申請書では、学びのアドバイザー制度に関して、設置の趣旨等を記載した書類「15. 社会的・職業的自立に関する指導等及び体制」において、「履修計画から進路指導まで細かい指導や相談対応ができる体制とし、文理融合型の複雑な学修過程の中で主体的な学修ができるよう指導・支援を行う」と記載していたが、学びのアドバイザー制度及びコース分属のルールは、履修指導の根幹に関わるため、「5. 教育方法、履修指導方法及び卒業要件」において、上述のような形でより具体的に記述することとした。

2) 教育課程

本学部では、1年次前期に共創の概念を学んだ上で、1・2年次においてデータサイエンス、グローバル、人文・社会科学、自然科学の要素を身につけ、3年次以降は、1・2年次の要素を土台に専門教育を行うという指針でカリキュラムが構成されている。

教育課程の開始時である1年次前期において、学生は1年次前期に共創科学系科目を履修する。これらの科目は、「共創とは何か」を伝えるものであり、本学部が着目する未来の課題群を提示する科目と、共創を通じて専門的知識を社会へ還元することをイメージできる科目から成り立っている。これらの科目を通じて、学生は、カリキュラム初期に「なぜ共創という手法を身につけ、高度な専門的知識を学ばないといけないのか？」ということに対する自らの答えを明確化させ、その後も高いモチベーションの下、学修に取り組むことができる。なお、申請書類では、一箇所において、課題提示から始まる本学部の教育を「くさび型教育」と記載している。申請書類で言う「くさび型教育」とは、共創系科目を通じて得たモチベーションの下、共創の手法に関わる基礎的な科目と専門科目を結びつける教育ということを意味する。しかし、通常くさび型教育は異なる意味で用いられるため、この表現を削除する。

1年次後期から2年次にかけては、具体的に共創を実践する上で必要とされる知識・能力をそれぞれバランスよく獲得できるように、科目を配置している。(ただし「基礎数学」は、1年次後期以降のデータサイエンス教育がスムーズに始められるように1年次前期に配置している。) 具体的には、人文・社会科学系科目、自然科学系科目、グローバル系科目、デ

一タサイエンス系科目を履修することにより、人文・社会科学から自然科学に至る幅広い知識、外国語のコミュニケーションスキルを含む、多様な人と協働する能力、地球規模の課題と地域社会の課題を結びつける能力、客観的に社会的課題を分析する能力などを育成することができる。なお、複眼的・俯瞰的に社会的課題を捉える上では、人文・社会科学系科目と自然科学系科目両者が含まれているだけでなく、両者のバランスも重要になる。また、これらの科目はコース専門教育の基礎を提供している側面もある。これら両者の観点から科目の見直しを行い、今回自然科学に関連する科目を中心に新規に科目（基礎物理学、基礎地学）を追加することになった。また、基礎化学、基礎生物学は、コース専門科目から自然科学系科目に移動した。

授業科目の名称	講義等の内容
基礎物理学	力学、波動、電磁気学、熱力学等の基本的な理解を通じて、身の回りに起こる様々な自然現象を定量的に記述できる能力を身につけることを第一の目的とする。また、これらの学修を通じて、現代社会で実用化されている様々な科学技術の原理を理解するとともに、合理的かつ批判的な思考方法を身につけることを第二の目的とする。
基礎地学	静岡県においては、南海トラフ巨大地震・津波、富士山と伊豆東部火山群の噴火の可能性、さらに、2021年に発生した熱海の土砂災害など、これらの自然災害への対応は、地域社会の持続的発展にとって不可欠であるため、本講義では、自然災害に関する地学の内容を講義し、自然災害に関する基礎知識を修得することを目的とする。

3年次以降は、各コースに所属した上で専門教育を行う。共創科学系科目によって本学部の目指す共創型人材の下地を形成し、それに続く、グローバル系科目、データサイエンス系科目、人文・社会科学系科目、自然科学系科目を履修することで、コース専門科目に連続的に接続可能な基礎学力を獲得する。つまり、グローバル系科目（16単位）、データサイエンス系科目（12単位）、人文・社会科学系科目と自然科学系科目（計26単位）は、共創という手法を育成する上で必要な科目であると同時に、各コースにおける専門教育の基礎という側面を持つ。1・2年次の基礎の上に、3年次からの専門性の高いコース専門科目（計26単位）が上積みされることとなるのである。また、コース専門科目では、それぞれの講義・演習等は、各学問領域の要点を凝縮した内容とすることにより、限られた単位数の中でも各

コースの専門性を担保すべく、一部の科目（基礎化学、基礎生物学）を共創科学系科目に移動するとともに、より専門性を獲得すべく、新規に講義科目（「農村・森林の環境と法」「環境工学」「バイオテクノロジー」「技術者倫理」「環境微生物学」）を追加した。

なお、本学部では、広範囲の学問領域を俯瞰的に学修するという観点から、できる限り学問分野の本質的な内容を抽出した講義を多数開講しており、専門科目における選択科目の中には、内容が区分可能な講義は8回の講義科目（半期の講義：1単位）としているものがある。これは、学生が自らの興味や必要性に合わせた多様な講義を多数履修することを可能とするための措置であり、それぞれの科目における講義内容は1単位で完結するように設定されており、独立した専門性は保たれている。ただし、各講義の内容や組合せを再検討し、一部講義で単位数の見直しを行った。

以上を視覚化した本学部の教育課程の全体図（カリキュラム・マップ簡略版）は、以下のとおりである（詳細なものについては別添資料1を参照）。

なお、カリキュラムマップについては、直近で大学設置が認可された他大学のカリキュラムマップを参考に作成した。学校教育法施行規則第165条の2第2項を踏まえ、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーと各科目群の対応関係が体系的に分かるよう配列することで、3ポリシーの一貫性を示すとともに、科目群同士の体系（履修の順序や関連するディプロマ・ポリシーへの導き方等）も分かるように図示したものである。これらの前提を原則に、以下の作成方法により作成している。※カリキュラムマップの作成により、本学部における3つのポリシーと教育課程の体系性を示したことに伴い、申請書類に記載していた図「グローバル共創科学部におけるビジョンとトライフォース」（P12）は削除する。

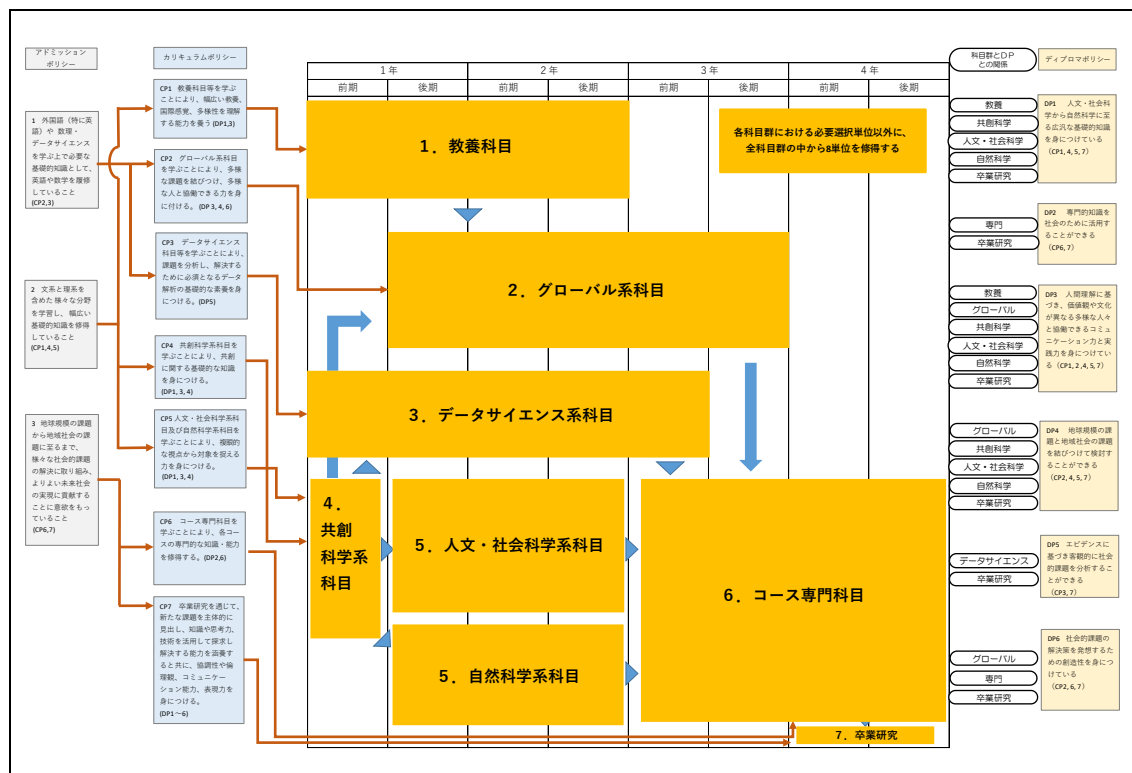
<カリキュラムマップの作成方法>

1. 全体構成としては、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーに定めるそれぞれのポリシーの対応関係を、アドミッション・ポリシーとカリキュラム・ポリシーを矢印で、カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーを楕円枠で示している。また、各年次において、ディプロマ・ポリシーのどの能力を、どの授業科目を履修することで身につけていくのかを示すために、カリキュラム・ポリシーとディプロマ・ポリシーの間に教育課程を示すことで、全体の関係性との一貫性を示した。更に、想定される進路・就職先に結びつけることで、ディプロマ・ポリシーに定める能力を備えた学生の進路のイメージを示した。

2. 学校教育法施行規則第165条の2第2項に定める各ポリシーの対応関係については、カリキュラム・ポリシーに対応するディプロマ・ポリシー、ディプロマ・ポリシーに対応するカリキュラム・ポリシーが分かるように、それぞれのポリシーの項目にディプロマ・ポリシーには「(CP1)」のように、カリキュラム・ポリシーには「(DP1)」のように、明確に記載

するとともに、アドミッション・ポリシーがカリキュラム・ポリシーに沿って設定されていることも分かるように、アドミッション・ポリシーの項目にも同様に「(CP1)」のように記載することで、一貫性を明確にした。

3. 本学部において開講する全ての授業科目（教養科目は一部のみ、3年次から選択する自コース以外の他コース専門科目は除く）について、いずれかの科目群に分類されていることを示すとともに、各科目群において必修科目又は選択科目の必要単位数、及び、当該科目が必修又は選択科目であるかが分かるように色分けして示した（詳細は凡例に記載）。また、科目群同士の体系性を三角矢印で示すことで、1・2年次において、1年前期に共創の概念を学んだ上で、1・2年次においてデータサイエンス、グローバル、人文・社会科学、自然科学の要素を身につけ、3年次以降は、1・2年次の要素を土台に専門教育を行うという本学部の指針を示すものとなっている。



以下、表における番号に沿い説明を行う。

1. 教養科目

さまざまな専門家との協働を前提とする共創においては、専門家が互いのアプローチを理解する必要がある。そのため本学が養成する共創型人材には、人文・社会科学から自然科学に至る広汎な基礎的知識が求められる。本学部では、こうした知識を身につける場として教養科目を位置付けている。また、教養科目における多様な科目や英語教育の履修を通じて獲得される知識や能力は、以下に述べるグローバル系科目、データサイエンス系科目、共創

科学系科目、人文・社会科学系及び自然科学系科目の履修を通じて、学生が、人間理解に基づき、価値観や文化が異なる多様な人々と協働できるコミュニケーション力と実践力を身につけることに寄与する。

2. グローバル系科目

この科目では、コミュニケーション中心の外国語（英語）の授業、フィールドワークや海外研修など体験を重視する授業を通じて、価値観や文化が異なる多様な人と協働できるコミュニケーション力や実践力、地球規模の課題と地域社会の課題を結びつけて検討する力、さらには社会的課題の解決策を発想するための創造性の育成を目指している。これらの科目を「グローバル」の下に一つにまとめたのは、二つの意味でグローバルな人材、すなわち、地球規模の視点から社会的課題を検討でき、国際的な舞台上で主体的に活躍できる人材を育成する上で、これらの科目が重要な役割を果たすからである。

この科目群において柱となっているのは、高いレベルでの語学力（英語力）を育成する授業、海外研修、コラボラティブ・ワークスである。以下、順に説明する。

① 外国語（英語）

外国語（英語）の授業では、英語の4技能、すなわちリスニング、リーディング、スピーキング、ライティングの能力をバランスよく身につけさせる。高校までの英語教育では、リーディングやリスニング、ライティングが主であり、スピーキングの能力に課題があることがわかっている。スピーキングの能力は英語によるコミュニケーションにおいて必須であることから、本学の教養科目における英語科目でもスピーキングの能力を伸ばす科目を多く設置している。本学部の学生は教養科目の英語授業に加え、本グローバル系科目で設定しているスピーキングの能力の涵養を重視した科目を3年次前期まで履修することで、3年次前期までの毎学期にスピーキングに関わる必修の講義を通し、常にスピーキングを学べる設計となっている。これらの科目に加え、選択科目でライティングをはじめとする他の英語3技能を学び、共創に最低限必要な英語の4技能をバランスよく獲得した学生を育成する。さらに、海外の大学院への進学や国際企業で活躍を実現する英語力を身につけたい学生は、3年次後期に設置されている英語の3科目（English Writing、English Presentation、English Global Studies）、及び海外研修プログラムIIを履修することで、ビジネスの場でも円滑な意思疎通ができる英語レベルの基準として広く用いられているCEFRのB2レベルの高度な英語力を身につけることを目標として設定する。申請書類ではCEFR-B2レベルの達成を目標に設定することについて図中で提示するのみで、設定意図の説明が不十分であったため、設置の趣旨等を記載した書類の「4-(2)カリキュラムを構成する科目」に説明を追記する。

年次	学期	教養科目	グローバル系科目
1 年次	前期	英語コミュニケーション ^S	
		中級英語 A ^{L, S}	
	後期	中級英語 B ^{L, S}	Oral Communication I ^{L, S}
		総合英語 IA ^{L, R, S, W}	
2 年次	前期	中級英語 C ^{R, W}	Oral Communication II ^{L, S}
		総合英語 IB ^{L, R, S, W}	
	後期	英語演習 ^{L, R}	Reading & Discussion I ^{L, R, S}
	3 年次	前期	
後期			English Writing ^W
			English Presentation ^{L, S}
			English Global Studies ^{L, R, S, W}

太字は必修科目。L：リスニング、R：リーディング、S：スピーキング、W：ライティング

科目群名称を変更し、新たにグローバル系科目群にしたことに伴う対応表は以下のとおりである。

科目区分		授業科目の名称		科目区分	授業科目の名称	
学部 共通 科目	外国語科目	Oral Communication I		学部 共通 科目	グローバル系科目	Oral Communication I
		Oral Communication II				Oral Communication II
		Reading & Discussion I				Reading & Discussion I
		Reading & Discussion II				Reading & Discussion II
		English Writing				English Writing
		English Presentation				English Presentation
		English Global Studies				English Global Studies
		小計(7科目)				コラボラティブ・アプローチ基礎演習
地域・ グローバル 演習科目	海外研修プログラム I	海外研修プログラム I				
	海外研修プログラム II	海外研修プログラム II				
	コラボラティブ・ワークス I	コラボラティブ・ワークス I				
	コラボラティブ・ワークス II	コラボラティブ・ワークス II				
	コラボラティブ・ワークス III	コラボラティブ・ワークス III				
	コラボラティブ・ワークス IV	コラボラティブ・ワークス IV				
	コミュニティサービスラーニング	コミュニティサービスラーニング				
	共創科学調査法	ファシリテーション概論				
	共創科学実験法(人間科学)	アートラボ				
	共創科学実験法(自然科学)	小計(17科目)				
	ファシリテーション概論					
	アートラボ					
	小計(13科目)					

② 海外研修

以上のような外国語の能力、特に Speaking 能力を、海外研修 I, II の授業で実践することを通じて、語学力よりも更に幅広い、価値や文化の異なる人と協働できるコミュニケーション能力を身につける。「海外研修プログラム I, II」で想定しているのは、海外留学及び海外研修である(「6. 海外語学研修の具体的計画」参照)。本学の他学部では、概ね 10%、多くても 20%程度の学生が、学内の仕組みを通して海外へ留学している。本学部では、2つの意

味でのグローバル（地球規模の視点からの社会的課題の検討、国際的な舞台での主体的な活躍）な人材の育成のため、倍以上の比率の学生（50%）が実渡航による留学を経験することを設定していた。しかし、現在の新型コロナウイルス感染症の状態や、将来的な同様の感染症の蔓延、この数年における世界的なオンライン講義の充実を踏まえ、実渡航で目標数値の設定をするのは困難と考え、オンライン留学を含めて目標数値を100%に変更し、申請書の記載を改める。しかしながら、前述のように、現状においては感染症の蔓延が想定されることや世界情勢が不安定なこともあり、学生の不安と受け入れ大学の事情を考慮して必修科目とはせず、状況を見極めながら全員が留学できるよう努めるものとする。

本学は、計26か国60大学と大学間交流協定を結んでおり、オンラインを含む多数の既設の留学プログラムが存在している。留学プログラムの内容に関しては、いずれも語学力・コミュニケーション力だけでなく、地球規模の課題と地域社会の課題を結びつけて検討する力、更には社会的課題の解決策を発想するための創造性も同時に育成するものとなっている。例えば、下表に示すフィリピン・GITC (Green International Technological College) 英語・SDGs 研修グローバルリーダーコース（グループ・マンツーマン）では、マンツーマンレッスン（50分×30コマ）によってスピーキングスキルとリスニングスキルを向上させ、グループレッスン（50分×10コマ）を通して実践的英語力、コミュニケーションスキルを向上させることを特徴としたプログラムである。これらは、本学部の目指す、価値観や文化が異なる多様な人と協働できるコミュニケーション力や実践力の向上に大きく寄与する。また、ディスカッションのテーマにSDGsを明確に掲げており、開発途上国が抱える社会問題などを学び、現地NGO団体職員へのインタビューを行う、SDGs授業、現地学生との国際交流などが企画されている。

このような体験型プログラムによって、英語を用いて、多様な課題解決に協働して取り組む経験が得られる。

本学における研修・留学先の例

実施機関	プログラム名	内容
カナダ・アルバータ大学春季オンライン短期プログラム	CSGCO (Communication Skills for Global Citizenship Online) プログラム	歴史、文化、SDGs、コミュニティーエンゲージメント、異文化間コミュニケーションなどのテーマを通して、カナダとグローバルコミュニティーについて学ぶ
	ESTO (English for Science and Technology Online) プログラム	アカデミックな場で求められる英語とコミュニケーションスキルの修得

アメリカ・ネブラスカ 大学オマハ校 オンライン短期プログラム	Shizuoka Summer Program Culture & Fluency	英語学習＋日米共通のテーマや音楽などのオマハならではのトピックについて現地学生も交えて学び、アメリカ・オマハについての理解を深める。
フィリピン・GITC(Green International Technological College) 英語・SDGs 研修	Global Leader コース (グループ・マン ツーマン)	英語・SDGs 研修・国際交流
	TOEIC コース/ IELTS コース (グループ・ マンツーマン)	英語・SDGs 研修・国際交流
オーストラリア・ウー ロンゴン大学 英語学 習＋SDGs プロジェク トワーク研修	Sustainable Development goals in Focus	英語研修及びグループでのプロジェク トワーク
オーストラリア・アデ レード大学 英語学習 ＋プロジェクトワーク 研修	Global Jinzai Program	英語・オーストラリア文化研修及び現 地学生とのプロジェクトワーク

③ コラボラティブ・ワーク

本学部では、国内におけるフィールドワークをとおして、現実の社会的課題に対して、課題のフィールドで、学生が専門的知識をもつ者や社会のステークホルダーと解決に向けて協働する「コラボラティブ・ワーク」の経験を積むことを重視している。

これを受け、グローバル系科目におけるもう一つの柱として、学生は地域社会との関わりを通じて、社会的課題に主体的に関わり、課題を発見、探求し、解決を構想するプロセスを体験的に学び、多様な人々と協働する際に必要なコミュニケーション能力を修得する。

「コラボラティブ・アプローチ基礎演習」(1年後期、必修、2単位)は、学生が共創に向けて「他者と協力して、主体的に考察を行う」基礎的な姿勢と技能を身につけることを重視する。「コラボラティブ・ワークス I～IV」(2～3年、選択、各1単位)は、学生が実際に協働し、知をつなぐ方法を実践的に身につけるための授業科目であり、IからIVの各科目に、フィールドへの参与、課題発見、探究、解決という段階が発展的に充てられている。

具体的な連携先としては、地域創造学環及び農学部が連携してきた学外のステークホルダーを想定している。本学部の前身である地域創造学環は、静岡県内の自治体、企業、NPO、地域住民などのステークホルダーと連携し、静岡県内において「フィールドワーク I・II AB・III AB」(各1単位)の授業を展開してきた実績がある。また、農学部においても、学生が農

業及び農村についてフィールドワークをとおして学ぶ「農業環境演習（実践農学演習）Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」（Ⅰは2単位、Ⅱ・Ⅲは3単位）が開講されており、多数の連携先を有している。本学部の「コラボラティブ・ワークスⅠ～Ⅳ」の実施にあたっては、これまで地域創造学環及び農学部が連携してきたステークホルダーの一部との関係を引き続き継続するほか、本学部を中心に他学部の教員の協力・連携により、新たに連携先を開拓する予定である。

また、「ファシリテーション概論」（1年後期、選択、1単位）、「アートラボ」（2年後期、選択、1単位）のように、協働のためのツールやスキルを学ぶ科目も設置している。

3. データサイエンス系科目

社会的課題に取り組む上では、その課題や背景にある要因を、恣意的にではなく、客観的に分析する必要がある。そのためには、数理・データサイエンス・AIのリテラシーを学び、ユーザとして使用できるようになることが必要である。そこで本学部では、インタビューなどの質的調査や、アンケートなどの量的調査などの方法論と並び、エビデンスを示す上で必要不可欠である数理・データサイエンス・AI関係の科目を設置している。申請書では、これらの科目が「数理・データサイエンス科目」と「地域・グローバル演習科目」に分かれていたため、今回これらを「データサイエンス系科目」として一つの科目群に統一した。

数理・データサイエンス・AI関係の科目については、数理・データサイエンス・AI教育プログラム認定制度のモデルカリキュラムに準じた授業内容となっている。教養教育科目として実施する2科目（数理・データサイエンス入門、情報処理・データサイエンス演習）は、「リテラシーレベル」のモデルカリキュラムに準じた授業内容にレベルを設定した。「数理・データサイエンス入門」の授業は、「数理・データサイエンス・AI」の導入レベルの内容について網羅的に知識を学び、専門教育での更なる学修への興味・関心を高める内容とした。「情報処理・データサイエンス演習」は、大学の専門教育で求められる高度な情報機器を活用した情報処理のスキルとともに、数理・データサイエンス・AI教育の観点からエビデンスベースのレポートスキル、データ処理とデータの可視化について学ぶ授業内容とした。具体的には、現実的なテーマの仮想データを用いたデータ処理、解析等の演習を行い、「データを読む、説明する、扱う」といったスキルを育てる。以上の教養教育での2科目の学修を通して専門科目での学修の基礎を身につける。この2科目に加え、専門教育での数理・データサイエンスの学修で求められる大学レベルでの数学的知識を学ぶために、以下の「基礎数学」を追加し、1年後期以降の学修に取り組めるよう配慮している。

授業科目の名称	講義等の内容
基礎数学	データサイエンスに係る具体的技法を修得することは、文系・理系を問わず将来に資する知識となる。その理解のためには、高校数学よりも高度な大学初等レベルの線形代数や微積分の知識が必要となるため、本授業では、これらの数学を、真の道具として使えるようになることを目指す。

本学部のデータサイエンス系科目で設置した専門科目7科目（「データサイエンス基礎」、
「データサイエンス演習」、「データエンジニアリング基礎」、「AI 基礎」、「プログラミング
演習 I」、「AI 演習」、「プログラミング演習 II」）については、「応用基礎レベル」のモデル
カリキュラムに準拠した授業内容のレベルに設定している。また、データサイエンス系科目
については、データサイエンスの技術者養成ではなく、社会的課題の解決、共創の過程で
データサイエンスの知識、スキルを理解し、手法等を活用、選択できるようになることを目指
す。そのため、広くデータサイエンス関連の分野を学ぶ必要があり、分野ごとに、モデルカ
リキュラムを参考に学修内容の厳選を行い大学で求められる専門的なレベルを維持しなが
ら、1単位科目、2単位科目を設定している。例えば、「プログラミング演習 I」では、デー
タサイエンスのデータ処理で採用されるプログラミング言語である Python を採用し、クラ
ウド上のプログラミング学修環境を用いて、1単位の時間数でも効率的に大学での専門的な
データサイエンスのレベルでのプログラミングスキルを学べるようにしている。

なお、「AI 演習」や「プログラミング演習 II」などの演習系科目では、より実践的にデー
タサイエンスの活用法を学び、主体的・協働的にデータサイエンスの手法を活用できる力を
育成するため、設定された課題をチームで取り組み、解決方法を考える問題（課題）解決型
学修（Problem Based Learning: PBL）を含むチーム解決型の授業手法を取り入れている。演
習系科目におけるこうした主体的・協働的な学びは、本課題群が目指す「エビデンスに基づ
き客観的に社会的課題を分析することができる」（DP5）能力を学生が獲得する上で重要な役
割を果たすことから、この旨を申請書類に説明を追記する。

科目群名称を変更し、新たにデータサイエンス系科目群にしたことに伴う対応表は以下のとおりである。

科目区分		授業科目の名称	科目区分	授業科目の名称
学部 共通科目	数理・データサイエンス科目	データサイエンス基礎	学部 共通科目	基礎数学
		データサイエンス演習		データサイエンス基礎
		データエンジニアリング基礎		データサイエンス演習
		AI基礎		データエンジニアリング基礎
		プログラミング演習Ⅰ		AI基礎
		AI演習		プログラミング演習Ⅰ
		プログラミング演習Ⅱ		AI演習
	小計(7科目)			プログラミング演習Ⅱ
	地域・グローバル演習科目	コラボラティブ・アプローチ基礎演習		共創科学調査法
		海外研修プログラムⅠ		共創科学実験法(人間科学)
		海外研修プログラムⅡ		共創科学実験法(自然科学)
		コラボラティブ・ワークスⅠ	小計(11科目)	
		コラボラティブ・ワークスⅡ		
コラボラティブ・ワークスⅢ				
コラボラティブ・ワークスⅣ				
コミュニティサービスラーニング				
共創科学調査法				
共創科学実験法(人間科学)				
共創科学実験法(自然科学)				
ファシリテーション概論				
アートラボ				
小計(13科目)				

4. 共創科学系科目

この科目群では、共創の基礎となる考え方、概念を学ぶ。「バイオエコノミー概論」「国際地域社会とダイバーシティ」「総合人間科学概論」では、本学部が共創を通じて解決を目指す3つの未来課題群について、課題内容の概要だけでなく、現状における課題解決に向けた取組と将来の展望を示す。これにより学生は、共創という手法や高度な専門的知識を学ぶモチベーションを持つことができる。また、「コミュニティ基礎論」では、共通の関心に基づいて人々が力を合わせて目の前の課題を解決し、場合によっては更に活動を展開させて行く集まりであるコミュニティの多様な在り方を学ぶことにより、共創による課題解決の実際を示す。また、「アートシンキング・デザインシンキング」では、共創を通じて社会的課題の解決策を生み出す際に求められる創造性の土台となるデザイン思考やアート思考に関する講義を行う。

5. 人文・社会科学系科目／自然科学系科目

設置申請書における「共創科学コア科目」のうち、今回新たに設定した「共創科学系科目」以外の科目は、人文・社会科学から自然科学に至る複眼的視点から社会的課題を検討する上で、必要な知識を獲得するための科目である。今回、学生がこうした複眼的視点を確実に身につけることができるように、「人文・社会科学系科目」および「自然科学系科目」に区分した上で、後の専門教育にとって基礎となる科目を必修科目として設定した。

6. コース専門科目

① 概要

コース専門科目（26単位）のうち、4科目8単位は、各コースの名称を付した「研究」（2科目4単位、3年次配当）と「演習」（2科目4単位、4年次配当）であり、いわゆるゼミに該当する。例えば、国際地域共生学コースの場合は、「国際地域共生学研究Ⅰ・Ⅱ」、「国際地域共生学演習Ⅰ・Ⅱ」として、3年前期から4年後期まで各学期に配当している。学生は、これら科目の履修と学びのアドバイザーの指導により研究室に所属して研究を推進する。また、所属研究室の教員を主指導教員とし、加えて専門分野の異なる副指導教員（自コース、他コースは問わない）の指導の下、複眼的な研究アプローチによって課題に迫ることができる指導体制がとれる授業内容とする。コース専門科目（26単位）のうち残る18単位は、各コースにおいて取り組む課題に応じて専門的な知識・能力を深めるための授業科目である。学生は、自コースのコース専門科目を重点的に履修するが、異なる学問領域の知見を取り入れることが研究を進める上で有効だと考える場合には、他コースのコース専門科目を履修することができる。

以上により、学生は自コースの課題領域に関する専門性を重点的に学び、必要に応じて他コースの専門性も組み合わせて研究を推進する。

② 各コースの特色

ここでは、コースごとに、教育において重視している知識・能力や、そうした知識・能力を活かすことが期待される職業を想定した履修モデルを示す。本学部の前身である地域創造学環では、卒業生の約3割が公務員・教員に就職していることから、以下の履修モデルにおいても地方公共団体職員を就職先として示している。また、6割が就職している民間企業の中には、海外に拠点を持つ金融機関・物流会社や、デジタル技術を用いたサービスや製品の開発に取り組む企業も含まれており、いずれのモデルもこれまでの地域創造学環の実績を踏まえたものである。

■ 国際地域共生学コース

本コースでは、「現代に生きる人々が、より創造的かつ友好的に暮らすための課題」に取り組む。格差・貧困、差別・排除、紛争・対立など、価値観や文化が異なる人々の共生を阻む様々な課題が世界で発生している。本コースでは、人々の多様性への理解及び地域社会と国際社会の関係性への理解に基づいて、国際化する地域社会に適した人権、法、社会保障の構築(社会的排除とソーシャルインクルージョン、比較文化から見る法、国際・地域の安全と法、国際福祉社会論など)、包摂的な生活環境や災害(住居計画、防災まちづくりなど)への対応などに代表されるような地域社会の課題を地球規模の視点から読み解き、多様な人々と協働し、文化・産業・生活など地域独自の魅力・価値を活かして課題の解決を構想・発信できる人材を育成する。

こうした人材が活躍する職業として、別添の履修モデルで示した以下の3種類の職業が考えられる。

履修モデル1：海外展開する企業の企画・営業職

このモデルで挙げられている職業では、国際的な政治経済の動向に位置付けて国内外の地域社会の課題を分析し、新たな事業を構想して、異なる文化背景を持つ海外企業・政府などと協働して事業を実施することが期待される。

履修モデル2：共生社会の拠点形成を担う福祉・教育団体の総合職

このモデルで挙げられている職業では、地域社会において障害者、高齢者、外国人など多様な立場の人々が排除される原因を分析し、共生社会実現に貢献する事業を計画・実施することが期待される。

履修モデル3：地域の魅力創出・発信に専門性を発揮する公務員

このモデルで挙げられている職業では、産業、自然、食、文化など地域社会にあるさまざまな資源を発見、評価して活用すること、また多様なステークホルダーとコミュニケーション力や発信力を発揮することが期待される。

■ 生命圏循環共生学コース

本コースでは、「新たな価値を創生し、持続可能な循環型社会を実現するための課題」に取り組む。気候変動や生物多様性の危機、環境汚染などの問題に対応し(環境再生科学、環境工学など)、資源やエネルギーの再生(資源循環化学、材料科学、バイオテクノロジー、環境微生物学など)、自然と経済とが両立できるグリーンエコノミーの実現(環境共生社会

論、環境と経済、農村・森林の環境と法など)、激甚化する自然災害の被害低減など課題(自然災害の現象など)において、技術と制度の両面からサステナブルな社会の構築に貢献できる人材を育成する。

こうした人材が活躍する職業として、別添の履修モデルで示した以下の3種類の職業が考えられる。

履修モデル1：企業・NPO等もしくは地方公共団体における環境政策系職員

このモデルで挙げられている職業では、グリーンエコノミーの観点から具体的な経済・環境政策や事業計画を立案することが期待される。

履修モデル2：企業等工場の生産工程における品質管理担当職員

このモデルで挙げられている職業では、各企業の工場における生産工程で製造される製品の品質管理を行うとともに、製造ラインの環境マネジメントに取り組むことが期待される。

履修モデル3：国家及び地方公共団体における防災系専門職

このモデルで挙げられている職業では、公共セクターや企業において事前のハード・ソフトの両面から対応策を立案することが期待される。

■ 総合人間科学コース

「人間はどう在るべきかを問い続け、真の豊かさを主体的に実現するための課題」に取り組む。ここで言う「豊かさ」とは、健康(ウェルネス)だけにとどまらない、全て満たされた状態であるウェルビーイングである。人のウェルビーイングは、身体、心、周囲の環境など、さまざまなものに影響を受けていることから、本コースでは、スポーツ科学(スポーツの理論と実践I, IIなど)、哲学(ウェルビーイングの哲学など)、心理学(コミュニティ心理学など)、身体科学(身体機能のメカニズムと計測など)、法学(人間科学の課題と法など)、倫理学(生命・医療倫理学など)等の多様な学問を通じて人間のウェルビーイングを探究する。また、やがて到来するSociety5.0では、AI・ロボットとの共生が不可欠であることから、本コースでは、AI・ロボットと人間との違いは何か、こうした社会において人間の生活や幸福はどのような影響を受けるのかについても考察(生命・医療倫理学など)し、変化し続ける社会において人間の幸福を主体的に問い続け、実現することのできる人材を育成する。

履修モデル1：プロスポーツ団体（スポーツ協会）の職員、地方自治体のスポーツ振興を所管する部署の職員

このモデルで挙げられている職業では、プロスポーツ団体や地方自治体に所属し、多様なステークホルダーと共に、スポーツ文化の振興に寄与することが期待される。

履修モデル2：地方公共団体におけるデジタル振興や地域振興を所管する部署の職員

このモデルで挙げられている職業では、本学部のデータサイエンス科目や総合人間科学コースで学ばれる情報技術関連の知識・技能を活かして、国内外におけるデジタルトランスフォーメーション（DX）に寄与することが期待される。

履修モデル3：IT企業で人間中心のサービス・製品の開発に関わる企画職

この履修モデルで挙げられている職業では、高機能・高性能ではなく、サービスや製品を使う人間の視点を配慮することを通じて、人間中心の製品・サービスの創出に寄与することが期待される。

申請書類では、3コースの専門科目を全て「コース専門科目」として一括りにしていたが、履修する学生に分かりやすくするため各コースにおいて育成される知識・能力にとってコアとなる科目を、それぞれ「国際地域共生学コース専門科目」「生命圏循環共生学コース専門科目」「総合人間科学コース専門科目」へ集約した。

7. 卒業研究

前回提出の「設置の趣旨等を記載した書類」P18に「卒業研究」について記載しており、その説明として「3年次までに学習する各科目で得られた「総合知」を生かす場として、卒業研究を実施する。卒業研究を通じて、新たな課題を主体的に見出し、それを知識や思考力、技術を活用して探求し解決する能力を涵養すると共に、協調性や倫理観、コミュニケーション能力、表現力を身につける」としていたが、今回の審査意見に対する改訂（養成する人材及び3つのポリシーの妥当性）に伴い、卒業研究の内容を、以下のようにより詳細に記載する。具体的には、①専門分野の異なる専任教員による複数指導体制及び指導教員の選定方法、②卒業研究の具体的実施内容、③培われる能力、④成果物の社会への還元、を明示する。

共創型人材育成の集大成である卒業研究は、学生自らが設定した課題を解決すべく、専門分野の異なる主指導教員と副指導教員の専任教員（自コース、他コースは問わない）による指導の下、課題解決に向けた研究を実施する。指導教員の選定は、学生が取り上げる課題に対して解決するのに適当と思われる主指導教員と、専門分野が異なる副指導教員を、学びのアドバイザーとの相談の上、決定する。なお本過程で、各教員が主又は副指導する学生数をそれぞれ4～5名になるように、学びのアドバイザーが学生の指向と各教員の専門分野の調整を行う。複数指導教員の指導の下、専門分野の異なる演習・実習、実験手法を学び、成果

を的確に取りまとめ、卒業研究を完成させる。本卒業研究では、課題構想力、能動的学修能力、協働実践力、コミュニケーション力、プレゼンテーション力を育み、その成果が、学会発表・学術論文発表以外に、地方公共団体、企業、NPO等への政策提言、あるいは実演など、社会へ還元されることを念頭に置き、学生は卒業研究を実施する。

3) 卒業要件

ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーの改訂に伴い、本学部の卒業に必要な単位数の表を改訂した。

修正前

科目区分名称		単位数	
		必修	選択
教養科目		13	7
学部共通科目	外国語科目	8	2
	数理・データサイエンス科目	6	1
	地域・グローバル演習科目	2	5
	共創科学コア科目	22	18
	卒業研究	6	
専門科目	コース専門科目	8	18
自由科目			8

修正後

科目区分名称		単位数	
		必修	選択
教養科目		9	11
学部共通科目	グローバル系科目	10	6
	データサイエンス系科目	10	2
	共創科学系科目	10	
	人文・社会科学系科目	6	8
	自然科学系科目	4	8
	卒業研究	6	
専門科目	国際地域共生学コース専門科目	※2	26
	生命圏循環共生学コース専門科目		
	総合人間科学コース専門科目		
	上記の科目群から必要選択単位数を超えて履修する科目		8

※1 「教養科目」において、設置書類では必修 13、選択 7 としていたが、誤認識があり、正しくは必修 9、選択 11

※2 コース専門科目 (26 単位) のうち、4 科目 8 単位は、各コースの名称を付した「研究」(2 科目 4 単位、3 年次担当) と「演習」(2 科目 4 単位、4 年次担当) を選択することから「選択」に計上している。

※3 必修については、修正前が 61 単位、修正後が 55 単位となっている。(ただし、修正前の 61 単位は、※2 で記した各コース配属後の 4 科目 8 単位の選択科目を含んでおり、誤記であるため正確には 53 単位である。) これは、審査意見を受け、カリキュラムの体系性を見直し、科目群の変更及びそれに伴う授業科目の変更を行ったため、当初、必修科目としていた『応用倫理学概論 (2 単位)』を選択科目に変更し、当初選択科目であった『共創科学調査法 (2 単位)』と『基礎数学 (2 単位)』の計 4 単位を必修科目に変更したため必修科目が 2 単位増えたものである。

本学部では上述のとおり、地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、社会的課題が複雑多様化する現代社会の状況を踏まえ、多様な人々と協働した取り組みの下、人文・社会科学から自然科学に至る広汎な知をつなぐことで、複眼的な視点から社会的課題を捉え、「総合知」を創造・活用し、未来社会を活力と魅力溢れるものとして構想できる「共創型人材」を育成することを目的としている。本目的を達成するために DP1 から DP6 を設定しており、特に、人文・社会科学から自然科学に至る広汎な知の獲得のため、共創科学系科目群 人文・社会科学系科目／自然科学系科目群 (以上 36 単位) コース専門科目群 (26 単位) を設定し、基礎から専門までをバランス良く知識を修得するように科目を配置している。さらに、複眼的な視点から社会的課題を捉え、多様な人々と協働して課題を解決するために必要な「共創」をツールとして利用できる能力を養う目的で、グローバル系科目 (16 単位)、データサイエンス系科目 (計 12 単位) を設置している。以上のように、基礎知識、専門知識、共創の手法、これらの知識・能力に偏りが生じないように、バランス良く卒業要件単位を設定している。

(2) シラバス

今回の審査意見に対する改訂（養成する人材及び3つのポリシーの妥当性、カリキュラムの改正）に関連して、改めて全シラバスの確認を行い、「科目内容」や「体系性」の曖昧な内容を改正した。以下に改正した主なシラバスの概要を示すとともに、別添として当該シラバス（誤記や不備等の修正は除く）を添付する。

※なお、シラバスについては、専任教員担当授業について提出することとなっている。

改正したシラバスの該当授業科目	改正概要
(科目名称の変更) (新) 国際地域共生概論A (静岡・日本) (旧) 国際地域創造概論I (静岡・日本)	コース名を『国際地域創造学コース』から『国際地域共生学コース』へ変更したことに伴い、科目名称も『創造』から『共生』へ変更した。また、学内ルールに基づき、○○I、IIは科目内容に順次性がある科目、○○A、Bは順次性がなく、同じ名称で違う内容を行うものとして科目名称を整理した結果、『I』から『A』に変更することとした。
(科目名称の変更) (新) 国際地域共生概論B (アジア・オセアニア) (旧) 国際地域創造概論II (アジア・オセアニア)	上記同様の理由から、科目名称を『国際地域創造概論II (アジア・オセアニア)』から『国際地域共生概論B (アジア・オセアニア)』に変更することとした。
(内容の変更に伴う科目名称の変更) (新) 地球環境問題と法 (旧) 環境政策と法	技術と制度の両面からサステナブルな社会の構築に貢献できる人材を育成するという生命圏循環共生学コースの目的に照らして、国内法令・制度について、より充実させる内容に変更したことに伴い、名称を『環境政策と法』から『地球環境問題と法』に変更した。
(内容の変更に伴う科目名称の変更) (新) 材料科学 (旧) 資源再生材料学	別科目である「資源循環化学」と内容の重複する部分については、「資源循環化学」にまとめ、「資源再生材料学」には、広く理系分野を学ぶため、材料工学の要素を組み込む観点で内容を見直し、それに合わせて名称を「材料科学」に変更した。

<p>(授業の目標の修正)</p> <p>English Presentation</p>	<p>「授業の目標」について、当該授業科目を配置しているグローバル系科目群の設定目的に沿うものであることが明確になるよう修正した。</p>
<p>(授業内容の記載方法の修正)</p> <p>国際地域共生学研究Ⅰ</p> <p>国際地域共生学研究Ⅱ</p> <p>生命圏循環共生学研究Ⅰ</p> <p>生命圏循環共生学研究Ⅱ</p> <p>総合人間科学研究Ⅰ</p> <p>総合人間科学研究Ⅱ</p>	<p>「授業の内容」について、研究Ⅰの内容は、学生が複数の研究室において研究を行うことを通して、自らが主眼に置く研究課題と深く関わる研究室を決定することであり、研究Ⅱの内容は、研究Ⅰで決定した研究室において、専門分野の知識、技術を深掘りし、その後の卒業研究につながる課題解決能力を育むことであるなど、科目内容の違いを学生に分かりやすく示すという観点で修正した。</p>
<p>(授業内容の記載方法の修正)</p> <p>国際地域共生学演習Ⅰ</p> <p>国際地域共生学演習Ⅱ</p> <p>生命圏循環共生学演習Ⅰ</p> <p>生命圏循環共生学演習Ⅱ</p> <p>総合人間共生学演習Ⅰ</p> <p>総合人間共生学演習Ⅱ</p>	<p>「授業の内容」について、演習Ⅰの内容は、主指導教員の指導の下、自らの研究テーマを決定し、研究室メンバーや外部有識者との討論を行いながら、適切な計画に沿って研究を進めることであり、演習Ⅱの内容は、共創という手法を身につけるために、主指導教員に加え副指導教員の指導を受けながら研究成果を正確にまとめていくことであるなど、科目内容の違いを学生に分かりやすく示すという観点で修正した。</p>
<p>(授業内容の記載方法の修正)</p> <p>グローバル共創科学卒業研究</p>	<p>各コースの研究Ⅰ・Ⅱ、演習Ⅰ・Ⅱと卒業研究の体系性について、学生に分かりやすく示すという観点で修正した。</p>
<p>(学習内容の記載方法の修正)</p> <p>データサイエンス基礎</p> <p>データサイエンス演習</p> <p>データエンジニアリング基礎</p> <p>AI 基礎</p> <p>AI 演習</p>	<p>内閣府、文部科学省及び経済産業省が創設した「数理・データサイエンス・AI 教育プログラム認定制度」の「応用基礎レベル」のモデルカリキュラムに準拠した授業内容であることが分かるように修正した。</p>
<p>(学習内容の変更)</p> <p>情報処理・データサイエンス演習</p>	<p>「学習内容」について、大学の専門教育で求められる高度な情報機器を活用した情報処理のスキルとともに、数理・データサイ</p>

	エンス・AI 教育の観点からエビデンスベースなレポーティングスキル、データ処理とデータの可視化について学ぶ授業内容とした。
その他	上記の授業科目のほか、審査意見に対する改訂（養成する人材及び3つのポリシーの妥当性、カリキュラムの改正）に関連して、改めて全シラバスの確認を行い、誤記や不備等を修正した。

（3）科目区分等の見直し

審査意見1への対応によって養成する人材像を明確化し、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーを修正したことに伴い、科目区分等の名称を見直した。

- 1) 「外国語科目」と「地域・グローバル演習科目」の一部（海外研修、国内地域での実習・体験を伴うコラボティブ・ワークスなどの授業科目）を統合し、名称を「グローバル系科目」と変更した。
- 2) 「数理・データサイエンス科目」と「地域・グローバル演習科目」の一部（共創科学調査法、共創科学実験法など、調査や実験などデータを生成する手法に関する科目）を統合し、名称を「データサイエンス系科目」と変更した。
- 3) 「共創科学コア科目」を共創に関して基礎的な知識を身につける科目とより広範囲な知識を身につける科目に分類し、後者を更に文理の学問領域によって分類した。それぞれの名称を「共創科学系科目」、「人文・社会科学系科目」及び「自然科学系科目」とした。
- 4) 3コースの専門性を明確化した（是正意見4.（1）参照）ことを反映し、申請書類では一つの大括りされた科目であったコース専門科目を3分割した上で、名称を「国際地域共生学コース専門科目」、「生命圏循環共生学コース専門科目」、「総合人間科学コース専門科目」とした。
- 5) 大学設置基準上の定義と混同するため「自由科目」を「上記の科目群から必要選択単位数を超えて履修する科目」に修正した。

(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<p>(13 ページ)</p> <p>【幅広い教養の学び、共創的解決の手法の修得】</p> <p>本学部では、人文・社会科学、自然科学、人間科学を横断する幅広い教養を身につけるため、学部全体としてこれらの領域を融合した<u>共創科学系科目、人文・社会科学系科目、自然科学系科目</u>を置く。それらの知を繋ぎ問題解決にあたる<u>共創的解決に必要とされるグローバル系科目、データサイエンス系科目</u>を置く。さらに、これらの要素を土台として<u>専門教育科目</u>を置く。</p>	<p>(8 ページ)</p> <p>【幅広い教養の学び、共創的解決の手法の修得】</p> <p>本学部では、人文・社会科学、自然科学、人間科学を横断する幅広い教養を身につけるため、学部全体としてこれらの領域を融合した<u>コア科目</u>を置く。さらに、それらの知を繋ぎ問題解決にあたる<u>共創的解決の手法</u>を修得するための科目（<u>地域・グローバル演習科目群</u>など）を置く。</p>
<p>(14 ページ)</p> <p>【3つの未来課題群への着目】</p> <p>本学部の前身である<u>地域創造学環</u>では、「<u>地域共生分野</u>」「<u>地域環境・地域防災分野</u>」「<u>アート&マネージメント</u>」「<u>スポーツプロモーション</u>」といった教育プログラムを通じて、他者との共生、サステナブルな社会、真の豊かさというテーマに取り組んできた。本学部は、これらのテーマを、「<u>未来課題群</u>」として継承する。</p>	<p>(9 ページ)</p> <p>【3つの未来課題群への着目】</p> <p>本学部は社会的課題の課題に取り組むことのできる人材育成を目指す。未来社会の課題群として本学部が特に注目するテーマは、次の3点である。</p>
<p>(15 ページ)</p> <p>(2) <u>未来課題群に対応した3つのコース</u></p> <p>本学部は、<u>地域創造学環</u>における教育プログラムを基盤に、未来の課題群にとって必要となる視点や要素を検討・加味し、コースを設定した。①<u>地域創造学環</u>における「<u>地域共生分野</u>」と「<u>アート&マネージメント</u>」は、共に<u>地域共生</u>を目指し<u>地域に根ざす分野</u>であったため、ここに<u>グローバルな要素</u>を加え補強し「<u>国際地域共生学コース</u>」とし、1つ目の未来課題へ対応するコースとする。②<u>サステナブルな社会</u>を目指</p>	<p>(10 ページ)</p> <p>(2) <u>未来課題群に対応した3つのコース</u></p> <p>本学部の目指す人材育成においては、先に挙げた3つの未来課題群に総合的に対応できる素養を重視する。しかしながら、必要とされる専門的知識を一人で獲得・総合して解決するような人材の教育は非現実的である。総合知を実現・活用するには、3つの課題に関する素養はもちつつも、いずれかの課題に関する専門性を有し、そうした人材集団が集まり「<u>共創する</u>」プロセスを構築することが必須となる。そこで本学</p>

す「地域環境・地域防災分野」については、既にグローバルの要素を含んでいたが理系的な要素が不足していたため、課題解決に不可欠な理系的な技術の要素やイノベーションに繋がる技術の要素を加味して「生命圏循環共生学コース」とし、2つ目の未来課題へ対応するコースとする。③「スポーツプロモーション」については、地域社会における真の人間の豊かさを追究していたが、未来社会を考える上で人間一人ひとりのウェルビーイングをグローバルな視点で考えることも不可欠であり、従来欠けていたグローバルの視点を加え、更に理系的要素も補強した上で、最先端技術と人間（の真の豊かさ）の融合を目指し、心理、倫理、情報などの分野を加えて「総合人間科学コース」とし、3つ目の未来課題へ対応するコースとする。以上のとおり、地域創造学環の取り組みを発展的に継承するものとして3つのコースを設定した。

3つのコースは、以下のとおりである。

【国際地域共生学コース】

国際地域共生学コースでは、「現代に生きる人々が、より創造的かつ友好的に暮らすための課題」に取り組む。格差・貧困、差別・排除、紛争・対立など、価値観や文化が異なる人々の共生を阻む様々な課題が世界で発生している。本コースでは、人々の多様性への理解及び地域社会と国際社会の関係性への理解に基づいて、国際化する地域社会に適した人権、法、社会保障の構築(社会的排除とソーシャルインクルージョン、比較文化から見る法、国際・地域の安全と法、国際福祉社会論など)、包摂的な生活環境や災害(住居計画、防災まちづくりなど)への対応などに代表されるよう

部は、1つ目の課題を念頭に「国際地域創造学コース」を、2つ目の課題を念頭に「生命圏循環共生学コース」を、そして3つ目の課題を念頭に「総合人間科学コース」を設定する。

なお、すべての学生は「共創科学コア科目」の履修を通じて、これら3つの領域を2年次までに複合的・横断的に学修する。3年次以降は、各学生がそれぞれの領域をより深く学ぶべく、1つのコースを選択し、コース内の専門科目の履修を通じて、未来社会の課題群を解決する力を養う。社会を見る切り口として特定のテーマに軸足を置き一定の専門性を有しながらも、コースをまたいだ共通カリキュラムを履修することで、卒業研究等もコース間の協力のもと実施する。これは1～2年の体系的な学びの上に3年生以降の専門を築き上げる従来の体系とは異なり、本学部における1～2年の学びは、それぞれが有機的・双方向的に繋がらうきっかけとしての科目であり、3年次以降もその学びとの間を行き来しながら本学部の研究のかたちはつくられていく。

3つのコースは、以下の通りである。

【国際地域創造学コース】

国際社会と地域社会の課題は、相互に影響を及ぼし合って大規模化・複雑化し、その発生と解決には以前にも増して多様な主体が関与している。未来の社会をデザインする上で重要なことは、マクロ・ミクロ双方の視点から複合的に社会的課題を検討し、多様な他者と協働して、社会がもつ魅力や強みを繋いで新しい価値を創造・発信していくことである。本コースでは、静岡県や日本を起点にしつつも、地球全体の利

な地域社会の課題を地球規模の視点から読み解き、多様な人々と協働し、文化・産業・生活など地域独自の魅力・価値を活かして課題の解決を構想・発信できる人材を育成する。

【生命圏循環共生学コース】

生命圏循環共生学コースでは、「新たな価値を創生し、持続可能な循環型社会を実現するための課題」に取り組む。本コースでは、気候変動や生物多様性の危機、環境汚染などの問題に対応し（環境再生科学、環境工学など）、資源やエネルギーの再生（資源循環化学、材料科学、バイオテクノロジー、環境微生物学など）、自然と経済とが両立できるグリーンエコノミーの実現（環境共生社会論、環境と経済、農村・森林の環境と法など）、激甚化する自然災害の被害低減など課題（自然災害の現象など）において、技術と制度の両面から（サステナブルな社会の構築に貢献できる人材を育成する。

【総合人間科学コース】

総合人間科学コースでは、「人間はどうかあるべきかを問い続け、真の豊かさを主体的に実現するための課題」に取り組む。ここで言う「豊かさ」とは、健康（ウェルネス）だけにとどまらない、全て満たされた状態であるウェルビーイングである。人のウェルビーイングは、身体、心、周囲の環境など、さまざまなものに影響を受けていることから、本コースでは、スポーツ科学（スポーツの理論と実践 I, II など）、哲学（ウェルビーイングの哲学など）、心理学（コミュニティ心理学など）、身体科学（身体機能のメカニズムと計測など）、法学（人間科学の課題と法など）、倫理学

益の観点から地域と世界を架橋し、社会における包摂と積極的な調和を図っていくことのできる人材を養成する。社会学・文化人類学・法学・芸術文化・工学などの学問領域を切り口としながらも、自らが他者と協働・連携するだけではなく、社会において協働の場づくりと連携による課題解決の構想ができる能力を修得することを目指す。そのために、グローバルとローカルを通底する社会的課題を考察する思考力を修得するための科目、言語にとどまらずコミュニケーション・スキルの幅を広げるため、文化芸術系の科目を重視する。

【生命圏循環共生学コース】

人類社会の課題として、サステナビリティを実現する新しい「生命圏に根差した社会 (Biosphere-based-Society)」を構築するため、その駆動力となる生命圏に根差した社会経済 (Bioeconomy) の実現に向けた国際的な動きが活発化している。そのため、地球の限界 (Planetary Boundary) を見定めた生命圏の恵みの効率的な活用と再生、それに伴うリスクの回避を支える経済制度と技術開発を融合させた社会実装を行う、地球規模の視点をもちつつも技術と社会の双方に精通した人材の育成が求められている。具体的には、国内外の最新の情報を学び発信するための語学力や情報分析能力、教養を踏まえつつ、エネルギーや材料科学、防災などの再生可能かつ循環型の技術や、経済や社会の制度についての学修を中心に行う。

【総合人間科学コース】

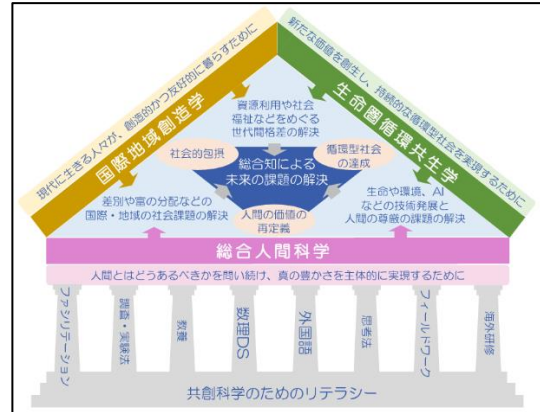
未来社会の課題群は、人と人との分断、心と身体に分断から生じているという認識のもと、本コースでは、「心的存在として

<p><u>(生命・医療倫理学など)等の多様な学問を通じて人間のウェルビーイングを探究する。また、やがて到来する Society5.0では、AI・ロボットとの共生が不可欠であることから、本コースでは、AI・ロボットと人間との違いは何か、こうした社会において人間の生活や幸福はどのような影響を受けるのかについても考察(生命・医療倫理学など)し、変化し続ける社会において人間の幸福を主体的に問い続け、実現することのできる人材を育成する。</u></p> <p>なお、<u>全ての学生は「共創科学系科目」、「データサイエンス系科目」、「グローバル系科目」、「人文・社会科学系科目」及び「自然科学系科目」の履修を通じて、これら3つのコースの領域を2年次までに複合的・横断的に学修する。3年次以降は、各学生がそれぞれのコースの領域をより深く学ぶべく、1つのコースを選択し、コース内の専門科目の履修を通じて、未来社会の課題群を解決する力を養う。社会を見る切り口として特定のテーマに軸足を置き一定の専門性を有しながらも、コースをまたいだ共通カリキュラムを履修することで、卒業研究等もコース間の協力の下で実施する。これは1～2年の体系的な学びの上に3年生以降の専門を築き上げる従来の体系とは異なり、本学部における1～2年次の学びは、それぞれが有機的・双方向的に繋がらうきっかけとしての科目であり、3年次以降もその学びとの間を行き来しながら本学部の研究の形は作られていく。</u></p>	<p><u>の人間」、「身体的存在としての人間」、「社会的存在としての人間」を個別的・統合的に検討し、これら3要素が調和した、人間のウェルビーイング (well-being) の新たな考え方に基づき、ウェルビーイングの向上、人間相互の繋がり(絆)、環境との共生を積極的に生み出し、マネジメントできる人材を養成する。なお、やがて到来する Society5.0では、情報科学技術の利用や AI・ロボットとの共生が不可欠であることから、本コースでは、上記の3要素に関連する、哲学・心理学・身体科学・スポーツ科学・法学・倫理学といった学問領域だけではなく、情報科学の教育も重視する。</u></p>
---	---

(17 ページ)

削除

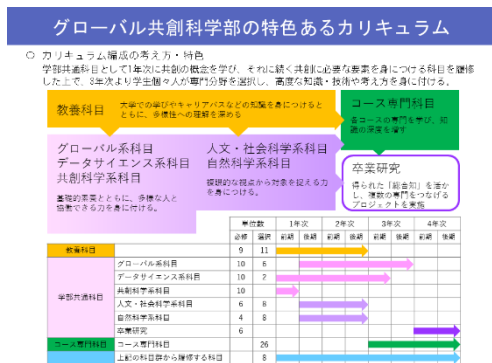
(12 ページ)



(22 ページ)

(2) カリキュラムを構成する科目

下図にグローバル共創科学部の特色あるカリキュラムとして、各科目群の説明及び学年進行に伴う科目履修イメージを示すとともに、下図以降で各科目群の詳細な説明を記載する。



I) 教養科目

さまざまな専門家との協働を前提とする共創においては、専門家が互いのアプローチを理解する必要がある。そのため本学が養成する共創型人材には、人文・社会科学から自然科学に至る広汎な基礎的知識が求められる。本学部では、こうした知識を身につける場として教養科目を位置付けている。また、教養科目における多様な科目や

(17 ページ)

(2) カリキュラムを構成する科目



I) 共創科学コア科目

本学部の教育においては、中心的な役割を果たす科目の一つとして、共創科学コア科目を置く。共創科学コア科目では、ウェルビーイング (well-being) を実現するために不可欠な、「国際地域創造学」、「生命圏循環共生学」、「総合人間科学」の3つの領域をすべての学生が学修する。人間科学による自己の理解をもとに、社会を形

<p>英語教育の履修を通じて獲得される知識や能力は、以下に述べるグローバル系科目、データサイエンス系科目、共創科学系科目、人文・社会科学系及び自然科学系科目の履修を通じて、学生が、人間理解に基づき、価値観や文化が異なる多様な人々と協働できるコミュニケーション力と実践力を身につけることに寄与する。</p>	<p>成する他者の理解をもって、国際地域創造が可能となり、その上で、生命圏の循環共生における自分の果たすべき役割が見えてくる。このように、地球規模のマクロな視点と生物単位のマクロな視点を往復することで、俯瞰的、複眼的視点からものごとを捉える「総合知」の獲得を目指す。これらの講義は、自発的に深くものごとを捉えるための工夫として、反転授業やグループディスカッションを含んでおり、ものごとを探究することへの積極性、共生の真の理解など、深淵な思考ができる人材を育成する。</p>
<p>II) グローバル系科目</p>	<p>この共創科学コア科目で培われた教育コンテンツは、大学全体における教養科目として、他学部のカリキュラムにも反映され、将来的に静岡大学のリベラルアーツ教育として機能させることも計画されている。</p>
<p>この科目では、コミュニケーション中心の外国語（英語）の授業、フィールドワークや海外研修など体験を重視する授業を通じて、価値観や文化が異なる多様な人と協働できるコミュニケーション力や実践力、地球規模の課題と地域社会の課題を結びつけて検討する力、さらには社会的課題の解決策を発想するための創造性の育成を目指している。これらの科目を「グローバル」の下に一つにまとめたのは、二つの意味でグローバルな人材、すなわち、地球規模の視点から社会的課題を検討でき、国際的な舞台上で主体的に活躍できる人材を育成する上で、これらの科目が重要な役割を果たすからである。</p>	<p>この共創科学コア科目とは別に、大学生活への導入など、従来の教養科目による教育も行う。</p>
<p>この科目群において柱となっているのは、高いレベルでの語学力（英語力）を育成する授業、海外研修、コラボラティブ・ワークスである。以下、順に説明する。</p>	<p>II) 教養科目 教養科目では、大学の学びやキャリアパスなどの知識を身につけるとともに、多様性への理解を深め、英語によるコミュニケーションの基礎となるスキルを獲得する。また、実践的な基礎科目として、以下の通り、外国語科目、数理・データサイエンス科目、地域・グローバル演習科目等を置く。</p>
<p>① 外国語（英語）</p>	<p>III) 外国語科目 外国語科目では、単なる語学ではなく、世界を相手に交渉ができ、かつ信頼を得られるレベルを目標とし、プレゼンテーションやディベートの十分な経験を積む。</p>
<p>外国語（英語）の授業では、英語の4技能、すなわちリスニング、リーディング、スピーキング、ライティングの能力をバランスよく身につけさせる。高校までの英語教育では、リーディングやリスニング、ライティングが主であり、スピーキングの能</p>	<p>IV) 数理・データサイエンス科目</p>

力に課題があることが分かっている。スピーキングの能力は英語によるコミュニケーションにおいて必須であることから、本学の教養科目における英語科目でもスピーキングの能力を伸ばす科目を多く設置している。本学部の学生は教養科目の英語授業に加え、本グローバル系科目で設定しているスピーキングの能力の涵養を重視した科目を3年次前期まで履修することで、3年次前期までの毎学期にスピーキングに関わる必修の講義を通し、常にスピーキングを学べる設計となっている。これらの科目に加え、選択科目でライティングをはじめとする他の英語3技能を学び、共創に最低限必要な英語の4技能をバランスよく獲得した学生を育成する。さらに、海外の大学院への進学や国際企業で活躍を実現する英語力を身につけたい学生は、3年次後期に設置されている英語の3科目（English Writing、English Presentation、English Global Studies）、及び海外研修プログラムIIを履修することで、ビジネスの場でも円滑な意思疎通ができる英語レベルの基準として広く用いられているCEFRのB2レベルの高度な英語力を身につけることを目標として設定する。

数理・データサイエンス科目では、IT・AI等に関する基礎的な知識やスキルを獲得する。

V) 地域・グローバル演習科目

地域・グローバル演習科目では、海外の大学に短期滞在する「海外研修プログラム」、社会的課題への参与、発見、探求、解決のプロセスを多様な専門性やステークホルダ

ーとの共創を通じて学ぶ「コラボラティブワークス」等があり、個々が実体験を通じてグローバルな感覚を養い、課題解決を実践する。これらの基本スキルは「未来社会」を生きるための武器となる。

さらに、上記の科目で得た知識、スキルを深化させ、また補完する科目として、専門科目、自由科目、卒業研究を置く。

VI) 専門科目

本学部は、ウェルビーイングを実現するために不可欠な、「国際地域創造学」、「生命圏循環共生学」、「総合人間科学」の3つのコースからなる。学生は1つのコースを選択した上で、それぞれの分野でチームとして現実社会における諸課題に直接対峙し、他者と連携した課題解決の実践経験を経て、「総合知」を達成するために自身の学びを深めていく。

VII) 自由科目

自由科目では、知識の幅を広げ、また学びを深めるため、履修可能な科目全体を見渡し、学修計画を立てることを促す。

VIII) 卒業研究

3年次までに学習する各科目で得られた「総合知」を生かす場として、卒業研究を実施する。卒業研究を通じて、新たな課題を主体的に見出し、それを知識や思考力、

年次	学期	教養科目	グローバル系科目
1年次	前期	英語コミュニケーション ^S	—
		中級英語 A ^{L,S}	—
	後期	中級英語 B ^{L,S}	Oral Communication I ^{L,S}
		総合英語 IA ^{L,R,S,W}	—
2年次	前期	中級英語 C ^{R,W}	Oral Communication II ^{L,S}
		総合英語 IB ^{L,R,S,W}	—
	後期	英語演習 ^{L,R}	Reading & Discussion I ^{L,R,S}
3年次	前期	—	Reading & Discussion II ^{L,R,S}
	後期	—	English Writing ^W
		—	English Presentation ^{L,S}
		—	English Global Studies ^{L,R,S,W}

太字は必修科目。L：リスニング、R：リーディング、S：スピーキング、
W：ライティング

② 海外研修

以上のような外国語の能力、特に Speaking 能力を、海外研修 I, II の授業で実践することを通じて、語学力よりも更に幅広い、価値や文化の異なる人と協働できるコミュニケーション能力を身につける。

「海外研修プログラム I, II」で想定しているのは、海外留学及び海外研修である。

本学の他学部では、概ね 10%、多くても 20% 程度の学生が、学内の仕組みを通して海外へ留学している。本学部では、2つの意味でのグローバル（地球規模の視点からの社会的課題の検討、国際的な舞台での主体的な活躍）な人材の育成のため、オンライン留学を含め、全ての学生が留学を経験することを目標とする。感染症の蔓延が想定されることや世界情勢が不安定なこともあり、学生の不安と受け入れ大学の事情を考慮して必修科目とはしないものの、状況

技術を活用して探求し解決する能力を涵養すると共に、協調性や倫理観、コミュニケーション能力、表現力を身につける。

を見極めながら全員が留学できるよう指導する。

本学は、計 26 か国 60 大学と大学間交流協定を結んでおり、オンラインを含む多数の既設の留学プログラムが存在している。

留学プログラムの内容に関しては、いずれも語学力・コミュニケーション力だけでなく、地球規模の課題と地域社会の課題を結びつけて検討する力、更には社会的課題の解決策を発想するための創造性も同時に育成するものとなっている。例えば、下表に示すフィリピン・GITC (Green

International Technological College) 英語・SDGs 研修グローバルリーダーコース (グループ・マンツーマン) では、マンツーマンレッスン (50 分×30 コマ) によってスピーキングスキルとリスニングスキルを向上させ、グループレッスン (50 分×10 コマ) を通して実践的英語力、コミュニケーションスキルを向上させることを特徴としたプログラムである。これらは、本学部の目指す、価値観や文化が異なる多様な人と協働できるコミュニケーション力や実践力の向上に大きく寄与する。また、ディスカッションのテーマに SDGs を明確に掲げており、開発途上国が抱える社会問題などを学び、現地 NGO 団体職員へのインタビュー行う、SDGs 授業、現地学生との国際交流などが企画されている。

このような体験型プログラムによって、英語を用いて、多様な課題解決に協働して取り組む経験が得られる。詳細については、「6. 海外語学研修の具体的計画」において述べる。

本学における研修・留学先の例

※本意見対応文中参照

③ コラボラティブ・ワーク

本学部では、国内におけるフィールドワークをとおして、現実の社会的課題に対して、課題のフィールドで、学生が専門的知識をもつ者や社会のステークホルダーと解決に向けて協働する「コラボラティブ・ワーク」の経験を積むことを重視している。これを受け、グローバル系科目におけるもう一つの柱として、学生は地域社会との関わりを通じて、社会的課題に主体的に関わり、課題を発見、探求し、解決を構想するプロセスを体験的に学び、多様な人々と協働する際に必要なコミュニケーション能力を修得する。

「コラボラティブ・アプローチ基礎演習」(1年後期、必修、2単位)は、学生が共創に向けて「他者と協力して、主体的に考察を行う」基礎的な姿勢と技能を身につけることを重視する。「コラボラティブ・ワークス I~IV」(2~3年、選択、各1単位)は、学生が実際に協働し、知をつなぐ方法を実践的に身につけるための授業科目であり、IからIVの各科目に、フィールドへの参与、課題発見、探究、解決という段階が発展的に充てられている。

具体的な連携先としては、地域創造学環及び農学部が連携してきた学外のステークホルダーを想定している。本学部の前身である地域創造学環は、静岡県の自治体、企業、NPO、地域住民などのステークホルダーと連携し、静岡県内において「フィールドワーク I・IIAB・IIIAB」(各1単位)の授業を展開してきた実績がある。また、農学部においても、学生が農業及び農村についてフィールドワークをとおして学ぶ「農

<p><u>業環境演習（実践農学演習）Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ</u> <u>（Ⅰは2単位、Ⅱ・Ⅲは3単位）が開講さ</u> <u>れており、多数の連携先を有している。本</u> <u>学部の「コラボラティブ・ワークスⅠ～</u> <u>Ⅳ」の実施にあたっては、これまで地域創</u> <u>造学環及び農学部が連携してきたステーク</u> <u>ホルダーの一部との関係を引き続き継続す</u> <u>るほか、本学部を中心に他学部の教員の協</u> <u>力・連携により、新たに連携先を開拓する</u> <u>予定である。</u></p> <p><u>また、「ファシリテーション概論」（1年後</u> <u>期、選択、1単位）、「アートラボ」（2年後</u> <u>期、選択、1単位）のように、協働のため</u> <u>のツールやスキルを学ぶ科目も設置してい</u> <u>る。</u></p> <p><u>Ⅲ）データサイエンス系科目</u> <u>社会的課題に取り組む上では、その課題や</u> <u>背景にある要因を、恣意的にではなく、客</u> <u>観的に分析する必要がある。そのために</u> <u>は、数理・データサイエンス・AIのリテ</u> <u>ラシーを学び、ユーザとして使用できるよ</u> <u>うになることが必要である。そこで本学部</u> <u>では、インタビューなどの質的調査や、ア</u> <u>ンケートなどの量的調査などの方法論と並</u> <u>び、エビデンスを示す上で必要不可欠であ</u> <u>る数理・データサイエンス・AI関係の科</u> <u>目を設置している。</u></p> <p><u>数理・データサイエンス・AI関係の科目</u> <u>については、数理・データサイエンス・AI</u> <u>教育プログラム認定制度のモデルカリキュ</u> <u>ラムに準じた授業内容となっている。教養</u> <u>教育科目として実施する2科目（数理・デ</u> <u>ータサイエンス入門、情報処理・データサ</u> <u>イエンス演習）は、「リテラシーレベル」</u> <u>のモデルカリキュラムに準じた授業内容に</u></p>	
--	--

レベルを設定した。「数理・データサイエンス入門」の授業は、「数理・データサイエンス・AI」の導入レベルの内容について網羅的に知識を学び、専門教育での更なる学修への興味・関心を高める内容とした。

「情報処理・データサイエンス演習」は、大学の専門教育で求められる高度な情報機器を活用した情報処理のスキルとともに、数理・データサイエンス・AI教育の観点からエビデンスベースなレポートニングスキル、データ処理とデータの可視化について学ぶ授業内容とした。具体的には、現実的なテーマの仮想データを用いたデータ処理、解析等の演習を行い、「データを読む、説明する、扱う」といったスキルを育てる。以上の教養教育での2科目の学修を通して専門科目での学修の基礎を身につける。この2科目に加え、専門教育での数理・データサイエンスの学修で求められる大学レベルでの数学的知識を学ぶために、「基礎数学」を開講し、1年後期以降の学修に取り組めるよう配慮している。

本学部のデータサイエンス系科目で設置した専門科目7科目（「データサイエンス基礎」、「データサイエンス演習」、「データエンジニアリング基礎」、「AI基礎」、「プログラミング演習I」、「AI演習」、「プログラミング演習II」）については、「応用基礎レベル」のモデルカリキュラムに準拠した授業内容のレベルに設定している。また、データサイエンス系科目については、データサイエンスの技術者養成ではなく、社会的課題の解決、共創の過程でデータサイエンスの知識、スキルを理解し、手法等を活用、選択できるようになることを目指す。そのため、広くデータサイエンス関連の分

野を学ぶ必要があり、分野ごとに、モデルカリキュラムを参考に学修内容の厳選を行い大学で求められる専門的なレベルを維持しながら、1単位科目、2単位科目を設定している。例えば、「プログラミング演習 I」では、データサイエンスのデータ処理で採用されるプログラミング言語である Python を採用し、クラウド上のプログラミング学修環境を用いて、1単位の時間数でも効率的に大学での専門的なデータサイエンスのレベルでのプログラミングスキルを学べるようにしている。

なお、「AI 演習」や「プログラミング演習 II」などの演習系科目では、より実践的にデータサイエンスの活用法を学び、主体的・協働的にデータサイエンスの手法を活用できる力を育成するため、設定された課題をチームで取り組み、解決方法を考える問題（課題）解決型学修（Problem Based Learning: PBL）を含むチーム解決型の授業手法を取り入れている。

IV) 共創科学系科目

共創科学系科目では、共創の基礎となる考え方、概念を学ぶ。「バイオエコノミー概論」「国際地域社会とダイバーシティ」「総合人間科学概論」では、本学部が共創を通じて解決を目指す3つの未来課題群について、課題内容の概要だけでなく、現状における課題解決に向けた取組と将来の展望を示す。これにより学生は、共創という手法や高度な専門的知識を学ぶモチベーションを持つことができる。また、「コミュニティ基礎論」では、共通の関心に基づいて人々が力を合わせて目の前の課題を解決し、場合によっては更に活動を展開させて

行く集まりであるコミュニティの多様な在り方を学ぶことにより、共創による課題解決の実際を示す。また、「アートシンキング・デザインシンキング」では、共創を通じて社会的課題の解決策を生み出す際に求められる創造性の土台となるデザイン思考やアート思考に関する講義を行う。

V) 人文・社会科学系科目／自然科学系科目

人文・社会科学系科目／自然科学系科目では、人文・社会科学から自然科学に至る複眼的視点から社会的課題を検討する上で、必要な知識を獲得する。

VI) コース専門科目

コース専門科目（26単位）のうち、4科目8単位は、各コースの名称を付した「研究」（2科目4単位、3年次配当）と「演習」（2科目4単位、4年次配当）であり、いわゆるゼミに該当する。例えば、国際地域共生学コースの場合は、「国際地域共生学研究Ⅰ・Ⅱ」、「国際地域共生学演習Ⅰ・Ⅱ」として、3年前期から4年後期まで各学期に配当している。学生は、これら科目の履修と学びのアドバイザー（5.（1）II）参照）の指導により研究室に所属して研究を推進する。また、所属研究室の教員を主指導教員とし、加えて専門分野の異なる副指導教員（自コース、他コースは問わない）の指導の下、複眼的な研究アプローチによって課題に迫ることができる指導体制がとれる授業内容とする。コース専門科目（26単位）のうち残る18単位は、各コースにおいて取り組む課題に応じて専門的な知識・能力を深めるための授業科目であ

る。学生は、自コースのコース専門科目を重点的に履修するが、異なる学問領域の知見を取り入れることが研究を進める上で有効だと考える場合には、他コースのコース専門科目を履修することができる。

VII) 上記 I～VIの科目群から必要選択単位数を超えて履修する科目

知識の幅を広げ、また学びを深めるため、卒業要件として定められている各科目群における必要選択単位以外に、上記 I～VIの科目群に配置している科目から修得する科目 (8 単位分)。

VIII) 卒業研究

共創型人材育成の集大成である卒業研究は、学生自らが設定した課題を解決すべく、専門分野の異なる主指導教員と副指導教員の専任教員 (自コース、他コースは問わない) による指導の下、課題解決に向けた研究を実施する。指導教員の選定は、学生が取り上げる課題に対して解決するのに適当と思われる主指導教員と、専門分野が異なる副指導教員を、学びのアドバイザーとの相談の上、決定する。なお本過程で、各教員が主又は副指導する学生数をそれぞれ 4～5 名になるように、学びのアドバイザーが学生の指向と各教員の専門分野の調整を行う。複数指導教員の指導の下、専門分野の異なる演習・実習、実験手法を学び、成果を的確に取りまとめ、卒業研究を完成させる。本卒業研究では、課題構想力、能動的学修能力、協働実践力、コミュニケーション力、プレゼンテーション力を育み、その成果が、学会発表・学術論文発表以外に、地方公共団体、企業、NPO 等へ

の政策提言、あるいは実演など、社会へ還元されることを念頭に置き、学生は卒業研究を実施する。

(30 ページ)
下記の表において、科目区分とそれに関連するディプロマ・ポリシーを示す。なお、前述した I～VI の科目群から必要選択単位数を超えて履修する科目（前述・VII）については、履修する科目によってディプロマ・ポリシーとの関連が変わってくるので、この表には記載しない。

【グローバル共創科学部における科目区分とそれに関連するディプロマ・ポリシー】

科目区分	関連するディプロマ・ポリシー
教養科目	DP1, DP3
グローバル系科目	DP3, DP4, DP6
データサイエンス系科目	DP5
共創科学系科目	DP1, DP3, DP4
人文・社会科学系科目及び自然科学系科目	DP1, DP3, DP4
コース専門科目	DP2, DP6
卒業研究	DP1～DP6

(削除)

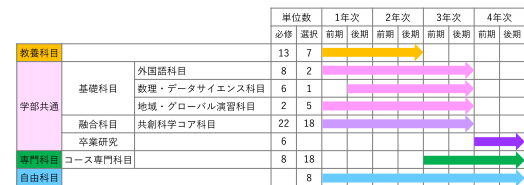
(19 ページ)

【グローバル共創科学部における科目区分とそれに関連するディプロマ・ポリシー】

科目区分	関連するディプロマ・ポリシー
教養科目	DP1, DP3, DP6
外国語科目	DP3, DP7
数理・データサイエンス科目	DP4
地域・グローバル演習科目	DP4, DP6, DP7
共創科学コア科目	DP1, DP2, DP5, DP7
専門科目	DP2, DP5

上記の表において、ディプロマ・ポリシーと関連する科目区分における代表的授業科目との対応関係表に示す。自由科目については、履修する科目によってディプロマ・ポリシーとの関連が変わってくるので、ここには記載しないが、主に DP1～DP4 に関連する講義の履修を期待する。卒業研究は、すべてのディプロマ・ポリシーと関連するため表には記載しない。これらの学年進行における履修イメージを図として示す。

【学年進行に伴う科目履修イメージ】



(31 ページ)

(20 ページ)

※表の前に表の説明を追記するとともに、科目区分の変更に伴い以下の表に修正

また、下記の表において、ディプロマ・ポリシーとそれに関連する科目区分及び代表的授業科目について示す。

【ディプロマ・ポリシーとそれに関連する科目区分及び代表的授業科目】

ディプロマ・ポリシー	科目区分	代表的授業科目	科目の説明
(1)人文・社会科学から自然科学に至る広汎な基礎的知識を身につけている。	教養科目	歴史と文化	異なる地域、異なる時代の歴史について学ぶことにより、現在の日本や日本の歴史について比較・考察するための知識や理解力を養う。
		科学と技術	科学的発見の成果を生かして開発された、人間との関わりにおいて有用な様々な技術を幅広い視点から捉えることができる能力を育成する。そのために、身の回りにある科学技術とその展望や課題について学修する。
	共創科学系科目	アートシンキング・デザインシンキング	多様化する現代の課題に対してアートやデザインという視点はどうのように向き合っているのか。具体的な事例に触れながら、複雑化する社会的課題の解決にむけた柔軟な発想法を身につける。
		バイオエコノミー概論	生命圏に根差してその恩恵を持続可能に活用し、同時にリスクをマネジメントする社会経済を「バイオエコノミー」として捉え、現在どのような具体的な課題が発生しているのか、そこにいかにして社会や研究開発の現場が挑戦しているのかを理解して、自らの学修の展望を見出すことができるようになる。
		国際地域社会とダイバーシティ	現代社会の中でダイバーシティ（多様性）を尊重するとはどういうこと

			か。 <u>現実社会の人権課題を、多様なマイノリティ・フィールド群の具体的な事例を通して学び、共生志向の素養を身につける。</u>
	<u>人文・社会科学系科目</u>	人間の尊厳と人権	人間そのものを学びの対象とし、国際社会や地域社会における人間相互及び人間と社会との関係に目を向け、あるいは人間と生命圏環境との共生を図ろうとする学びの根本を司る、人間にどのようなまなざしを向けてきたか・向けるべきかを哲学・倫理学及び法的な観点から学んでいく。
		現代社会の認知科学	新しい情報技術の登場で変わりつつある現代社会での人間の知的活動の様相の変化に対応するための新たな人間理解のための視点の獲得を目指し、認知科学で積み上げられてきた人間理解に関する基本的な知見を学び、新しい人間理解を展望できるようになる。
	<u>自然科学系科目</u>	暮らしの科学	自分の身の回りの現象を科学的な視点で見直し、その中にある本質を理解する。自然科学の知識が科学技術へどのように応用されているかについて実感し、自然科学を他分野と有機的に関連づけるための基礎力を養う。
(2) 専門的知識を社会のために活用することができる。	<u>コース専門科目</u>	国際地域共生学研究 I、II	国際地域共生学コースの研究室に所属し、国際地域課題とその解決や包摂的な社会の構築に関わる専門性の高い知識や研究手法を修得する。専門性を深めながら、そこを軸足にマクロ・ミクロ双方の視点から複合的に国際地域課題を検討して、多様な

			他者と協働して課題解決を構想する力を身につける。
		生命圏循環共生学研究 I、II	生命圏循環共生コースの複数の研究室に順次所属し、専門性の高い知識や研究手法を実体験しながら学修することで、生命圏に根差したサステナビリティ社会を構築する上での課題やそれに対する解決策を、広い視野とより深い専門的知識をもって見出して実行する力を身につける。
		総合人間科学研究 I、II	総合人間科学コースの研究室に所属し、人間理解に関わる専門分野の知識・スキルをセミナー形式で学ぶ。これを通じて、学生個人が興味・関心を抱く観点から人間のウェルビーイングについて考察する力や、コミュニケーション能力等、社会の課題解決のために必要な基本的な能力を身につける。
<u>(3) 人間理解に基づき、価値観や文化が異なる多様な人々と協働できるコミュニケーション力と実践力を身につけている。</u>	教養科目	英語演習	英語の4技能（リーディング、リスニング、スピーキング、ライティング）のうち、特にリーディングとリスニングに重点を置き、国際的なコミュニケーション能力の基盤となる能力を身につける。
		英語コミュニケーション	日常生活及び自身の経験や考えについて話すことができる能力を伸ばし、基本的なコミュニケーション（あいさつ・要求・助言など）をとるためのスピーキング能力やコミュニケーション・ストラテジーを身につける。
		世界のことばと文化	中国語・現代韓国語・フランス語・ドイツ語・スペイン語の言語・文化・社会などについて学び、国際的にコミュニケーションをとる相手の背景について理解する。

<u>グローバル系科目</u>	Oral Communication I, II	英語のリスニングとスピーキングの能力を伸ばし、日常会話を達成感をもって行うことができるという感覚を得る。さらに、英語での日常会話を行う能力を的確に発揮できるようになる。
	Reading & Discussion I, II	日常的な話題について意見を英語で述べる能力を身につける。比較的単純な話題について、即興的に自分から話を始めたり、他人の話に応じたりすることができるようになる。的確な質問を投げかけ、的確な答えで応じ、他人の意見に賛成、あるいは反対の意見を述べ、なぜ自分がそのように考えるのか理由も述べるができるようになる。
	English Presentation	世界を相手に交渉ができ、かつ信頼を得られるレベルの英語でのプレゼンテーションができるようになる。
	English Global Studies	英語使用の授業（英語による講義形式の授業も含む）に参加するための能力を獲得する。異文化理解と誤解について理解できるようになり、世界市民としての責任を果たすことのできる人物になる。特定の国の問題だけでなく、地球規模の問題に関心を持つようになる。
	<u>海外研修プログラム I, II</u>	<u>国際社会及び地域社会の課題解決のため、グローバルな視点から対象を捉えるツールとしての言語によるコミュニケーション力の向上とともに、異文化理解、国際感覚を身につける。現地で開催されるアクティビティや現地の学生や地元の人達との交流を通じて、「人間とはどうあるべきか」に立ち戻り、人間そのものに対す</u>

			<p>る理解を深めるスキルを得る。この研修プログラムで得たアカデミック語学スキル、異文化理解、国際感覚を専門科目で応用させる。</p>
		<p>ファシリテーション概論</p>	<p>ビジネスや地域活動における討議や対話を円滑に進める技術や考え方を理解することにより、参加型の場づくりを実践し、利害関係者の支え合いによる課題解決への仕組みづくりを支援・促進できる力を身につける。</p>
		<p>コラボラティブ・ワークス I~IV</p>	<p>国際地域社会との関わりを通じて、社会的課題への①参与、②発見、③探求、④解決のプロセスを、多様な専門性やステークホルダーとの共創を通じて学び、持続可能な未来づくりの担い手（課題解決人材）となる。</p>
	<p>共創科学系科目</p>	<p>総合人間科学概論</p>	<p>人間理解にアプローチしてきた心理学、身体科学・スポーツ科学、倫理学、法学、情報学の学問分野の基本的な考え方見方について学ぶ。それぞれの学問分野の基本的な用語、考え方、方法論について学ぶ。</p>
		<p>コミュニティ基礎論</p>	<p>社会的課題が多様化・複雑化する現在、課題解決の手段としてコミュニティが注目されている。本講義ではコミュニティの基礎的知識に加え、事例を通してコミュニティの形成により人や知を繋げ、課題を解決し、新たな社会を作るという視点を修得する。</p>
		<p>国際地域社会とダイバーシティ</p>	<p>現代社会の中でダイバーシティ（多様性）を尊重するとはどういうことか。現実社会の人権課題を、多様なマイノリティ・フィールド群の具体的な事例を通して学び、共生志向の素養を身につける。</p>

	人文・社会科学系科目	アート・デザイン コミュニケーション	アートやデザインという視点からの発想は、具体的にどのようにアウトプットされていくのか。多様化する今日の課題に創造的・共創的にアプローチするための具体的な方法論を身につける。
	自然科学系科目	防災・減災論	自然災害が発生するメカニズムと被害の特徴、及びハード・ソフトの防災・減災対策に関する課題を広く社会的課題と関連づけて多角的に理解・考察する手法を学ぶ。災害に強い社会の実現に向けて多様なステークホルダーの連携・協働を構想できるようになることを目指す。
(4) 地球規模の課題と地域社会の課題を結びつけて検討することができる。	グローバル系科目	ファシリテーション概論	ビジネスや地域活動における討議や対話を円滑に進める技術や考え方を理解することにより、参加型の場づくりを実践し、利害関係者の支え合いによる課題解決への仕組みづくりを支援・促進できる力を身につける。
		コラボラティブ・ワークス I~IV	国際地域社会との関わりを通じて、社会的課題への①参与、②発見、③探求、④解決のプロセスを、多様な専門性やステークホルダーとの共創を通じて学び、持続可能な未来づくりの担い手（課題解決人材）となる。
	共創科学系科目	コミュニティ基礎論	社会的課題が多様化・複雑化する現在、課題解決の手段としてコミュニティが注目されている。本講義ではコミュニティの基礎的知識に加え、事例を通してコミュニティの形成により人や知を繋げ、課題を解決し、新たな社会を作るという視点を修得する。
		バイオエコノミー概論	生命圏に根差してその恩恵を持続可能に活用し、同時にリスクをマネジ

			<p>メントする社会経済を「バイオエコノミー」として捉え、現在どのような具体的な課題が発生しているのか、そこにかにいて社会や研究開発の現場が挑戦しているのかを理解して、自らの学修の展望を見出すことができるようになる。</p>
		<p><u>国際地域社会とダイバーシティ</u></p>	<p>現代社会の中でダイバーシティ（多様性）を尊重するとはどういうことか。現実社会の人権課題を、多様なマイノリティ・フィールド群の具体的な事例を通して学び、共生志向の素養を身につける。</p>
	<p><u>人文・社会科学系科目</u></p>	<p>応用倫理学概論</p>	<p>20世紀以降、社会的課題に対応するべく生み出された応用倫理学の様々な領域（生命倫理学、環境倫理学、情報倫理学、ビジネス倫理学、スポーツ倫理学など）を、その背景にある理論的知識の基礎と課題を含めて学ぶことにより、あらたな解決法を発想する手がかりを得る。</p>
	<p><u>自然科学系科目</u></p>	<p>スポーツ・健康科学</p>	<p>スポーツ・健康を題材とした科学的研究成果を競技志向型、健康志向型のスポーツ実践に分類でき、現代の社会におけるスポーツ/運動が心身の健康のみならず地域づくり、ものづくり、政治、経済に及ぶ種々の問題解決と発展の媒介となっていることに気づき、様々な分野との結びつきを学ぶことから、共創社会における課題解決策への創造性を育む。</p>
		<p>防災・減災論</p>	<p>自然災害が発生するメカニズムと被害の特徴、及びハード・ソフトの防災・減災対策に関する課題を広く社会的課題と関連づけて多角的に理解・考察する手法を学ぶ。災害に強い</p>

			<p>社会の実現に向けて多様なステークホルダーの連携・協働を構想できるようになることを目指す。</p>
		カーボンニュートラル科学	<p>脱炭素経済・循環可能社会の実現に向けて、現存する課題を整理し、太陽光エネルギー、熱エネルギー等の利用、植物・微生物による炭素の流れ、各国の政策や経済効果について多面的な知識を獲得する。</p>
<p><u>(5) エビデンスに基づき客観的に社会的課題を分析することができる。</u></p>	<p><u>データサイエンス</u> <u>系科目</u></p>	データサイエンス基礎、データサイエンス演習	<p>「データサイエンス基礎」ではデータサイエンスの活用事例を通じてその重要性を理解し、データ処理の基盤となる技術について学修する。さらに、「データサイエンス演習」ではコンピュータを用いて演習形式で解析手法を習得する。</p>
		データエンジニアリング基礎	<p>「データサイエンス基礎」で学んだ「データ」は、そのままの状態では活用することができない。本講義ではデータの種類やデータベース、ネットワーク、セキュリティー、システムの導入、システムの運用、企業活動におけるITの活用、法務と財務など、データを安全に活用するための方法について学修する。</p>
		AI基礎、AI演習	<p>「AI基礎」では、AIの歴史から始まり、AIを実現するための技術的基盤について学修する。また、「AI演習」では、実際にAIの技術（ディープラーニング）を用いて、画像認識や文字認識などの演習を通じてAIの使い方を学修する。</p>
		共創科学調査法	<p>現代社会における社会的課題は多様化し、複雑化している。本講義では、そうした社会の動向を把握し、そこに潜む課題を導き出し、分析するた</p>

			<p>めの手法としての社会調査、とりわけ質的調査と量的調査について学修し、その実践的なスキルを身につける。</p>
		共創科学実験法 (自然科学)	<p>人間社会と自然環境に関連する様々な課題に対処していく上で必要な、自然科学系、とりわけ生物学・環境科学に関連する実験法の原理を理解し、適切な手法を選択して分析・解析する力を身につける。</p>
		共創科学実験法 (人間科学)	<p>人間社会と自然環境に関連する様々な課題に対処していくために社会科学系の実験は重要な役割を担っている。本授業では、心理学、身体科学のデータを題材に、社会科学系で用いられる実験についての原理について学び、実際の社会的課題に取り組む際に、適切な手法を選択して、分析、解析できる力を身につける。</p>
<p>(6) <u>社会的課題の解決策を 発想するための 創造性を身につけてい る。</u></p>	<p><u>グローバル系科目</u></p>	ファシリテーション概論	<p>ビジネスや地域活動における討議や対話を円滑に進める技術や考え方を理解することにより、参加型の場づくりを実践し、利害関係者の支え合いによる課題解決への仕組みづくりを支援・促進できる力を身につける。</p>
		コラボラティブ・ワークス I～IV	<p>国際地域社会との関わりを通じて、社会的課題への①参与、②発見、③探求、④解決のプロセスを、多様な専門性やステークホルダーとの共創を通じて学び、持続可能な未来づくりの担い手（課題解決人材）となる。</p>
	<p><u>コース専門科目</u></p>	グローバル協力学論	<p>グローバル課題の解決に関わる理論的・実務的知識を身につける。国家や国際機関による国際協力の枠組を超える手法や多様な主体の関与が重要性を増している実態を踏まえ、理論</p>

			や実務の在り方を批判的に検討してより良い課題解決を提起する力を養う。
		環境共生社会論	環境問題の発生と拡大及び解決について、事例に関する環境社会学的な分析に関するレクチャーから、人間と自然の関係性の再生、自然をめぐる社会的関係の再生の2つの観点から、環境と共生する社会を実現するために試みられているアイデアを理解して、自らの発想に活かすことができるようになる。
		デザイン心理学	情報化社会の中で情報技術を活用した新しいモノ・サービスの使いやすさの向上は社会的な大きな課題である。本授業では、心理学の認知工学の基礎的な知識、ユニバーサルデザイン、人間中心設計、共創デザインの手法を学び、人間中心の新しいモノ・サービスが創造できるようになる力を養う。
(41 ページ)	5. 教育方法、履修指導方法及び卒業要件 (1) 教育方法・履修指導 I) 教育方法 本学部では、1年次前期に共創の概念を学んだ上で、1・2年次においてデータサイエンス、グローバル、人文・社会科学、自然科学の要素を身につけ、3年次以降は、1・2年次の要素を土台に専門教育を行うという指針でカリキュラムが構成されている。 教育課程の開始時である1年次前期において、学生は1年次前期に共創科学系科目を履修する。これらの科目は、「共創とは何か」を伝えるものであり、本学部が着目	(31 ページ)	5. 教育方法、履修指導方法及び卒業要件 (1) 教育方法・履修指導 本学部では、既述のように未来社会の課題群に対してはまず、①「現代に生きる人々が、創造的かつ友好的に暮らすために」、②「新たな価値を創生し、持続的な循環型社会を実現するために」、③「人間がどうあるべきかを問い続け、真の豊かさを主体的に実現するために」という課題に挑むため、「国際地域創造学」、「生命圏循環共生学」、「総合人間科学」の3つの領域を複合的・横断的に学修することで、国際感覚や俯瞰力を高め、この多様で複雑な課題を解決する力を養う。なお、コース選択

する未来の課題群を提示する科目と、共創を通じて専門的知識を社会へ還元することをイメージできる科目から成り立っている。これらの科目を通じて、学生は、カリキュラム初期に「なぜ共創という手法を身につけ、高度な専門的知識を学ばないといけないのか？」ということに対する自らの答えを明確化させ、その後も高いモチベーションの下、学修に取り組むことができる。

1年次後期から2年次にかけては、具体的に共創を实践する上で必要とされる知識・能力をそれぞれバランスよく獲得できるように、科目を配置している。(ただし「基礎数学」は、1年次後期以降のデータサイエンス教育がスムーズに始められるように1年次前期に配置している。) 具体的には、人文・社会科学系科目、自然科学系科目、グローバル系科目、データサイエンス系科目を履修することにより、人文・社会科学から自然科学に至る幅広い知識、外国語のコミュニケーションスキルを含む、多様な人と協働する能力、地球規模の課題と地域社会の課題を結びつける能力、客観的に社会的課題を分析する能力などを育成することができる。

3年次以降は、各コースに分属した上で専門教育を行う。共創科学系科目によって本学部の目指す共創型人材の下地を形成し、それに続く、グローバル系科目、データサイエンス系科目、人文・社会科学系科目、自然科学系科目を履修することで、コース専門科目に連続的に接続可能な基礎学力を獲得する。つまり、グローバル系科目(16単位)、データサイエンス系科目(12単位)、人文・社会科学系科目と自然科学

は3年次以降であり、すべての学生が3つの領域を複合的・横断的に学修する。

特に2年次まではリテラシーの獲得と、異なる専門領域の個別知識を越えた理解と判断の礎となる知の共通基盤の習得のための文理融合型の講義や演習を用いたりリベラルアーツ教育を行う。ここまでは基本的に共創科学の基盤として、入学した全学生が同様の科目を履修することができる。3年次からは、卒業及び大学院進学に繋がる専門性を深めるために3つのコースの分属と専門科目の履修を行う。

文理融合型のリベラルアーツ教育においては、従来の「教養教育」や「専門教育」のように、単なる多分野の羅列的な履修や、基礎からの学問体系の知識の積み上げではなく、融合的な分野についての課題の提示と成果の社会還元、基礎、応用の順のくさび型教育を行う。すなわち、先に学びの成果が社会とどのように繋がっているのかという成果の社会還元を提示し、学生には早期から「何をするために学ぶのか」という観点から以降の学びを捉えてもらう。これにより、複雑な課題群に向き合い、それゆえにこそ異なる専門領域の個別知識を越えた理解と判断の礎と、高度な専門的知識を吸収するモチベーションをもつことが可能になる。その後は、グローバルとローカルの両方において、人文・社会科学や自然科学にまたがる観点をもつために、学術的な基礎を含んだ共創科学コア科目を履修する。さらに、各コースで用意された専門科目を学び、学びで得た知見の応用についての素養を得る。

【第1年次：全学共通の教養科目とリテラシーの獲得、学びのアウトカム】

系科目（計 26 単位）は、共創という手法を育成する上で必要な科目であると同時に、各コースにおける専門教育の基礎という側面を持つ。1・2 年次の基礎の上に、3 年次からの専門性の高いコース専門科目（計 26 単位）が上積みされることとなるのである。

研究室における実践的な演習として、3 年次より 4 年次にかけて、各コースの所属に応じて、「国際地域共生学研究Ⅰ・Ⅱ」及び「国際地域共生学演習Ⅰ・Ⅱ」、「生命圏循環共生学研究Ⅰ・Ⅱ」及び「生命圏循環共生学演習Ⅰ・Ⅱ」、「総合人間科学研究Ⅰ・Ⅱ」及び「総合人間科学演習Ⅰ・Ⅱ」を履修し、より深い探究心の醸成と、大学院進学などのより専門的な課程への進学の可能性についても途を拓く。また、本学部の教育の集大成として論文による必修の「卒業研究」を課して、学士（学術）を得る。

なお、本学部では、広範囲の学問領域を俯瞰的に学修するという観点から、できる限り学問分野の本質的な内容を抽出した講義を多数開講しており、専門科目における選択科目の中には、内容が区分可能な講義は 8 回の講義科目（半期の講義：1 単位）としているものがある。これは、学生が自らの興味や必要性に合わせた多様な講義を多数履修することを可能とするための措置であり、それぞれの科目における講義内容は 1 単位で完結するように設定されており、独立した専門性は保たれている。

以上を視覚化した 3 コースごとのカリキュラムマップを別添資料 5 として示す。なお、カリキュラムマップについては、直近

静岡大学における語学を含めた全学共通の教養科目を受講するが、それだけではなく、本学部独自の英語のオーラルコミュニケーションに関する科目、データサイエンスの基礎科目、そして、その後に履修することとなる海外及び国内の研修・フィールド演習科目の基礎の演習が必修科目として行われる。

また、本学部の学びにおいては課題提起とその成果の社会還元への提示を行うために共創科学コア科目の必修として、前期に、未来の人類社会における課題群と学術的な成果の社会還元について提示する「総合人間科学概論」、「バイオエコノミー概論」、「国際地域社会とダイバーシティ」、「コミュニティ基礎論」の各科目を履修する。後期には、人間及び人間の営為についての科学的な理解を深める科目である「暮らしの科学」、「スポーツ・健康科学」、「現代社会の認知科学」、人間の在り方の倫理的及び法的な理解についての科目である「応用倫理学概論」、「人間の尊厳と人権」、アートやデザインの視点から社会と関わるための科目である「アートシンキング・デザインシンキング」、そして静岡をはじめとする日本国内の地域課題の理解についての科目である「国際地域創造概論Ⅰ（静岡、日本）」も必修として履修する。

【第 2 年次：リテラシーの確実な習得とリベラルアーツの基盤づくり】

本学部独自の英語教育では、「英語を学ぶ」のではなく「英語で学ぶ」能力の基礎をつくるための専門分野に関連したリーディングやディスカッションを中心とした教育を行う。また、データサイエンス科目に

で大学設置が認可された他大学のカリキュラムマップを参考に作成した。学校教育法施行規則第165条の2第2項を踏まえ、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーと各科目群の対応関係が体系的に分かるよう配列することで、3ポリシーの一貫性を示すとともに、科目群同士の体系（履修の順序や関連するディプロマ・ポリシーへの導き方等）も分かるように図示している。

以下では、コースごとに、教育において重視している知識・能力を活かすことが期待される職業を想定した履修モデルを示す（詳細なものについては別添資料6を参照）。本学部の前身である地域創造学環では、卒業生の約3割が公務員・教員に就職していることから、以下の履修モデルにおいても地方公共団体職員を就職先として示している。また、6割が就職している民間企業の中には、海外に拠点を持つ金融機関・物流会社や、デジタル技術を用いたサービスや製品の開発に取り組む企業も含まれており、いずれのモデルもこれまでの地域創造学環の実績を踏まえたものである。

国際地域共生学コース

履修モデル1：海外展開する企業の企画・営業職

このモデルで挙げられている職業では、国際的な政治経済の動向に位置付けて国内外の地域社会の課題を分析し、新たな事業を構想して、異なる文化背景を持つ海外企業・政府などと協働して事業を実施することが期待される。

についても、現代社会において必須なAIやプログラミング、データエンジニアリングの基礎的な演習を必修として履修する。この演習は、3年次のより高度な演習群と繋がっており、ものづくりを通じたPBL型の実習を実施し、AIを通じた情報処理などでもできる能力だけでなく、簡単なプログラミング構築技術をもつことで、ドローンや実験工作機械の制御、GISやシミュレーションの能力を獲得する。

また、選択必修として海外研修や国内のボランティアやフィールドワークの演習も開始される。海外研修では、海外の提携校に夏休み期間の渡航を行い、現地の大学生と共に講義を受けたり、ディスカッションやプレゼンテーションを行ったりする。これは英語教育での科目の実践としての意味合いももつ。国内のボランティアやフィールドワークの演習では、連携先に学生を派遣して、ボランティアや地域活動などを行うことで、講義で得た知識の実地を通じた定着を目指す。一方、もう一つの選択必修として、ミーティングにおけるファシリテーションや、人文・社会科学的な調査手法、自然科学的な調査・実験手法、デザインシンキング、アートシンキングに関する演習も2年次から3年次にかけて履修する。

共創科学コア科目については、人間の心身に対する理解に関する科目（「臨床心理学概論」、「人体の構造と機能」など）、多文化共生や地域社会のマネジメントに関する科目（「多文化共生論」、「都市計画論」、「スポーツ文化論」、「地域資源活用論」など）、カーボンニュートラルや生物多様性保全、防災減災に関する科目（「カーボン

<p><u>履修モデル2：共生社会の拠点形成を担う福祉・教育団体の総合職</u></p> <p><u>このモデルで挙げられている職業では、地域社会において障害者、高齢者、外国人など多様な立場の人々が排除される原因を分析し、共生社会実現に貢献する事業を計画・実施することが期待される。</u></p>	<p><u>ニュートラル科学」、「生物多様性保全論」、「防災・減災論」など)、海外の各地域における社会的課題や相互関係性に関する科目（「国際地域創造概論 II (アジア・オセアニア)・「国際地域創造概論 III (欧米)」) を選択科目として履修する。これらは3年次のコース分属に向けた基盤的な知識の習得を目指す。</u></p>
<p><u>履修モデル3：地域の魅力創出・発信に専門性を発揮する公務員</u></p> <p><u>このモデルで挙げられている職業では、産業、自然、食、文化など地域社会にあるさまざまな資源を発見、評価して活用すること、また多様なステークホルダーとコミュニケーション力や発信力を発揮することが期待される。</u></p>	<p><u>【第3年次及び4年次：コースへの分属とより専門性の高い学びへの発展】</u></p> <p><u>後述するような履修モデルの例のように「国際地域創造学」、「生命圏循環共生学」、「総合人間科学」の3つのコースに分かれ、より専門的な知識の習得を目指す。この段階で特筆すべきは、専門分野と関連したアカデミック・ライティングやプレゼンテーション、あるいはプログラミングやAI活用のより高度な演習である。また、このようなりテラシーの充実の上で、希望する学生は3年次から4年次にかけての期間で数か月以上の海外留学を単位化することができる。海外留学をしやすいするために、特に専門科目についてはオンデマンド教材の履修を可能にし、留学中も単位取得が可能なようにする。</u></p>
<p><u>生命圏循環共生学コース</u></p>	
<p><u>履修モデル1：企業・NPO等もしくは地方公共団体における環境政策系職員</u></p> <p><u>このモデルで挙げられている職業では、グリーンエコノミーの観点から具体的な経済・環境政策や事業計画を立案することが期待される。</u></p>	
<p><u>履修モデル2：企業等工場の生産工程における品質管理担当職員</u></p> <p><u>このモデルで挙げられている職業では、各企業の工場における生産工程で製造される製品の品質管理を行うとともに、製造ラインの環境マネジメントに取り組むことが期待される。</u></p>	<p><u>【専門科目履修モデル例1：地域共創メディアエイティブ・プランナー】</u></p> <p><u>「国際地域創造学コース」において、「社会的排除とソーシャルインクルージョン」、「観光振興論」、「住居計画」、「環境と経済」、「環境共生社会論」といった現代社会の動きを理解するための科目をもとに、「視覚芸術論」、「芸術と教育」、「スポーツ経営学」、「コミュニティ心理学」、「防災ま</u></p>
<p><u>履修モデル3：国家及び地方公共団体における防災系専門職</u></p>	

<p><u>このモデルで挙げられている職業では、公共セクターや企業において事前のハード・ソフトの両面から対応策を立案することが期待される。</u></p> <p><u>総合人間科学コース</u></p> <p><u>履修モデル1：プロスポーツ団体（スポーツ協会）の職員、地方自治体のスポーツ振興を所管する部署の職員</u></p> <p><u>このモデルで挙げられている職業では、プロスポーツ団体や地方自治体に所属し、多様なステークホルダーと共に、スポーツ文化の振興に寄与することが期待される。</u></p> <p><u>履修モデル2：地方公共団体におけるデジタル振興や地域振興を所管する部署の職員</u></p> <p><u>このモデルで挙げられている職業では、本学部のデータサイエンス系科目や総合人間科学コースで学ばれる情報技術関連の知識・技能を活かして、国内外におけるデジタルトランスフォーメーション（DX）に寄与することが期待される。</u></p> <p><u>履修モデル3：IT企業で人間中心のサービス・製品の開発に関わる企画職</u></p> <p><u>この履修モデルで挙げられている職業では、高機能・高性能ではなく、サービスや製品を使う人間の視点を配慮することを通じて、人間中心の製品・サービスの創出に寄与することが期待される。</u></p> <p><u>Ⅱ）履修指導</u></p> <p><u>【学びのアドバイザー制度】</u></p> <p><u>本学部では、共創という手法を使いこなし、さらにグローバルな視点を踏まえ、課</u></p>	<p><u>ちづくり」といったコミュニケーションやマネジメントに関する理解を深める。</u></p> <p><u>[専門科目履修モデル例2：環境工学系技術職]</u></p> <p><u>「生命圏循環共生学コース」において、「基礎生物学」や「基礎化学」、「自然災害の現象」、「遺伝と進化」といった自然科学の基礎的な理解をもとに、「環境再生科学」「資源循環化学」「資源再生材料学」といった環境再生技術・資源循環技術に関する理解を深め、「環境政策と法」、「遺伝資源・知的所有権論」などの技術の社会実装に関する理解を深める。</u></p> <p><u>[専門科目履修モデル例3：ヒューマンサービス従事者]</u></p> <p><u>「総合人間科学コース」において、「ウェルビーイングの哲学」「知覚・認知心理学」「社会・集団・家族心理学」「コミュニティ心理学」「安全とリスクの心理学」、「社会的排除とソーシャルインクルージョン」などといった人間や社会の理解をもとに、「運動生理学」「身体機能のメカニズムと計測」といったヘルスプロモーションや、「スポーツ経営学」「コーチング学」といったサービスマネジメントに関する理解を深める。</u></p> <p><u>また、研究室における実践的な演習として、3年次より4年次にかけて必修科目として、各コースの所属に応じて、「国際地域創造学研究Ⅰ・Ⅱ」及び「国際地域創造学演習Ⅰ・Ⅱ」、「生命圏循環共生学研究Ⅰ・Ⅱ」及び「生命圏循環共生学演習Ⅰ・Ⅱ」、「総合人間科学研究Ⅰ・Ⅱ」及び「総合人間科学研究演習Ⅰ・Ⅱ」を履修し、よ</u></p>
--	--

題解決に寄与する「総合知」を生み出すことのできる人材を育成するために、初年次から4年間の学修全般をきめ細やかに支援・指導する「学びのアドバイザー」制度を設定する。学生一人ひとりに専任教員が学びのアドバイザーとなり、以下の項目を中心に、履修計画から学生生活全般に至る内容について、年4回個別面談を行う。なお学びのアドバイザーによる履修指導の状況は、本学部の「教務委員会」で共有する。また、学びのアドバイザー制度が適切に機能しているかどうかは、本学部の「教育質保証委員会」において、組織的な点検・評価・改善等を行う。教育質保証委員会については、11—(3)に記載した。

①履修登録に関する事項

②履修モデル構築に関する事項

③学修の進め方に関する事項

④コース分属に関する事項

⑤研究室配属に関する事項

⑥進路・就職等に関する事項

⑦学籍異動（休学、退学等）に関する事項

⑧成績不振学生への助言や指導

⑨大学生活についての相談等

特に、文理融合型の複雑な学修過程の中で主体的な学修ができるよう1年次には①～③の事項を、2年次では、学生が意欲的に専門教育を受けられるように④に関する事項を、更に3年次は⑤⑥について重点的に支援・指導を行う。なお、資格の取得に関しては、③の一部として、4年間を通じてアドバイスをを行う。

り深い探究心の醸成と、大学院進学などにより専門的な課程への進学の可能性についても途を拓く。また、本学部の教育の集大成として論文、制作物、実演などによる必修の「卒業研究」を課して、学士（学術）を得る。

【コース分属】

コース分属は、以下のルールにより実施する。

① コース所属学生数は30～50名と幅を持たせ、学生の希望を最大限尊重する。

② 分属にあたり、学生は「コース志望理由書」を提出し、この志望理由書を学びのアドバイザーが以下3項目で評価し、分属するコースを決定する。

1) コース選択の具体的理由（課題設定、その課題を設定した理由）が論理的に説明されているかどうか

2) 選択コースにおける履修計画が、
1) の内容に相応しい内容になっているかどうか

3) 選択コース履修後（卒業後）、どのような進路を考えているか、その説明が具体的かつ論理的に説明されているかどうか

なお、各コースの分属学生数にアンバランスが生じないように、1年次から学びのアドバイザーによる指導を綿密に行う。

③ コース希望者数が大幅に超えた結果、本来の希望とは異なるコースに所属することになった場合には、学生が希望していたコースの専任教員が、卒業研究における副指導教員になる等のアフターケアを行う。

④ コース分属後の転コースを認める。
ただし、「希望していたコースとは異なる」という理由だけでコースを変更することは認めない。コースで学ぶ中で、転コースした方がより適切な指導を受けられる場合などが想定される。転コースについては、学びのアドバイザーが当該学生と十分相談の上で決定する。

(46 ページ)

(2) 卒業要件

本学部における卒業要件は以下のとおりである。

科目区分名称		単位数	
		必修	選択
教養科目		9	11
学部 共通 科目	グローバル系科目	10	6
	データサイエンス系科目	10	2
	共創科学系科目	10	
	人文・社会科学系科目	6	8
	自然科学系科目	4	8
	卒業研究	6	
コース 専門科目	国際地域共生学 コース専門科目		26
	生命圏循環共生学 コース専門科目		
	総合人間科学コース 専門科目		
	上記の科目群から必要 選択単位数を超えて履修する科目		8

本学部では、地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、社会的課題が複雑多様化する現代社会の状況を踏まえ、多様な人々と協働した取り組みの下、人文・社会科学から自然科学に至る広汎な知をつなぐことで、複眼的な視点から社会的課題を捉え、「総合知」を創造・活用し、未来社会を活力と魅力溢れるものとして構想できる「共創型人材」を育成することを目的としている。本目的を達成するために DP1 から DP6 を設定しており、特に、人文・社会科学から自然科学に至る広汎な知の獲得のため、共創科学系科目 人文・社会科学系科目／自然科学系科目 (以上 36 単位) コース専門科目 (26 単位) を設定し、基礎から専門までをバランス良く知識を修得するように科目を配置している。さらに、複眼的な視点から

(35 ページ)

(2) 卒業要件

本学部における卒業要件は以下の通りである。

教養科目	必修 13 単位	選択 7 単位
外国語科目	必修 8 単位	選択 2 単位
数理・データ サイエンス科目	必修 6 単位	選択 1 単位
地域・グローバル 演習科目	必修 2 単位	選択 5 単位
共創科学コア 科目	必修 22 単位	選択 18 単位
卒業研究	必修 6 単位	
専門科目	必修 8 単位	選択 18 単位
自由科目		選択 8 単位
総単位数	124 単位	

<p><u>社会的課題を捉え、多様な人々と協働して課題を解決するために必要な「共創」をツールとして利用できる能力を養う目的で、グローバル系科目（16単位）、データサイエンス系科目（計12単位）を設置している。以上のように、基礎知識、専門知識、共創の手法、これらの知識・能力に偏りが生じないように、バランス良く卒業要件単位を設定している。</u></p>	
<p>(48 ページ)</p> <p>(1) 海外研修プログラムⅠ・Ⅱ 本学部が育てる人間像では、グローバルな価値観や世界規模の視野をもっていること、また世界や人々の多様性を理解し尊重していること、世界や地域を舞台として高い課題意識をもって多様な人々と協働して主体的に貢献し活躍することを重視している。本学部では、「海外研修プログラムⅠ」と「海外研修プログラムⅡ」を<u>選択科目</u>として設置し、<u>全ての学生が履修するよう指導する。</u>なお、「海外研修プログラムⅠ」と「海外研修プログラムⅡ」の<u>海外派遣先として、静岡大学で既に実施している留学プログラムとオンライン海外研修プログラムを中心に利用する。</u></p>	<p>(36 ページ)</p> <p>(1) 海外研修プログラムⅠ・Ⅱ 本学部が育てる人間像では、グローバルな価値観や世界規模の視野をもっていること、また世界や人々の多様性を理解し尊重していること、世界や地域を舞台として高い課題意識をもって多様な人々と協働して主体的に貢献し活躍することを重視している。本学部では、「海外研修プログラムⅠ」と「海外研修プログラムⅡ」を<u>選択必修科目</u>として設置し、<u>学生にはこれらの科目を履修することを推奨する。</u></p>
<p>(48 ページ)</p> <p>Ⅰ) 「海外研修プログラムⅠ」 帰国後、本研修プログラムで得た語学スキル、異文化理解、国際感覚を活用し、本学部で開講されている外国語科目での学びで発展させながら、3年次に開講される「海外研修プログラムⅡ」へ繋げる。</p> <p>Ⅱ) 「海外研修プログラムⅡ」 このプログラムは、「海外研修プログラムⅠ」を履修済みの学生向けに開講予定で</p>	<p>(36 ページ)</p> <p>Ⅰ) 「海外研修プログラムⅠ」 帰国後、本研修プログラムで得た語学スキル、異文化理解、国際感覚を活用し、本学部で開講されている外国語科目での学びで発展させながら、<u>2～4年次</u>に開講される「海外研修プログラムⅡ」へ繋げる。</p> <p>Ⅱ) 「海外研修プログラムⅡ」 このプログラムは、「海外研修プログラムⅠ」を履修済みの学生向けに開講予定で</p>

<p>ある。学部専属の海外派遣コーディネーター教員と全学の担当教員との連携した指導の下、<u>現地の大学等への留学（半年程度）</u>や、専門性の高い研修を経験する事で、1年次で学んだ<u>グローバル系科目</u>や「海外研修プログラムⅠ」を通して修得した語学力、異文化理解、国際感覚を<u>更に</u>発展させる。特に本学部の語学教育におけるポリシーである国際社会及び地域社会の課題解決のため、<u>グローバルな視点から対象を捉えるツール</u>として語学運用能力を身につける。具体的には研修先の大学等で、よりアカデミックな語学研修を受け、渡航前に身につけた語学力を現地にて<u>更に</u>発展させる。また語学力向上だけにとどまらず、現地の学生や人と交流することで、国際感覚や異文化理解をより一層深める。帰国後はこの研修プログラムで得たアカデミック語学スキル、異文化理解、国際感覚を生かし、<u>専門科目の学びを深化させることで、CEFR-B2 レベルの高度な英語力を身につけることを目標とする。</u></p>	<p>ある。学部専属の海外派遣コーディネーター教員と全学の担当教員との連携した指導の<u>もと</u>、現地の大学等への留学（半年程度）や、専門性の高い研修を経験する事で、1年次で学んだ<u>外国語科目</u>や「海外研修プログラムⅠ」を通して習得した語学力、異文化理解、国際感覚を<u>さらに</u>発展させる。特に本学部の語学教育におけるポリシーである国際社会及び地域社会の課題解決のため、<u>グローバルな視点から対象を捉えるツール</u>として語学運用能力を身につける。具体的には研修先の大学等で、よりアカデミックな語学研修を受け、渡航前に身につけた語学力を現地にて<u>さらに</u>発展させる。また語学力向上だけにとどまらず、現地の学生や人と交流することで、国際感覚や異文化理解をより一層深める。帰国後はこの研修プログラムで得たアカデミック語学スキル、異文化理解、国際感覚を生かし、<u>専門科目の学びを深化させる。</u></p>
<p>(49 ページ) (2) 海外留学プログラム 「海外研修プログラムⅠ」と「海外研修プログラムⅡ」の海外派遣先として<u>利用可能な</u>、静岡大学で既に実施している留学プログラムとオンライン海外研修プログラムは、<u>以下のとおりである。</u></p>	<p>(37 ページ) (2) 海外留学プログラム 「海外研修プログラムⅠ」と「海外研修プログラムⅡ」の海外派遣先にあたって、<u>静岡大学で既に実施している留学プログラムとオンライン海外研修プログラムを中心に</u>利用する。</p>
<p>(68 ページ) 9. 教員組織の編成の考え方及び特色 (1) 教員組織編成の考え方及び特色 本学部の教員組織の編成にあたっては、<u>国際社会及び地域社会の課題の解決のため、グローバルな視点から対象を捉えるツールとして外国語を活用できる能力を身に</u></p>	<p>(55 ページ) 9. 教員組織の編成の考え方及び特色 (1) 教員組織編成の考え方及び特色 本学部の教員組織の編成にあたっては、<u>国際社会及び地域社会の課題の解決のため、グローバルな視点から対象を捉えるツールとして外国語を活用できる能力を身に</u></p>

<p>つけるため、英語によるコミュニケーション、ディベート、プレゼンテーションの能力を<u>学び、かつ、課題解決能力を身につけるため、1年次から3年次にわたって、海外研修プログラム、コラボラティブ・ワークス、コミュニティサービスラーニングの履修機会を設ける「グローバル系科目」、</u>課題を分析し、解決するために必須となるデータ解析の基礎的な素養を身につけるため、基礎的なプログラミングや統計学的知識・技能を学ぶための「<u>データサイエンス系科目</u>」、人文・社会科学や自然科学の垣根を超えて複眼的に対象を捉える力を身につけるため、教養科目に加え、各コースの専門の基礎にあたる科目を設定した「<u>共創科学系科目</u>」、「<u>人文・社会科学系科目</u>」、「<u>自然科学系科目</u>」について専任教員が担当する体制を整えている。特に、「<u>共創科学系科目</u>」、及び「<u>人文・社会科学系科目</u>」、「<u>自然科学系科目</u>」の中でも必修である、「<u>人間の尊厳と人権</u>」、「<u>国際地域共生概論A（静岡、日本）</u>」、「<u>スポーツ・健康科学</u>」及び選択科目である「<u>応用倫理学概論</u>」、「<u>国際地域共生概論B（アジア・オセアニア）</u>」、「<u>人体の構造と機能</u>」、「<u>地球環境問題と法</u>」、「<u>臨床心理学概論</u>」、「<u>スポーツ文化論</u>」、「<u>都市計画論</u>」、「<u>基礎化学</u>」、「<u>コース専門科目</u>」の選択科目である「<u>グローバル協力論</u>」、「<u>防災まちづくり</u>」、「<u>環境再生科学</u>」、「<u>材料科学</u>」、「<u>デザイン心理学</u>」、「<u>ウェルビーイングの哲学</u>」は、専任教員の教授あるいは准教授が担当するよう配置し、効果的に教育できるように考慮している。</p>	<p>つけるため、英語によるコミュニケーション、ディベート、プレゼンテーションの能力を<u>学ぶための「外国語科目</u>」、課題を分析し、解決するために必須となるデータ解析の基礎的な素養を身につけるため、基礎的なプログラミングや統計学的知識・技能を学ぶための「<u>数理・データサイエンス科目</u>」、課題解決能力を身につけるため、<u>1年次から3年次にわたって、海外研修プログラム、コラボラティブワークス、コミュニティサービスラーニングの履修機会を設ける「地域・グローバル演習科目</u>」、人文・社会科学や自然科学の垣根を超えて複眼的に対象を捉える力を身につけるため、教養科目に加え、各コースの専門の基礎にあたる科目を設定した「<u>共創科学コア科目</u>」について専任教員が担当する体制を整えている。特に、<u>共創科学コア科目</u>の中でも必修である「<u>総合人間科学概論</u>」、「<u>バイオエコノミー概論</u>」、「<u>暮らしの科学</u>」、「<u>人間の尊厳と人権</u>」、「<u>応用倫理学概論</u>」、「<u>国際地域創造概論Ⅰ（静岡、日本）</u>」、及び選択必修である「<u>スポーツ・健康科学</u>」、「<u>カーボンニュートラル科学</u>」、「<u>防災・減災論</u>」、「<u>国際地域創造概論Ⅱ（アジア・オセアニア）</u>」、「<u>人体の構造と機能</u>」、「<u>環境政策と法</u>」、「<u>臨床心理学概論</u>」、「<u>スポーツ文化論</u>」、「<u>生物多様性保全論</u>」、「<u>都市計画論</u>」は、専任教員の教授あるいは准教授が担当するよう配置し、効果的に教育できるように考慮している。</p>
---	---

5. 本学部の入学者選抜では、例えば、共通テストを課さない学校推薦型選抜や社会人、留学生については数学や理科の学力を確認することとなっていないが、生命圏循環共生学研究 I などの数学や理科の一定の学力が必要と見受けられる科目は必修となっているものの、円滑な履修を支援する体制について記載がなく、適切な教育課程や支援体制となっているか不明確である。適切な教育課程が編成されていることを改めて説明するとともに、必要に応じて、入学者選抜の方法も含めて関係する記載について適切に改めること。

(対応)

1. 適切な教育課程や学修支援体制を整備する

(1) 「共通テストを課さない総合型選抜」で入学した学生に対して、リメディアル教育として入学前準備教育講座を実施する。数学・理系科目の未履修等による学力不足、授業不安への対応、入学までの学習習慣の維持を目的とし、既に他学部で導入している数学(30時間)、理科(30時間)の通信教材(学生負担)を紹介して自学自習を進める。学修支援担当者として、教員(非常勤講師)2名を充てる。このことにより、大学で教育を受けるにあたって支障を生じさせないようにする。

(2) 入学後の学部共通科目(データサイエンス系科目、自然科学系科目等)への円滑な接続を図るため、希望者(学びのアドバイザーからの履修指導を受けた学生を含む)に対してリメディアル教育を実施する。正規授業外に補習講義①「統計数学入門」(30時間・前期1コマ)及び②「化学・生物入門」(30時間・前期1コマ)を開設する。学修支援担当者として、教員(非常勤講師)2名、及び大学院生(TA)を充てる。学修支援担当者は、学びのアドバイザーと学修の状況を共有し、学びの深度に応じて補習授業等を検討する。

2. 適切な学力を担保するため、入学者選抜方法を変更する

(1) 「共通テストを課さない総合型選抜」について

①対象者の見直し

「社会人・私費外国人若干名を含む」としていたが、日本語での論述試験は留学生に適合し難いと考えられるため、当該選抜対象から私費外国人を削除し、理科と数学を含む日本留学試験を課す「私費外国人留学生選抜」において若干名を選抜することとする。

②出願資格の見直し

数学や理科の学力とは別に、アドミッション・ポリシー1.「外国語(特に英語)や数理・データサイエンスを学ぶ上で必要な基礎的知識として、英語や数学を履修していること」と整合させ英語力を担保するため、英語力に関する資料提出を出願資格に付記する。

③定員の見直し

後段で説明するようにスポーツ系入試枠(定員16名)を廃止するため、その人数を他

の入試選抜枠に配分し、総合型選抜の定員を22名から28名に増員した。そのうち「全学科枠：20名」、「専門学科及び総合学科枠：8名」とする。当初の計画では「それぞれ半数」としていたが、アドミッション・ポリシー1.「外国語（特に英語）や数理・データサイエンスを学ぶ上で必要な基礎的知識として、英語や数学を履修していること」と整合させるため、専門高校枠を減員し、一般高校枠を増員させる。

（2）「共通テストを課さない学校推薦型選抜」の取りやめ

アドミッション・ポリシーに基づいた適切な学力を担保するため、計画を見直し当該選抜を取りやめることとする。

（3）「共通テストを課す学校推薦型選抜」について

スポーツ系入試枠（定員5名）を廃止し、文理融合系入試枠を定員10名から20名に増員する。

（4）「一般選抜」について

スポーツ系入試枠（定員6名）を廃止し、一般選抜前期日程の定員枠を44名から47名に増員する。また、一般選抜後期日程の定員枠を23名から20名に減員する。定員の変更は、前期と後期の人数比を大きく変更せず、かつ本学部を第一志望とする意欲的な入学者を確保することを理由としている。

（5）「私費外国人留学生選抜」について

私費外国人留学生入試は、募集定員を若干名（入学定員115名の内数）とする。この入試では、日本留学試験、英語資格試験、面接（口頭試問含む）により総合的に判断する。各試験の配点は、以下のとおりとする。

日本留学試験	数学(コース2)・理科(2科目自由選択)	400
	日本語	200
	日本語(記述)	25
英語資格試験		100
個別試験	面接(口頭試問を含む)	500
合計		1225

※日本留学試験及び英語資格試験は、それぞれの試験の満点を表記されている点数に換算して利用する。

3. アドミッション・ポリシーと入試選抜方法との整合を見直す

本学部のアドミッション・ポリシーは、「求める学生像」「大学入学までに身につけておくべき教科・科目等」に基づき以下の三点にまとめられる。

1. 外国語（特に英語）や数理・データサイエンスを学ぶ上で必要な基礎的知識として、英語や数学を履修していること
2. 文系と理系を含めた様々な分野を学習し、幅広い基礎的知識を修得していること
3. 地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、様々な社会的課題の解決に取り組み、よりよい未来社会の実現に貢献することに意欲をもっていること

（1）スポーツ系入試の取りやめ

本学部は「ウェルビーイングの実現へ向かうよう尽力する（-設置等の趣旨-）」という設置趣旨を重視し、スポーツを通じた活動経験から、人間への理解に意欲のある学生が一定数入学することを期待し、スポーツに秀でた学生の特別選抜枠（スポーツ系）として、「共通テストを課さない学校推薦型選抜（定員5名）」、「共通テストを課す学校推薦型選抜（定員5名）」、「一般入試・前期日程（定員6名）」を計画していた。

しかし、アドミッション・ポリシー1.「外国語（特に英語）や数理・データサイエンスを学ぶ上で必要な基礎的知識として、英語や数学を履修していること」、アドミッション・ポリシー2.「文系と理系を含めた様々な分野を学習し、幅広い基礎的知識を修得していること」との整合を検討した結果、計画を見直し、スポーツ系の特別枠を取りやめ、文理融合型の入学者を広く選抜することとする。

なお、スポーツ系入試枠の16名は共通テストを課さない総合型選抜と共通テストを課す学校推薦型選抜の定員に配分する。

（2）アドミッション・ポリシーの評価方法

アドミッション・ポリシーに対応する評価方法は以下のとおりとする。

○一般選抜 前期日程

- 1：①大学入学共通テスト、②個別学力検査（教科） を用いて評価する。
- 2：①大学入学共通テスト、②個別学力検査（教科） を用いて評価する。
- 3：⑥志望理由書 を用いて評価する。

○一般選抜 後期日程

- 1：①大学入学共通テスト、②個別学力検査（教科） を用いて評価する。
- 2：①大学入学共通テスト を用いて評価する。
- 3：③小論文 を用いて評価する。

○共通テストを課す学校推薦型選抜

- 1：①大学入学共通テスト を用いて評価する。
- 2：①大学入学共通テスト、④面接、⑤調査書 を用いて評価する。
- 3：④面接、⑤調査書、⑥志望理由書、⑦活動歴報告書 を用いて評価する。

○共通テストを課さない総合型選抜（社会人若干名を含む）

- 1：③聴講・論述試験 ④面接 を用いて評価する。
- 2：③聴講・論述試験、④面接 を用いて評価する。
- 3：④面接、⑥志望理由書、⑦活動歴報告書 を用いて評価する。

○私費外国人留学生選抜

- 1：⑧日本留学試験、⑨英語資格試験 を用いて評価する。
- 2：⑧日本留学試験 ④面接 を用いて評価する。
- 3：④面接 を用いて評価する。

（新旧対照表）設置の趣旨等を記載した書類

新	旧
<p>(59 ページ)</p> <p>8. 入学者選抜の概要</p> <p>(1) アドミッション・ポリシー</p> <p>【アドミッション・ポリシー（入学者受入の方針）】</p> <p>[育てる人間像]</p> <p>地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、社会的課題が多様化・複雑化する現代社会の状況を踏まえ、人文・社会科学から自然科学に至る多様な知を結びつけ複眼的アプローチから諸課題に取り組み、未来社会を構想できる共創型の人材を育成します。また、人々や世界の多様性を理解し尊重した上で、多様な背景をもつ人々と協働して社会的課題の解決に取り組むことのできる人材を育成します。</p> <p>[目指す教育]</p> <p>人文・社会科学から自然科学に至る幅広い知を繋げることを通して、複眼的観点から社会的課題を的確に捉え「総合知」を活用し、これからの課題解決に取り組む人材を育成するため、課題解決に必要な広汎な知識、異分野の人材を深く連携させ「総合知」を活用できる知識・能力、解決策を発想するための創造性、多様な背景をもつ</p>	<p>(47 ページ)</p> <p>8. 入学者選抜の概要</p> <p>(1) アドミッション・ポリシー</p> <p>【アドミッション・ポリシー（入学者受入の方針）】</p> <p>[育てる人間像]</p> <p>地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、社会的課題が多様化・複雑化する現代社会の状況を踏まえ、人文・社会科学から自然科学に至る多様な知を結びつけ複眼的アプローチから諸課題に取り組み、未来社会を構想・デザインできる共創型の人材を育成します。また、人々や世界の多様性を理解し尊重した上で、多様な背景をもつ人々と協働して社会的課題の解決に取り組むことのできる人材を育成します。</p> <p>[目指す教育]</p> <p>人文・社会科学から自然科学に至る幅広い知を繋げることを通して、複眼的観点から社会的課題を的確に捉え「総合知」を活用し、これからの課題解決に取り組む人材を育成するため、課題解決に必要な広汎な知識、異分野の人材を深く連携させ「総合知」を活用できる知識・能力、解決策を発想するための創造性、多様な背景をもつ</p>

人々と協働する能力を身につけます。また、新しい社会の価値や仕組みを構想できる人材を育成するため、基本的な知識・技能として、外国語（特に英語）と数理・データサイエンスの能力と技能を養います。

<略>

[入学者選抜の基本方針]

静岡大学グローバル共創科学部は、「求める学生像」「大学入学までに身につけておくべき教科・科目等」に基づき以下の三点を評価します。一般選抜では基礎的な学力を重視し、学校推薦型選抜、及び総合型選抜では社会・環境・人間等への関心や問題解決への意欲を含めて総合的に判定します。

[重点評価項目]

1. 外国語（特に英語）や数理・データサイエンスを学ぶ上で必要な基礎的知識として、英語や数学を履修していること
2. 文系と理系を含めた様々な分野を学習し、幅広い基礎的知識を修得していること
3. 地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、様々な社会的課題の解決に取り組み、よりよい未来社会の実現に貢献することに意欲をもっていること

入学者選抜の基本方針に対応する評価方法は、以下のとおりとします。

○一般選抜 前期日程

1：①大学入学共通テスト、②個別学力検査（教科）を用いて評価する。

2：①大学入学共通テスト、②個別学力検査（教科）を用いて評価する。

3：⑥志望理由書を用いて評価する。

○一般選抜 後期日程

1：①大学入学共通テスト、②個別学力検査（教科）を用いて評価する。

人々と協働する能力を身につけます。また、新しい社会の価値や仕組みを構想・デザインできる人材を育成するため、基本的な知識・技能として、外国語（特に英語）と数理・データサイエンスの能力と技能を養います。

<略>

[入学者選抜の基本方針]

静岡大学グローバル共創科学部のディプロマ・ポリシーおよびカリキュラム・ポリシーに沿って、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体性・協働性」等を評価します。一般選抜では基礎的な学力を重視し、学校推薦型選抜、及び総合型選抜では社会・環境・人間等への関心や問題解決への意欲を含めて総合的に判定します。

[重点評価項目]

入試区分	入学者選抜方法	知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度
一般選抜 (前期日程)	大学入学共通テスト	○	○	
	個別学力検査（教科）	○	○	
一般選抜 (後期日程)	大学入学共通テスト	○	○	
	個別学力検査（教科）	○	○	
共通テストを課さない 学校推薦型選抜	小論文	○	○	○
	面接等	○	○	○
共通テストを課す 学校推薦型選抜	大学入学共通テスト	○	○	
	面接	○	○	○
総合型選抜	論述試験	○	○	○
	面接等	○	○	○

<p>2 : <u>①大学入学共通テスト を用いて評価する。</u></p> <p>3 : <u>③小論文 を用いて評価する。</u></p> <p><u>○共通テストを課す学校推薦型選抜</u></p> <p>1 : <u>①大学入学共通テスト を用いて評価する。</u></p> <p>2 : <u>①大学入学共通テスト、④面接、⑤調査書 を用いて評価する。</u></p> <p>3 : <u>④面接、⑤調査書、⑥志望理由書、⑦活動歴報告書 を用いて評価する。</u></p> <p><u>○共通テストを課さない総合型選抜（社会人若干名を含む）</u></p> <p>1 : <u>③聴講・論述試験 ④面接 を用いて評価する。</u></p> <p>2 : <u>③聴講・論述試験、④面接 を用いて評価する。</u></p> <p>3 : <u>④面接、⑥志望理由書、⑦活動歴報告書 を用いて評価する。</u></p> <p><u>○私費外国人留学生選抜</u></p> <p>1 : <u>⑧日本留学試験、⑨英語資格試験 を用いて評価する。</u></p> <p>2 : <u>⑧日本留学試験 ④面接 を用いて評価する。</u></p> <p>3 : <u>④面接 を用いて評価する。</u></p>	
<p>(62 ページ)</p> <p>(2) 選抜方法、選抜体制</p> <p>本学部では、<u>大学入学共通テストを課さない総合型選抜（社会人若干名を含む）、大学入学共通テストを課す学校推薦型選抜、個別学力検査による一般選抜（前期日程・後期日程）、日本留学試験を課す「私費外国人留学生選抜」</u>を併用することで、多様な人材の選抜を実施する。</p> <p>実施体制としては、一般選抜の個別学力検査、総合型選抜・学校推薦型選抜の面接は、当該学部の所属教員によって当該キャ</p>	<p>(48 ページ)</p> <p>(2) 選抜方法、選抜体制</p> <p>本学部では、<u>総合型選抜（社会人・私費外国人若干名を含む）、大学入学共通テストを課さない学校推薦型選抜、共通テストを課す学校推薦型選抜、個別学力検査による一般選抜（前期日程・後期日程）</u>を併用することで、多様な人材の選抜を実施する。<u>定員枠は文系・理系を同一配点で評価する文理融合系に 99 名を充て、スポーツに秀でた学生を評価するスポーツ系の入試枠に 16 名を充てる。</u>本学部では、<u>人間のウェルビーイングに貢献する人材育成を重</u></p>

ンパスにて実施される。各選抜方法における募集人員を次表に示す。

選抜方式	文理融合系
共通テストを課さない総合型選抜 (社会人若干名を含む)	28名
共通テストを課す学校推薦型選抜	20名
一般選抜 前期日程	47名
一般選抜 後期日程	20名
私費外国人留学生選抜	若干名
合計	115名

要な指針の1つとしており、スポーツを通じた活動経験から、人間への理解に意欲のある学生が一定数入学することも期待している。

実施体制としては、一般選抜の個別学力検査、総合型選抜・学校推薦型選抜の面接は、当該学部の所属教員によって当該キャンパスにて実施される。各選抜方法における募集人員を次表に示す。

選抜方式	文理融合系	スポーツ系	計
総合型選抜 (社会人・私費外国人若干名を含む)	22名	-	22名
共通テストを課さない学校推薦型選抜	-	5名	5名
共通テストを課す学校推薦型選抜	10名	5名	15名
一般選抜 前期日程	44名	6名	50名
一般選抜 後期日程	23名	-	23名
合計	99名	16名	115名

(62 ページ)

I) 共通テストを課さない総合型選抜

総合型選抜は募集人員を 28名 とし、聴講・論述試験 及び面接試験によって、アドミッション・ポリシーに沿った選抜試験を実施する。聴講・論述試験、面接試験では、地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、様々な社会的課題の解決に取り組み、よりよい未来社会の実現に貢献することに意欲ある学生を評価する。提出書類として、調査書と志望理由書に加え、英語に関する資料、これまでの活動歴を報告するための文書である活動歴報告書の提出を求める。活動歴報告書にはさまざまな活動への取組状況を示す証明書等を添付可能とする。これらの書類は、面接試験において考慮される。聴講・論述試験では、講義形式あるいは文書形式の題材を与え、その内容理解に基づいて、提出された課題について

(49 ページ)

I) 総合型選抜

総合型選抜は募集人員を 22名 とし、論述試験 及び面接試験によって、アドミッション・ポリシーに沿った選抜試験を実施する。論述試験、面接試験では、地球規模の課題から地域社会の課題に至るまで、様々な社会的課題の解決に取り組み、よりよい未来社会の実現に貢献することに意欲ある学生を評価する。提出書類として、調査書と志望理由書に加え、これまでの活動歴を報告するための文書である活動歴報告書の提出を求める。活動歴報告書には外国語の能力を示すスコアやさまざまな活動への取組状況を示す証明書等を添付可能とする。これらの書類は、面接試験において考慮される。論述試験では、講義形式あるいは文書形式の題材を与え、その内容理解に基づいて、提出された課題について論述させ、

て論述させ、文系・理系の基礎学力、思考力、発想力等を評価する。面接試験では、入学を期待する学生像にあるように、社会貢献の意欲や文系・理系双方への意欲等を評価する。20名を全学科枠とし、残りを専門学科・総合学科枠とする。定員28名のうち若干名は社会人を選抜対象とする。社会人の選抜方法については、以下の(3)社会人の受入れ方策に示す。

II) 共通テストを課す学校推薦型選抜

共通テストを課す学校推薦型選抜は、募集人員を20名とする。この入試では、共通テストと面接試験を総合的に評価する。面接試験では、アドミッション・ポリシーに沿った選抜試験を実施する。提出書類として、調査書と志望理由書に加え、これまでの活動歴を報告するための文書である活動歴報告書の提出を求める。活動歴報告書には外国語の能力を示すスコアやさまざまな活動への取組状況を示す証明書等を添付可能とする。これらの書類は、面接試験において考慮される。共通テストと面接試験の配点は以下のとおりとする。共通テストは、4教科5科目700点、面接点は600点とし、これらを総合的に評価する。

入試枠	<u>20名</u>
共通テスト	700点
面接	600点
合計	1300点

文系・理系の基礎学力、思考力、発想力等を評価する。面接試験では、入学を期待する学生像にあるように、社会貢献の意欲や文系・理系双方への意欲等を評価する。半数を全学科枠とし、残りを専門学科・総合学科枠とする。定員22名のうち若干名は社会人と私費外国人を選抜対象とする。社会人と私費外国人の選抜方法については、以下の(3)社会人、留学生等の受入れ方策に示す。

II) 共通テストを課さない学校推薦型選抜

共通テストを課さない学校推薦型選抜は、募集人員を5名とする。この入試では、スポーツ系に優れた人材を選抜することを目的としたもので、既存の地域創造学環プログラムで実施していたスポーツ系の学校推薦型選抜に準じている。調査書に加え、独自の入学後に挑戦してみたいことを問う「学びの計画書」と「運動歴調査書」によって書類審査を行う。これらの資料をもとに、小論文と面接によって総合的に評価する。

III) 共通テストを課す学校推薦型選抜

共通テストを課す学校推薦型選抜は、募集人員を15名とする。この入試では、共通テストと面接試験を総合的に評価する。面接試験では、アドミッション・ポリシーに沿った選抜試験を実施する。共通テストと面接試験の配点は以下の通りとする。文理融合系とスポーツ系では、共通テストは、それぞれ4教科5科目700点と3教科3科目600点とし、面接点は600点ずつとし、これらを総合的に評価する。

	入試枠	文理融合系 10名	スポーツ系 5名
	共通テスト	700点	600点
	面接	600点	600点
	合計	1300点	1200点
<p>(64 ページ)</p> <p>Ⅲ) 一般選抜 前期日程</p> <p><u>一般選抜前期日程試験は、募集人員を47名とする。共通テストは多角的思考力の観点から6教科7科目（地理歴史又は理科を2科目選択した場合は5教科7科目）とし、広い学問領域への理解を求める。個別学力試験は、英語（コミュニケーション英語Ⅰ・コミュニケーション英語Ⅱ・コミュニケーション英語Ⅲ、英語表現Ⅰ、英語表現Ⅱ）を必須とし、国語（国語総合・現代文B・古典B[古文・漢文]）と数学（数学Ⅰ・数学Ⅱ・数学A・数学B）から1科目を選択することで、文系・理系双方からの受験が可能となる。個別学力検査は、高等学校学習指導要領に準拠する。また、提出書類として、志望理由書を求め、社会貢献の意欲や文系・理系双方への意欲等を評価する。</u></p>	<p>(52 ページ)</p> <p>Ⅳ) 一般選抜 前期日程</p> <p><u>一般入試前期日程試験は、募集人員を50名とする。そのうち44名を文理融合系の定員枠とする。共通テストは多角的思考力の観点から6教科7科目（地理歴史または理科を2科目選択した場合は5教科7科目）とし、広い学問領域への理解を求める。個別学力試験は、英語（コミュニケーション英語Ⅰ・コミュニケーション英語Ⅱ・コミュニケーション英語Ⅲ、英語表現Ⅰ、英語表現Ⅱ）を必須とし、国語（国語総合・現代文B・古典B[古文・漢文]）と数学（数学Ⅰ・数学Ⅱ・数学A・数学B）から1科目を選択することで、文系・理系双方からの受験が可能となる。また、6名のスポーツ系の定員枠を設ける。スポーツ系の場合には、共通テストについては、共通テストを課す学校推薦型選抜の配点と同一とする。個別学力試験として、実技と小論文を課す。スポーツ系の場合には共通テストよりも個別学力試験を重視する。個別学力検査は、高等学校学習指導要領に準拠する。</u></p>		

<p>配点</p> <table border="1"> <tr> <td colspan="2">共通テスト</td> <td>900</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">個別試験</td> <td>英語</td> <td>必須</td> <td>200</td> </tr> <tr> <td>国語</td> <td>1つ</td> <td rowspan="2">200</td> </tr> <tr> <td>数学</td> <td>選択</td> </tr> <tr> <td colspan="2">志望理由書</td> <td>100</td> </tr> <tr> <td colspan="2">合計</td> <td>1400</td> </tr> </table> <p>(スポーツ系の配点表削除)</p>	共通テスト		900	個別試験	英語	必須	200	国語	1つ	200	数学	選択	志望理由書		100	合計		1400	<p>文理融合系 配点</p> <table border="1"> <tr> <td colspan="2">共通テスト</td> <td>900</td> </tr> <tr> <td rowspan="3">個別試験</td> <td>英語</td> <td>必須</td> <td>200</td> </tr> <tr> <td>国語</td> <td>1つ</td> <td rowspan="2">200</td> </tr> <tr> <td>数学</td> <td>選択</td> </tr> <tr> <td colspan="2">合計</td> <td>1300</td> </tr> </table> <p>スポーツ系 配点</p> <table border="1"> <tr> <td colspan="2">共通テスト</td> <td>600</td> </tr> <tr> <td rowspan="2">個別試験</td> <td>実技</td> <td>600</td> </tr> <tr> <td>小論文</td> <td>200</td> </tr> <tr> <td colspan="2">合計</td> <td>1400</td> </tr> </table>	共通テスト		900	個別試験	英語	必須	200	国語	1つ	200	数学	選択	合計		1300	共通テスト		600	個別試験	実技	600	小論文	200	合計		1400
共通テスト		900																																											
個別試験	英語	必須	200																																										
	国語	1つ	200																																										
	数学	選択																																											
志望理由書		100																																											
合計		1400																																											
共通テスト		900																																											
個別試験	英語	必須	200																																										
	国語	1つ	200																																										
	数学	選択																																											
合計		1300																																											
共通テスト		600																																											
個別試験	実技	600																																											
	小論文	200																																											
合計		1400																																											
<p>(66 ページ)</p> <p>IV) 一般選抜 後期日程</p> <p><u>一般選抜後期日程試験は、募集人員を20名とする。個別学力試験として、英語（コミュニケーション英語 I・コミュニケーション英語 II・コミュニケーション英語 III、英語表現 I、英語表現 II）と小論文を課し、語学力と自己表現力等を評価する。共通テストは一般選抜 前期試験と同様の配点比率とするが、合計点 900 点を 600 점에換算する。個別試験の合計得点は 400 点とする。個別学力検査は、高等学校学習指導要領に準拠する。</u></p> <p>V) 私費外国人留学生選抜</p> <p><u>私費外国人留学生選抜試験は、募集人員を若干名（入学定員 115 名の内数）とする。個別学力試験として、日本留学試験、英語資格試験、面接（口頭試問含む）により総合的に判断する。各試験の配点は、以下のとおりとする。</u></p>	<p>(54 ページ)</p> <p>V) 一般選抜 後期日程</p> <p><u>一般入試後期日程試験は、募集人員を23名とし、すべて文理融合系の枠とする。個別学力試験として、英語（コミュニケーション英語 I・コミュニケーション英語 II・コミュニケーション英語 III、英語表現 I、英語表現 II）と小論文を課し、語学力と自己表現力等を評価する。共通テストは一般選抜 前期試験と同様の配点比率とするが、合計点 900 点を 600 점에換算する。個別試験の合計得点は 600 点とする。個別学力検査は、高等学校学習指導要領に準拠する。</u></p>																																												

配点		
日本留学試験	数学(コース2)・理科(2科目自由選択)	400
	日本語	200
	日本語(記述)	25
英語資格試験		100
個別試験	面接(口頭試問を含む)	500
合計		1225

<p>(67 ページ)</p> <p>(3) 社会人の受入れ方策</p> <p>社会人入試(募集人員:若干名)/大学入学資格を有する社会人で、社会人経験3年以上であり、入学年度の4月1日時点で満21歳以上の者を対象とした選抜を行う。</p> <p>(4) 既修得単位の認定方法及び認定の考え方</p> <p>既修得単位の認定は、本学規定「入学前の既修得単位等の単位認定に関する規定」に則り判断する。</p> <p>(5) 入学前後のリメディアル教育</p> <p><u>I)「共通テストを課さない総合型選抜」</u>で入学した学生に対して、リメディアル教育として入学前準備教育講座を実施する。<u>数学・理系科目の未履修等による学力不足、授業不安への対応、入学までの学習習慣の維持を目的とし、既に他学部で導入している数学(30時間)、理科(30時間)の通信教材(学生負担)を紹介して自学自習を進める。学修支援担当者として、教員(非常勤講師)2名を充てる。このことにより、大学で教育を受けるにあたって支障を生じさせないようにする。</u></p>	<p>(55 ページ)</p> <p>(3) 社会人、留学生等の受入れ方策</p> <p><u>私費外国人留学生入試(募集人員:若干名)/私費外国人留学生入試では、日本留学試験及び英語資格試験等(TOEFL-iBT、TOEIC L&R、IELTS等)を課し、基礎学力を重視する。更に口述試験(プレゼンテーションを含む)を課し、コミュニケーション能力、志向・意欲・学力を、多面的・総合的に評価する。</u></p> <p>社会人入試(募集人員:若干名)/大学入学資格を有する社会人で、社会人経験3年以上であり、入学年度の4月1日時点で満21歳以上の者を対象とした選抜を行う。<u>大学入学共通テストは課さず、選抜は小論文、プレゼンテーション・口述試験の結果、調査書及び志願理由書により総合的に行う。</u></p> <p>(4) 既修得単位の認定方法及び認定の考え方</p> <p>既修得単位の認定は、本学規定「入学前の既修得単位等の単位認定に関する規定」に則り判断する。</p>
--	---

<p>II) 入学後の学部共通科目（データサイエンス系科目、自然科学系科目等）への円滑な接続を図るため、希望者（学びのアドバイザーからの履修指導を受けた学生を含む）に対してリメディアル教育を実施する。正規授業外に補習講義①「統計数学入門」（30時間・前期1コマ）及び②「化学・生物入門」（30時間・前期1コマ）を開設する。学修支援担当者として、教員（非常勤講師）2名、及び大学院生（TA）を充てる。学修支援担当者は、学びのアドバイザーと学修の状況を共有し、学びの深度に応じて補習授業等を検討する。</p>	
--	--

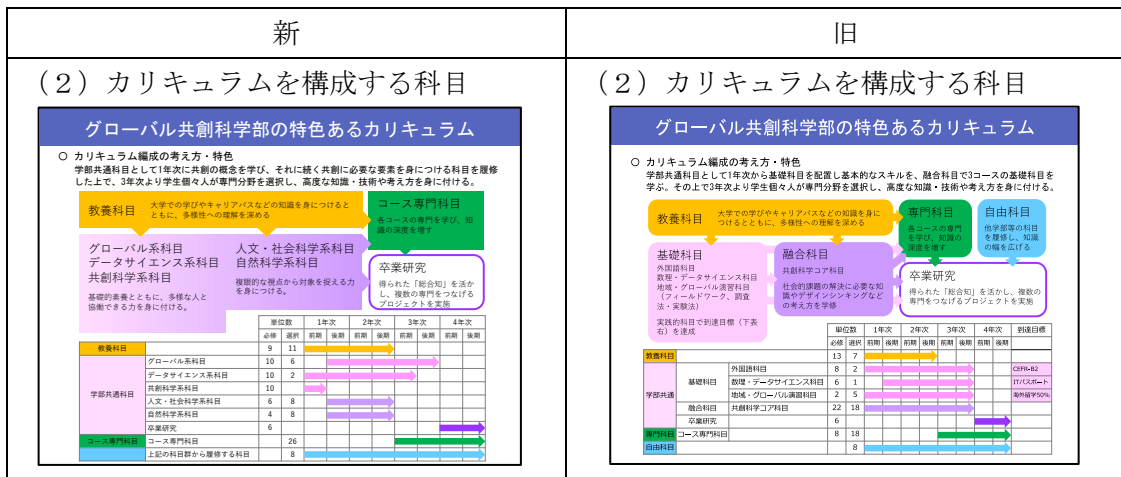
6. 設置の趣旨等を記載した書類の17ページの図では到達目標としてITパスポートの記載があるが、同資料の取得可能な民間資格には記載がないため、適切に改めること。

(対応)

ITパスポートについては、本学部の履修により取得できる資格ではなく、一般的に受験可能な資格であることから、設置の趣旨等を記載した書類P46の【取得可能な民間資格】として記載していなかった。よって、設置の趣旨等を記載した書類のP17の図と齟齬があることから、当該図の「到達目標」欄を削除する。なお、当該図内の科目群名称についても、是正事項4での指摘を踏まえた科目群名称に変更する。



(新旧対照表) 設置の趣旨等を記載した書類 (17 ページ)



(是正事項) グローバル共創科学部 グローバル共創科学科

7. 審査意見 5 への対応を踏まえ、入学者選抜等について、必要に応じて適切に改めること。

(対応)

是正事項 5 の検討から、入試選抜方法と募集人員を以下のとおり変更する。

本学部では、共通テストを課さない総合型選抜（社会人若干名を含む）、共通テストを課す学校推薦型選抜、個別学力検査による一般選抜（前期日程・後期日程）、日本留学試験を課す「私費外国人留学生選抜」を併用することで、多様な人材の選抜を実施する。

各選抜方法における募集人員を次表に示す。

【新】

選抜方式	文理融合系
共通テストを課さない総合型選抜 (社会人若干名を含む)	28 名
共通テストを課す学校推薦型選抜	20 名
一般選抜 前期日程	47 名
一般選抜 後期日程	20 名
私費外国人留学生選抜	若干名
合計	115 名

【旧】

選抜方式	文理融合系	スポーツ系	計
総合型選抜 (社会人・私費外国人若干名を含む)	22 名	-	22 名
共通テストを課さない学校推薦型選抜	-	5 名	5 名
共通テストを課す学校推薦型選抜	10 名	5 名	15 名
一般選抜 前期日程	44 名	6 名	50 名
一般選抜 後期日程	23 名	-	23 名
合計	99 名	16 名	115 名

(その他) グローバル共創科学部 グローバル共創科学科

設置認可申請書類に誤記や不備があるため再度確認を行い、修正した。

(対応)

設置認可申請書類の誤記や不備について改めて点検した結果、「教育課程等の概要」等に誤記や不備があったため、以下のとおり修正する。

(新旧対照表)

教育課程等の概要 (別記様式第2号 (その2の1))

新	旧
教養基礎科目 「キャリアデザイン」 備考欄 オムニバス・ <u>共同 (一部)</u>	教養基礎科目 「キャリアデザイン」 備考欄 <u>オムニバス</u>
小計欄 専任教員等の配置 准教授 <u>4</u> 備考欄 兼 <u>48</u>	小計欄 専任教員等の配置 准教授 <u>6</u> 備考欄 兼 <u>91</u>
教養展開科目 「現代の社会」 備考欄 <u>オムニバス</u>	教養展開科目 「現代の社会」 備考欄 (記載なし)
「化学の世界」 専任教員等の配置 (准教授 1 を削除)	「化学の世界」 専任教員等の配置 准教授 <u>1</u>
留学生科目 小計欄 備考欄 兼 <u>5</u>	留学生科目 小計欄 備考欄 兼 <u>7</u>

<p>グローバル系科目</p> <p>「海外研修プログラムⅠ」</p> <p>備考欄</p> <p><u>共同・集中</u></p> <p>「海外研修プログラムⅡ」</p> <p>備考欄</p> <p><u>共同・集中</u></p> <p>「ファシリテーション概論」</p> <p>配当年次</p> <p>1 後</p> <p>備考欄</p> <p><u>集中</u></p> <p>「アートラボ」</p> <p>備考欄</p> <p><u>オムニバス・共同 (一部)</u></p> <p>共創科学系科目</p> <p>「アートシンキング・デザインシンキング」</p> <p>備考欄</p> <p><u>オムニバス</u></p> <p>人文・社会科学系科目</p> <p>「アート・デザインコミュニケーション」</p> <p>備考欄</p> <p><u>オムニバス</u></p> <p>自然科学系科目</p> <p>「カーボンニュートラル科学」</p> <p>備考欄</p> <p><u>オムニバス</u></p>	<p>地域・グローバル演習科目</p> <p>「海外研修プログラムⅠ」</p> <p>備考欄</p> <p><u>共同</u></p> <p>「海外研修プログラムⅡ」</p> <p>備考欄</p> <p><u>共同</u></p> <p>「ファシリテーション概論」</p> <p>配当年次</p> <p>1 <u>集中</u></p> <p>備考欄</p> <p>(記載なし)</p> <p>「アートラボ」</p> <p>備考欄</p> <p><u>共同</u></p> <p>共創科学コア科目</p> <p>「アートシンキング・デザインシンキング」</p> <p>備考欄</p> <p><u>共同</u></p> <p>共創科学コア科目</p> <p>「アート・デザインコミュニケーション」</p> <p>備考欄</p> <p><u>共同</u></p> <p>共創科学コア科目</p> <p>「カーボンニュートラル科学」</p> <p>備考欄</p> <p><u>共同 (一部)</u></p>
---	---

<p>国際地域共生学コース専門科目</p> <p>「国際地域共生学研究Ⅰ」</p> <p>単位数 <u>選択</u> 2</p> <p>「国際地域共生学研究Ⅱ」</p> <p>単位数 <u>選択</u> 2</p> <p>「国際地域共生学演習Ⅰ」</p> <p>単位数 <u>選択</u> 2</p> <p>「国際地域創共生演習Ⅱ」</p> <p>単位数 <u>選択</u> 2</p>	<p>コース専門科目</p> <p>「国際地域創造学研究Ⅰ」</p> <p>単位数 <u>必修</u> 2</p> <p>「国際地域創造学研究Ⅱ」</p> <p>単位数 <u>必修</u> 2</p> <p>「国際地域創造学演習Ⅰ」</p> <p>単位数 <u>必修</u> 2</p> <p>「国際地域創造学演習Ⅱ」</p> <p>単位数 <u>必修</u> 2</p>
<p>生命圏循環共生学コース専門科目</p> <p>「生命圏循環共生学研究Ⅰ」</p> <p>単位数 <u>選択</u> 2</p> <p>「生命圏循環共生学研究Ⅱ」</p> <p>単位数 <u>選択</u> 2</p> <p>「生命圏循環共生学演習Ⅰ」</p> <p>単位数 <u>選択</u> 2</p> <p>「生命圏循環共生学演習Ⅱ」</p> <p>単位数 <u>選択</u> 2</p>	<p>コース専門科目</p> <p>「生命圏循環共生学研究Ⅰ」</p> <p>単位数 <u>必修</u> 2</p> <p>「生命圏循環共生学研究Ⅱ」</p> <p>単位数 <u>必修</u> 2</p> <p>「生命圏循環共生学演習Ⅰ」</p> <p>単位数 <u>必修</u> 2</p> <p>「生命圏循環共生学演習Ⅱ」</p> <p>単位数 <u>必修</u> 2</p>

<p>総合人間科学コース専門科目</p> <p>「総合人間科学研究Ⅰ」</p> <p>単位数 <u>選択</u> 2</p> <p>「総合人間科学研究Ⅱ」</p> <p>単位数 <u>選択</u> 2</p> <p>「総合人間科学演習Ⅰ」</p> <p>単位数 <u>選択</u> 2</p> <p>「総合人間科学演習Ⅱ」</p> <p>単位数 <u>選択</u> 2</p> <p>小計欄</p> <p>単位数 必修 <u>0</u>、<u>選択</u> <u>102</u></p> <p>専任教員等の配置 教授 <u>14</u>、准教授 <u>8</u>、講師 <u>3</u>、助教 <u>2</u></p> <p>備考欄 兼 <u>17</u></p> <p>卒業研究 (小計欄追加)</p> <p>合計欄</p> <p>単位数 必修 <u>55</u>、<u>選択</u> <u>279</u></p> <p>専任教員等の配置 教授 <u>13</u>、准教授 <u>9</u>、講師 <u>3</u>、助教 <u>2</u></p> <p>備考欄 兼 <u>102</u></p>	<p>コース専門科目</p> <p>「総合人間科学研究Ⅰ」</p> <p>単位数 <u>必修</u> 2</p> <p>「総合人間科学研究Ⅱ」</p> <p>単位数 <u>必修</u> 2</p> <p>「総合人間科学演習Ⅰ」</p> <p>単位数 <u>必修</u> 2</p> <p>「総合人間科学演習Ⅱ」</p> <p>単位数 <u>必修</u> 2</p> <p>小計欄</p> <p>単位数 必修 <u>24</u>、<u>選択</u> <u>78</u></p> <p>専任教員等の配置 教授 <u>77</u>、准教授 <u>45</u>、講師 <u>19</u>、助教 <u>12</u></p> <p>備考欄 兼 <u>18</u></p> <p>卒業研究 (小計欄なし)</p> <p>合計欄</p> <p>単位数 必修 <u>77</u>、<u>選択</u> <u>240</u></p> <p>専任教員等の配置 教授 <u>146</u>、准教授 <u>84</u>、講師 <u>33</u>、助教 <u>29</u></p> <p>備考欄 兼 <u>192</u></p>
--	---

授業科目の概要（別記様式第2号（その3の1））

新	旧
<p>スポーツⅠ</p> <p>講義等の内容</p> <p>クラス毎に、<u>ネオホッケー、フライングディスク、ターゲットゴルフ</u>等の個別の種目を取り扱う。</p>	<p>スポーツⅠ</p> <p>講義等の内容</p> <p>クラス毎に、<u>ソフトボール、サッカー、卓球</u>等の個別の種目を取り扱う。</p>
<p>スポーツⅡ</p> <p>講義等の内容</p> <p>クラス毎に、<u>テニス</u>等の個別の種目を取り扱う。</p>	<p>スポーツⅡ</p> <p>講義等の内容</p> <p>クラス毎に、<u>バスケットボール、テニス、ダンス</u>等の個別の種目を取り扱う。</p>
<p>健康体育実技Ⅰ</p> <p>講義等の内容</p> <p>クラス毎に、<u>バスケットボール、ハンドボール</u>等の個別の種目を取り扱う。</p>	<p>健康体育実技Ⅰ</p> <p>講義等の内容</p> <p>クラス毎に、<u>テニス、バレーボール、ハンドボール</u>等の個別の種目を取り扱う。</p>
<p>健康体育実技Ⅰ</p> <p>講義等の内容</p> <p>クラス毎に、<u>バレーボール、バドミントン</u>等の個別の種目を取り扱う。</p>	<p>健康体育実技Ⅱ</p> <p>講義等の内容</p> <p>クラス毎に、<u>サッカー、バドミントン、ソフトボール</u>等の個別の種目を取り扱う。</p>
<p>キャリアデザイン</p> <p>講義等の内容</p> <p>(オムニバス方式・一部共同／全8回)</p> <p><u>(⑨ 須藤智・29 宇賀田栄次・81 滑田明暢／2回) (共同)</u></p> <p><u>先輩や OBOG の大学生活の歩みなどを通して、自分のキャリア形成について考えさせる。</u></p> <p><u>映像教材を用いて、今後、静岡大学でどのように学ぶのかを考えさせる。</u></p> <p><u>(⑨ 須藤智・81 滑田明暢／1回) (共同)</u></p> <p><u>職場や生活場面における男女共同参</u></p>	<p>キャリアデザイン</p> <p>講義等の内容</p> <p>(オムニバス方式／全8回)</p> <p>(15 須藤智／1回)</p>

<p><u>画の現状を理解させ、それとの関わりから各自のキャリア形成を考えさせる。</u></p> <p>(⑨ 須藤智/1回)</p> <p>備考欄 オムニバス・<u>共同</u> (一部)</p>	<p>備考欄 <u>オムニバス</u></p>
<p>現代の社会</p> <p>備考欄 <u>オムニバス</u></p>	<p>現代の社会</p> <p>備考欄 <u>共同</u></p>
<p>海外研修プログラム I</p> <p>備考欄 <u>共同</u>・<u>集中</u></p>	<p>海外研修プログラム I</p> <p>備考欄 <u>共同</u></p>
<p>海外研修プログラム I</p> <p>備考欄 <u>共同</u>・<u>集中</u></p>	<p>海外研修プログラム II</p> <p>備考欄 <u>共同</u></p>
<p>コラボラティブ・ワークス I</p> <p>講義等の内容 ④<u>解決</u></p>	<p>コラボラティブ・ワークス I</p> <p>講義等の内容 ④<u>探求</u></p>
<p>コラボラティブ・ワークス II</p> <p>講義等の内容 ④<u>解決</u></p>	<p>コラボラティブ・ワークス II</p> <p>講義等の内容 ④<u>探求</u></p>
<p>コラボラティブ・ワークス III</p> <p>講義等の内容 ④<u>解決</u></p>	<p>コラボラティブ・ワークス III</p> <p>講義等の内容 ④<u>探求</u></p>
<p>ファシリテーション概論</p> <p>備考欄 <u>集中</u></p>	<p>ファシリテーション概論</p> <p>備考欄 (記載なし)</p>
<p>アートラボ</p> <p>講義等の内容</p>	<p>アートラボ</p> <p>講義等の内容</p>

<p><u>(オムニバス方式・一部共同／全8回)</u> <u>1回 (② 下村勝・⑭ 立花由美子／1回) (共同)</u> <u>ガイダンス</u> <u>2～5回 (② 下村勝／4回)</u> <u>製図の基本知識、CADによる演習課題、3Dプリンタによる造形、産業プロダクトデザインに関する企業インタビュー</u> <u>6～8回 (⑭ 立花由美子／3回)</u> <u>アートプロジェクトにおけるプランニング、制作、実践</u></p> <p>備考欄 <u>オムニバス・共同 (一部)</u></p> <p>プログラミング演習 I 講義等の内容 <u>プログラミングは情報科学の専門領域</u>だけの学問ではなく、人文社会科学、自然科学を横断するデータサイエンスの知識・技術として重要である。(一文削除) 本科目では、プログラミング言語の Python を用いて、変数とデータ型、リスト、タプル、辞書、条件分岐、繰り返し、関数、クラスなどについて演習形式で学ぶ。</p> <p>プログラミング演習 II 講義等の内容 <u>プログラミングは情報科学の専門領域</u>だけの学問ではなく、人文社会科学、自然科学を横断するデータサイエンスの知識・技術として重要である。(一文削除) 本科目ではプログラミング演習 I の内容をさらに発展させ、フローチャート、探索(線形探索、2分探索)、整列(選択法、バブルソート、他)、文字列処理(探索、</p>	<p>(オムニバス方式の場合の教員ごとの氏名、担当する回数及び内容の記載なし)</p> <p>備考欄 <u>共同</u></p> <p>プログラミング演習 I 講義等の内容 <u>情報科学は一部の専門領域だけの学問</u>ではなく、人文社会科学、自然科学を横断する総合知識・技術として重要である。<u>したがって、情報科学を支えるプログラミング技術を理解することは今後の社会生活における知識として有用である。</u>本科目では、プログラミング言語の Python を用いて、変数とデータ型、リスト、タプル、辞書、条件分岐、繰り返し、関数、クラスなどについて演習形式で学ぶ。</p> <p>プログラミング演習 II 講義等の内容 <u>情報科学は一部の専門領域だけの学問</u>ではなく、人文社会科学、自然科学を横断する総合知識・技術として重要である。<u>したがって、情報科学を支えるプログラミング技術を理解することは今後の社会生活における知識として有用である。</u>本科目ではプログラミング演習 I の内容をさらに発展させ、フローチャート、探索</p>
---	---

<p>置換)、データ構造、統計量の計算などについて、<u>チーム学習等を取り入れた演習形式で学ぶ。</u></p> <p>総合人間科学概論 講義等の内容 (3 堂園 俊彦 /5回)</p> <p>バイオエコノミー概論 講義等の内容 (オムニバス方式/全15回) (1 平井浩文/1回) <u>微生物による資源とエネルギーの再生</u> (② 下村勝/1回) <u>太陽光エネルギーによる電力供給</u> (⑥ 青木憲治/1回) <u>セルロース/樹脂複合材料の開発と実用化</u> (⑦ 池田恵子/1回) <u>災害リスク削減による災害に強い経済社会への取組</u> (⑧ 板倉美奈子/1回) バイオエコノミーに向けての法制 (16 富田涼都/4回) ガイダンス、ゲームチェンジャーとしてのグリーンディール、資源の持続的利用と地域経済、<u>生態系サービスと環境リスクをめぐる社会文化の再構築</u> (24 小池亨/1回) <u>バイオ技術を用いた健康・医療問題解決への挑戦</u> (⑩ 太田美帆/1回) 持続可能性と北欧福祉国家の戦略 (⑱ 本橋令子/3回) 求められるバイオエコノミー技術の開発、植物資源のエネルギー利用、「環境</p>	<p>(線形探索、2分探索)、整列(選択法、バブルソート、他)、文字列処理(探索、置換)、データ構造、統計量の計算などについて、<u>演習形式で学ぶ。</u></p> <p>総合人間科学概論 講義等の内容 (3 堂園 俊彦 /4回)</p> <p>バイオエコノミー概論 講義等の内容 (オムニバス方式/全15回) (1 平井浩文/1回) <u>資源とエネルギーの再生 I</u> (4 下村勝/1回) <u>資源とエネルギーの再生 III</u> (11 青木憲治/1回) <u>資源とエネルギーの再生 II</u> (12 池田恵子/1回) <u>自然災害からの再生 I</u> (13 板倉美奈子/1回) バイオエコノミーに向けての法制 (16 富田涼都/4回) ガイダンス、ゲームチェンジャーとしてのグリーンディール、資源の持続的利用と地域経済、<u>身体と環境の再生 II</u> (24 小池亨/1回) <u>身体と環境の再生 I</u> (27 太田美帆/1回) 持続可能性と北欧福祉国家の戦略 (35 本橋令子/3回) 求められるバイオエコノミー技術の開発、<u>資源とエネルギーの再生 IV、資源とエネルギーの再生 V</u> (57 原田賢治/1回) <u>自然災害からの再生 II</u></p>
--	--

<p><u>ホトニクス」による資源とエネルギーの再生</u> (57 原田賢治／1回)</p> <p><u>持続可能で安全安心な地域共創に向けた自然災害からの再生</u></p> <p>国際地域社会とダイバーシティ 講義等の内容 (オムニバス方式／全15回) (① 江口昌克／1回)</p> <p>共生原論 (10 正木祐史／1回)</p> <p>子どもの権利と法的課題 (⑦ 池田恵子／1回)</p> <p>災害・防災におけるダイバーシティ (⑨ 須藤智／1回)</p> <p>高齢者 (16 富田涼都／1回)</p> <p>環境問題におけるダイバーシティ (19 祝原豊／1回)</p> <p>スポーツ・アスリートにおけるダイバーシティの現状と課題 (⑭ 立花由美子／1回)</p> <p>アートにおけるダイバーシティの展開 (⑮ 川崎和也／1回)</p> <p>多文化共生 (51 山本崇記／7回)</p> <p>ダイバーシティ原論、レイシズム、アイヌ・沖縄、被差別部落、ジェンダー／セクシュアリティ、<u>ハンセン病、HIV、新型コロナウイルスから見る感染症差別、障害者</u></p> <p>アートシンキング・デザインシンキング 講義等の内容 <u>(オムニバス方式／全15回)</u> 1～7回 (⑭ 立花由美子／7回)</p>	<p>国際地域社会とダイバーシティ 講義等の内容 (オムニバス方式／全15回) (2 江口昌克／1回)</p> <p>共生原論 (10 正木祐史／1回)</p> <p><u>子ども</u> (12 池田恵子／1回)</p> <p>災害とダイバーシティ (15 須藤智／1回)</p> <p>高齢者 (16 富田涼都／1回)</p> <p>環境問題とダイバーシティ (19 祝原豊／1回)</p> <p>スポーツとダイバーシティ (25 立花由美子／1回)</p> <p>アートとダイバーシティ (26 川崎和也／1回)</p> <p>多文化共生 (51 山本崇記／7回)</p> <p>ダイバーシティ原論、レイシズム、アイヌ・沖縄、被差別部落、ジェンダー／セクシュアリティ、<u>病者、障害者</u></p> <p>アートシンキング・デザインシンキング 講義等の内容 (オムニバス方式の場合の教員ごとの氏名、担当する回数及び内容の記載な</p>
--	--

<p><u>アートシンキングにおける事例研究</u> <u>8～15回 (59 川原崎知洋／8回)</u> <u>デザインシンキングにおける事例研究</u> 備考欄 オムニバス</p> <p>人間の尊厳と人権 講義等の内容 (3 堂園俊彦・10 正木祐史・13 板倉美奈子／2回) <u>(共同)</u></p> <p>アート・デザインコミュニケーション 講義等の内容 <u>(オムニバス方式／全15回)</u> <u>1～7回 (14 立花由美子／7回)</u> <u>アートコミュニケーションにおける事例研究</u> <u>8～15回 (59 川原崎知洋／8回)</u> <u>コミュニケーションデザインにおける事例研究</u> 備考欄 <u>オムニバス</u></p> <p>暮らしの科学 講義等の内容 (2 下村勝・28 栗井光一郎／2回) <u>(共同)</u> <u>ガイダンスおよびまとめ</u></p> <p>スポーツ・健康科学 講義等の内容 (オムニバス方式・一部共同／全15回) (9 杉山康司・19 祝原豊／1回) <u>(共同)</u></p>	<p>し)</p> <p>備考欄 <u>共同</u></p> <p>人間の尊厳と人権 講義等の内容 (3 堂園俊彦、10 正木祐史、13 板倉美奈子／2回)</p> <p>アート・デザインコミュニケーション 講義等の内容 (オムニバス方式の場合の教員ごとの氏名、担当する回数及び内容の記載なし)</p> <p>備考欄 <u>共同</u></p> <p>暮らしの科学 講義等の内容 (4 下村勝、28 栗井光一郎／2回)</p> <p>スポーツ・健康科学 講義等の内容 (オムニバス方式、一部共同／全15回) (9 杉山康司・19 祝原豊／1回)</p>
--	---

<p>カーボンニュートラル科学</p> <p>講義等の内容</p> <p><u>(オムニバス方式／全15回)</u></p> <p><u>(1 平井浩文/2回)</u></p> <p><u>バイオマス増産による二酸化炭素固定、リグノセルロースと微生物</u></p> <p><u>(2) 下村勝/8回)</u></p> <p><u>総括、地球温暖化問題とエネルギー消費、物質循環の基礎化学、エネルギーの基礎化学、太陽光の利用、熱の利用、触媒による有機物の分解、産業におけるカーボンニュートラル</u></p> <p><u>(6) 青木憲治/1回)</u></p> <p><u>セルロースとセルロースナノファイバー</u></p> <p><u>(14 水谷洋一/2回)</u></p> <p><u>日本及び欧米諸国におけるカーボンニュートラル政策</u></p> <p><u>(28 栗井光一郎/2回)</u></p> <p><u>光合成、バイオ燃料</u></p> <p>備考欄</p> <p><u>オムニバス</u></p> <p>防災・減災論</p> <p>講義等の内容</p> <p><u>(7) 池田恵子・73 原田賢治/1回)</u></p> <p><u>(共同)</u></p> <p><u>(57 原田賢治/7回)</u></p> <p><u>災害と防災・減災/災害過程/地震による災害と防災・減災/津波による災害と防災・減災/火山噴火による災害と防災・減災/台風・豪雨による災害と防災・減災/まとめと討議(静岡で発生する災害の理解、ハザードマップ、災害情報、わたしの避難計画)</u></p>	<p>カーボンニュートラル科学</p> <p>講義等の内容</p> <p>(オムニバス方式の場合の教員ごとの氏名、担当する回数及び内容の記載なし)</p> <p>備考欄</p> <p>記載なし</p> <p>防災・減災論</p> <p>講義等の内容</p> <p>(12 池田恵子・73 原田賢治/1回)</p> <p>(73 原田賢治/7回)</p> <p><u>災害と防災・減災/災害過程/地震災害と防災・減災1/津波災害と防災・減災2/風水害と防災・減災1/風水害と防災・減災2/まとめと討議(静岡で発生する災害の理解、ハザードマップ、災害情報、わたしの避難計画)</u></p>
--	---

<p>人体の構造と機能 講義等の内容 自身や他者の健康・安全の実現には、 疾病予防だけでなく健常な状態の維持 が<u>重要</u>となる。</p> <p>国際・地域の安全と法 講義等の内容 (10 正木祐史・⑧ 板倉美奈子/2回) <u>(共同)</u></p> <p>スポーツの理論と実践 I 講義等の内容 (9 杉山康司・19 祝原豊/1回) <u>(共 同)</u> 新しいスポーツへの挑戦 (9 杉山康司・19 祝原豊・⑪ 村田 真一・23 平嶋裕輔/1回) <u>(共同)</u> ニュースポーツを改善するテーマディ スカッションと実践 (9 杉山康司・23 平嶋裕輔/1回) <u>(共同)</u> アダプテッド対人系ゲーム ブライン ドフットサル (19 祝原豊・⑪ 村田真一/1回) <u>(共同)</u> ネットスポーツ バルンバレーボール (⑪ 村田真一・23 平嶋裕輔/1回) <u>(共同)</u></p> <p>スポーツの理論と実践 II 講義等の内容 (9 杉山康司・19 祝原豊/4回) (共 同) バスケットボールに関する戦略・戦術 について解説し、それを実現するた めの計画法の理解と実技能力の向上を図</p>	<p>人体の構造と機能 講義等の内容 自身や他者の健康・安全の実現には、 疾病予防だけでなく健常な状態の維持 が<u>需要</u>となる。</p> <p>国際・地域の安全と法 講義等の内容 (10 正木祐史・13 板倉美奈子/2回)</p> <p>スポーツの理論と実践 I 講義等の内容 (9 杉山康司・19 祝原豊/1回) 新しいスポーツへの挑戦 (9 杉山康司・19 祝原豊・20 村田 真一・23 平嶋裕輔/1回) ニュースポーツを改善するテーマディ スカッションと実践 (9 杉山康司・23 平嶋裕輔/1回) アダプテッド対人系ゲーム ブライン ドフットサル (19 祝原豊・20 村田真一/1回) ネットスポーツ バルンバレーボール (20 村田真一・23 平嶋裕輔/1回)</p> <p>スポーツの理論と実践 II 講義等の内容 (9 杉山康司・19 祝原豊/4回) (共 同) バスケットボールに関する戦略・戦術 について解説し、それを実現するた めの計画法の理解と実技能力の向上を図</p>
--	---

<p>る。</p> <p><u>(⑩ 村田真一・24 平嶋祐輔／1回)</u></p> <p><u>(共同)</u></p> <p><u>ゴール型球技の進化とプレイヤーの在</u></p> <p><u>り方についてまとめる。</u></p> <p>(⑩ 村田真一／4回)</p> <p>(中略)</p> <p>(24 平嶋祐輔／<u>6</u>回)</p>	<p>る。</p> <p>(20 村田真一／4回)</p> <p>(中略)</p> <p>(24 平嶋祐輔／<u>7</u>回)</p>
--	--

教員の氏名等（別記様式第3号（その2の1））

新	旧
<p>調書番号 1 平井浩文 担当授業科目の名称 カーボンニュートラル科学※ 担当単位数 <u>0.3</u></p>	<p>調書番号 1 平井浩文 担当授業科目の名称 <u>カーボンニュートラル科学</u> 担当単位数 <u>2</u></p>
<p>調書番号② 下村勝 担当授業科目の名称 アトラボ※ カーボンニュートラル科学※ 担当単位数 <u>0.6</u> <u>1</u></p>	<p>調書番号 4 下村勝 担当授業科目の名称 <u>アトラボ</u> <u>カーボンニュートラル科学</u> 担当単位数 <u>2</u> <u>2</u></p>
<p>調書番号③ REDFORD STEVEN WADE 担当授業科目の名称 Oral Communication I 国際地域共生学研究 I 担当単位数 <u>2</u> <u>2</u></p>	<p>調書番号 5 REDFORD STEVEN WADE 担当授業科目の名称 Oral Communication I 国際地域創造学研究 I ※ 担当単位数 <u>1</u> <u>0.4</u></p>
<p>調書番号④ Greenidge Darius C 担当授業科目の名称 国際地域共生学研究 I 担当単位数 <u>2</u></p>	<p>調書番号 6 Greenidge Darius C 担当授業科目の名称 国際地域創造学研究 I ※ 担当単位数 <u>0.4</u></p>
<p>調書番号⑤ 朱曄 担当授業科目の名称</p>	<p>調書番号 7 朱曄 担当授業科目の名称</p>

<p>国際地域共生学研究 I</p> <p>担当単位数</p> <p><u>2</u></p> <p>調書番号⑥</p> <p>青木賢治</p> <p>担当授業科目の名称</p> <p>カーボンニュートラル科学※</p> <p>担当単位数</p> <p><u>0.1</u></p> <p>調書番号⑦</p> <p>池田恵子</p> <p>担当授業科目の名称</p> <p>国際地域共生学研究 I</p> <p>担当単位数</p> <p><u>2</u></p> <p>調書番号⑧</p> <p>板倉美奈子</p> <p>担当授業科目の名称</p> <p>日本国憲法</p> <p>配当年次</p> <p><u>1 後</u></p> <p>年間開講数</p> <p><u>1</u></p> <p>調書番号 14</p> <p>水谷洋一</p> <p>担当授業科目の名称</p> <p>カーボンニュートラル科学※</p> <p>担当単位数</p> <p><u>0.3</u></p> <p>調書番号 16</p> <p>富田涼都</p> <p>担当授業科目の名称</p>	<p>国際地域創造学研究 I ※</p> <p>担当単位数</p> <p><u>0.5</u></p> <p>調書番号 11</p> <p>青木賢治</p> <p>担当授業科目の名称</p> <p>カーボンニュートラル科学</p> <p>担当単位数</p> <p><u>2</u></p> <p>調書番号 12</p> <p>池田恵子</p> <p>担当授業科目の名称</p> <p>国際地域創造学研究 I ※</p> <p>担当単位数</p> <p><u>0.5</u></p> <p>調書番号 13</p> <p>板倉美奈子</p> <p>担当授業科目の名称</p> <p>日本国憲法</p> <p>配当年次</p> <p><u>2 前</u></p> <p>年間開講数</p> <p><u>2</u></p> <p>調書番号 14</p> <p>水谷洋一</p> <p>担当授業科目の名称</p> <p>カーボンニュートラル科学</p> <p>担当単位数</p> <p><u>2</u></p> <p>調書番号 16</p> <p>富田涼都</p> <p>担当授業科目の名称</p>
--	--

<p>現代の社会※</p> <p>配当年次 1後</p> <p>担当単位数 0.3</p> <p>調書番号⑩</p> <p>石川宏之</p> <p>担当授業科目の名称 国際地域共生学研究 I</p> <p>担当単位数 2</p> <p>調書番号⑭</p> <p>立花由美子</p> <p>担当授業科目の名称 アートラボ※ アートシンキング・デザインシンキング※ アート・デザインコミュニケーション※ 国際地域共生学研究 I</p> <p>担当単位数 0.4 0.9 0.9 2</p> <p>調書番号⑮</p> <p>川崎和也</p> <p>担当授業科目の名称 国際地域共生学研究 I</p> <p>担当単位数 2</p>	<p>現代の社会</p> <p>配当年次 2後</p> <p>担当単位数 2</p> <p>調書番号 17</p> <p>石川宏之</p> <p>担当授業科目の名称 国際地域創造学研究 I ※</p> <p>担当単位数 0.5</p> <p>調書番号 25</p> <p>立花由美子</p> <p>担当授業科目の名称 アートラボ アートシンキング・デザインシンキング アート・デザインコミュニケーション 国際地域創造学研究 I ※</p> <p>担当単位数 1 2 2 0.5</p> <p>調書番号 26</p> <p>川崎和也</p> <p>担当授業科目の名称 国際地域創造学研究 I ※</p> <p>担当単位数 0.5</p>
---	---

<p>調書番号⑯</p> <p>太田美帆</p> <p>担当授業科目の名称 国際地域共生学研究 I</p> <p>担当単位数 <u>2</u></p> <p>調書番号 28</p> <p>粟井光一郎</p> <p>就任（予定）年月 ＜令和 5 年 <u>10</u> 月＞</p> <p>担当授業科目の名称 カーボンニュートラル科学※</p> <p>担当単位数 <u>0.3</u></p> <p>調書番号 29</p> <p>宇賀田栄次</p> <p>担当授業科目の名称 現代の社会※</p> <p>担当単位数 <u>0.3</u></p> <p>担当授業科目の名称 ファシリテーション概論</p> <p>配当年次 <u>1 後</u></p> <p>調書番号 33</p> <p>井柳美紀</p> <p>就任（予定）年月 ＜令和 6 年 <u>10</u> 月＞</p> <p>調書番号 34</p> <p>今泉文寿</p> <p>就任（予定）年月 ＜令和 7 年 <u>10</u> 月＞</p>	<p>調書番号 27</p> <p>太田美帆</p> <p>担当授業科目の名称 国際地域創造学研究 I ※</p> <p>担当単位数 <u>0.5</u></p> <p>調書番号 28</p> <p>粟井光一郎</p> <p>就任（予定）年月 ＜令和 5 年 <u>4</u> 月＞</p> <p>担当授業科目の名称 <u>カーボンニュートラル科学</u></p> <p>担当単位数 <u>2</u></p> <p>調書番号 29</p> <p>宇賀田栄次</p> <p>担当授業科目の名称 <u>現代の社会</u></p> <p>担当単位数 <u>2</u></p> <p>担当授業科目の名称 ファシリテーション概論</p> <p>配当年次 <u>1 集中</u></p> <p>調書番号 33</p> <p>井柳美紀</p> <p>就任（予定）年月 ＜令和 6 年 <u>4</u> 月＞</p> <p>調書番号 34</p> <p>今泉文寿</p> <p>就任（予定）年月 ＜令和 7 年 <u>4</u> 月＞</p>
---	---

<p>調書番号 39 栗原誠 就任（予定）年月 <令和5年<u>10</u>月></p> <p>調書番号 46 川本竜彦 就任（予定）年月 <令和6年<u>10</u>月></p> <p>調書番号 47 冬木春子 就任（予定）年月 <令和6年<u>10</u>月> 担当授業科目の名称 現代の社会※ 配当年次 <u>1</u>後 担当単位数 <u>0.3</u></p> <p>調書番号 48 藤井真生 就任（予定）年月 <令和6年<u>10</u>月></p> <p>調書番号 49 松本敏隆 就任（予定）年月 <令和6年<u>10</u>月></p> <p>調書番号 50 山本隆太 就任（予定）年月 <令和5年<u>10</u>月></p>	<p>調書番号 39 栗原誠 就任（予定）年月 <令和5年<u>4</u>月></p> <p>調書番号 46 川本竜彦 就任（予定）年月 <令和6年<u>4</u>月></p> <p>調書番号 47 冬木春子 就任（予定）年月 <令和6年<u>4</u>月> 担当授業科目の名称 現代の社会 配当年次 <u>2</u>後 担当単位数 <u>2</u></p> <p>調書番号 48 藤井真生 就任（予定）年月 <令和6年<u>4</u>月></p> <p>調書番号 49 松本敏隆 就任（予定）年月 <令和6年<u>4</u>月></p> <p>調書番号 50 山本隆太 就任（予定）年月 <令和5年<u>4</u>月></p>
---	--

<p>調書番号 51 山本崇記 担当授業科目の名称 現代の社会※ 配当年次 1後 担当単位数 0.3</p> <p>調書番号 52 大西由香 就任（予定）年月 <令和6年10月></p> <p>調書番号 53 一家崇志 就任（予定）年月 <令和6年10月></p> <p>調書番号 59 川原崎知洋 就任（予定）年月 <令和5年4月></p> <p>調書番号 61 前東晃礼 就任（予定）年月 <令和5年10月></p> <p>調書番号 62 永田正樹 就任（予定）年月 <令和6年10月></p> <p>調書番号 67 雨森聡 就任（予定）年月</p>	<p>調書番号 51 山本崇記 担当授業科目の名称 現代の社会 配当年次 2後 担当単位数 2</p> <p>調書番号 52 大西由香 就任（予定）年月 <令和6年4月></p> <p>調書番号 53 一家崇志 就任（予定）年月 <令和6年4月></p> <p>調書番号 59 川原崎知洋 就任（予定）年月 <令和6年4月></p> <p>調書番号 61 前東晃礼 就任（予定）年月 <令和5年4月></p> <p>調書番号 62 永田正樹 就任（予定）年月 <令和6年4月></p> <p>調書番号 67 雨森聡 就任（予定）年月</p>
---	--

<p><令和5年<u>10</u>月> 担当授業科目の名称 <u>現代の社会</u>※ 配当年次 <u>1</u>後 担当単位数 <u>0.4</u></p> <p>調書番号 71 杉山卓也 就任（予定）年月 <令和5年<u>10</u>月></p> <p>調書番号 72 生川友恒 就任（予定）年月 <令和<u>5</u>年<u>10</u>月> 担当授業科目の名称 <u>現代の社会</u>※ 配当年次 <u>1</u>後 担当単位数 <u>0.3</u></p> <p>調書番号 75 天野豊己 就任（予定）年月 <令和6年<u>10</u>月></p> <p>調書番号 76 田阪美樹 就任（予定）年月 <令和6年<u>10</u>月></p>	<p><令和5年<u>4</u>月> 担当授業科目の名称 <u>現代の社会</u> 配当年次 <u>2</u>後 担当単位数 <u>2</u></p> <p>調書番号 71 杉山卓也 就任（予定）年月 <令和5年<u>4</u>月></p> <p>調書番号 72 生川友恒 就任（予定）年月 <令和<u>6</u>年<u>4</u>月> 担当授業科目の名称 <u>現代の社会</u> 配当年次 <u>2</u>後 担当単位数 <u>2</u></p> <p>調書番号 75 天野豊己 就任（予定）年月 <令和6年<u>4</u>月></p> <p>調書番号 76 田阪美樹 就任（予定）年月 <令和6年<u>4</u>月></p>
--	---

<p>調書番号 78 保坂哲也 就任（予定）年月 ＜令和 6 年 <u>10</u> 月＞</p> <p>調書番号 83 内山智尋 就任（予定）年月 ＜令和 7 年 <u>10</u> 月＞</p> <p>調書番号 84 原瑠璃彦 就任（予定）年月 ＜令和 7 年 <u>10</u> 月＞</p> <p>調書番号 88 江草智弘 就任（予定）年月 ＜令和 7 年 <u>10</u> 月＞</p> <p>調書番号 94 翟勇 就任（予定）年月 ＜令和 <u>5</u> 年 <u>10</u> 月＞</p> <p>調書番号 97 Lewis Allen Schilb 就任（予定）年月 ＜令和 5 年 <u>10</u> 月＞</p> <p>調書番号 105 河合学 就任（予定）年月 ＜令和 5 年 <u>10</u> 月＞</p>	<p>調書番号 78 保坂哲也 就任（予定）年月 ＜令和 6 年 <u>4</u> 月＞</p> <p>調書番号 83 内山智尋 就任（予定）年月 ＜令和 7 年 <u>4</u> 月＞</p> <p>調書番号 84 原瑠璃彦 就任（予定）年月 ＜令和 7 年 <u>4</u> 月＞</p> <p>調書番号 88 江草智弘 就任（予定）年月 ＜令和 7 年 <u>4</u> 月＞</p> <p>調書番号 94 翟勇 就任（予定）年月 ＜令和 6 年 <u>4</u> 月＞</p> <p>調書番号 97 Lewis Allen Schilb 就任（予定）年月 ＜令和 5 年 <u>4</u> 月＞</p> <p>調書番号 105 河合学 就任（予定）年月 ＜令和 5 年 <u>4</u> 月＞</p>
--	--

<p>調書番号 108 原澤伊都夫 就任（予定）年月 ＜令和6年<u>10</u>月＞</p> <p>調書番号 118 長津恒輝 就任（予定）年月 ＜令和6年<u>10</u>月＞</p> <p>調書番号 123 林恵嗣 就任（予定）年月 ＜令和6年<u>10</u>月＞</p> <p>調書番号 124 鈴木パトリシア 就任（予定）年月 ＜令和5年<u>10</u>月＞</p> <p>調書番号 126 鈴木和美 就任（予定）年月 ＜令和6年<u>10</u>月＞</p>	<p>調書番号 108 原澤伊都夫 就任（予定）年月 ＜令和6年<u>4</u>月＞</p> <p>調書番号 118 長津恒輝 就任（予定）年月 ＜令和6年<u>4</u>月＞</p> <p>調書番号 123 林恵嗣 就任（予定）年月 ＜令和6年<u>4</u>月＞</p> <p>調書番号 124 鈴木パトリシア 就任（予定）年月 ＜令和5年<u>4</u>月＞</p> <p>調書番号 126 鈴木和美 就任（予定）年月 ＜令和6年<u>4</u>月＞</p>
---	--

上記のほか、誤字脱字等の不備を修正した。